

ファカティリンケージ・プログラム Faculty Linkage Program

社会的ニーズに直結した、多彩な「学びの場」

活動報告書

2017年度

中央大学全学連携教育機構

FLP 2017 年度 活動報告書の発刊に寄せて

2017 年度ファカルティ・リンケージプログラム「Faculty-Linkage Program」(通称 FLP)の活動報告書が、ここに完成しました。

FLP は、総合大学として確固たる実績と伝統ある中央大学だからこそ構築できる全学横断的な学修システムです。現在開講の 5 プログラム(環境、ジャーナリズム、国際協力、スポーツ・健康科学、地域・公共マネジメント)の担当教員は、中央大学に置かれるすべての学部並びに FLP の運営組織である全学連携教育機構から、それぞれの専門分野に応じてプログラム教育の担い手として構成されています。

学生諸君が所属する学部では学びきれない視点や活動を FLP は実践することを目指し、併せて、その結果をもって、さらに所属学部での勉学を向上させるという、FLP は、まさに教育活動の相乗効果をも期待した教育プログラムといえます。そのため、学生諸君が担当教員と最も近い距離で学ぶ「ゼミナール方式」を中心に教育活動が展開されています。

FLP の 3 年間では、所属学部で修得した内容の向上、FLP でのゼミナール方式による教育の実践と担当教員からの直接指導、ゼミ生同士のふれあいと切磋琢磨といったことを通じて、研究テーマの深化のみならず、全人格的な涵養も修めることができると申し上げます。

「FLP 活動報告書」は、学生と担当教員のこうした教育実践の記録です。

ここに表現されている内容は、ごく一断面でしかありません。この内容以上の教育的成果と学生諸君の達成感がこの冊子には無限に詰まっています。

ご高覧いただく皆様におかれましては、表現し切れない担当教員や学生諸君の思いに幾ばくかの思いをはせていただければ幸甚に存じます。

改めまして、FLP に対し、なお一層のご理解とご支援を賜りたくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、この活動報告書をまとめるに際し多大なご尽力いただきました関係各位への御礼をこの場をお借りして申し上げる次第でございます。

2018 年吉日

中央大学全学連携教育機構
機構長 石川 鉄郎

目次

I. 環境プログラム	5
1. 設置の趣旨と教育の目的	5
2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数	6
3. プログラムスケジュール	6
4. プログラムの活動	7
5. 2017 年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先	7
6. 演習教育活動	8
(1) 星野 智 (法学部・教授)	8
(2) 佐々木 創 (経済学部・准教授)	10
(3) 薮田 雅弘 (経済学部・教授)	11
(4) 西川 可穂子 (商学部・教授)	12
(5) 谷下 雅義 (理工学部・教授)	14
(6) 西田 治文 (理工学部・教授)	18
(7) 盛田 富容子 (文学部・兼任講師)	20
(8) ハリスン、ブライアン (総合政策学部・教授)	22
(9) 横山 彰 (総合政策学部・教授)	23
II. ジャーナリズムプログラム	25
1. 設置の趣旨と教育の目的	25
2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数	26
3. プログラムスケジュール	26
4. プログラムの活動	27
5. 2017 年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先	27
6. 演習教育活動	28
(1) 臼井 敏男 (経済学部・客員講師)	28
(2) 辻 泉 (文学部・教授)	34
(3) 松田 美佐 (文学部・教授)	36
(4) 市川 哲夫 (総合政策学部・教授)	38
(5) 大橋 正和 (総合政策学部・教授)	42
(6) 松野 良一 (総合政策学部・教授)	44
(7) 山田 俊治 (全学連携教育機構・兼任講師)	56
III. 国際協力プログラム	58
1. 設置の趣旨と教育の目的	58
2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数	59
3. プログラムスケジュール	59
4. プログラムの活動	60
5. 2017 年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先	60

6. 演習教育活動	61
(1) 小森谷 徳純 (経済学部・准教授)	61
(2) 林 光洋 (経済学部・教授)	62
(3) 武石 智香子 (商学部・教授)	80
(4) 中迫 俊逸 (商学部・教授)	83
(5) 平澤 敦 (商学部・教授)	84
(6) 新原 道信 (文学部・教授)	87
(7) 野宮 大志郎 (文学部・教授)	93
(8) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)	95
(9) 稲葉 誠 (全学連携教育機構・客員教授)	104
IV. スポーツ・健康科学プログラム	107
1. 設置の趣旨と教育の目的	107
2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数	108
3. プログラムスケジュール	108
4. プログラムの活動	109
5. 2017 年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先	109
6. 演習教育活動	110
(1) 宮崎 伸一 (法学部・教授)	110
(2) 村井 剛 (法学部・准教授)	111
(3) 中谷 康司 (経済学部・助教)	114
(4) 市場 俊之 (商学部・教授)	116
(5) 小峯 力 (理工学部・教授)	118
(6) 加納 樹里 (文学部・教授)	121
(7) 布目 靖則 (文学部・教授)	125
(8) 森 正明 (文学部・教授)	127
(9) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	128
V. 地域・公共マネジメントプログラム	138
1. 設置の趣旨と教育の目的	138
2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数	139
3. プログラムスケジュール	139
4. プログラムの活動	140
5. 2017 年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先	140
6. 演習教育活動	141
(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)	141
(2) 工藤 裕子 (法学部・教授)	143
(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)	147
(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)	149
(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)	151

(6) 御船 洋 (商学部・教授)	158
(7) 植野 妙実子 (理工学部・教授)	164
(8) 天田 城介 (文学部・教授)	166
(9) 新原 道信 (文学部・教授)	168
(10) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)	174
(11) 小林 勉 (総合政策学部・教授)	180
(12) 堤 和通 (総合政策学部・教授)	189
(13) 細野 助博 (総合政策学部・教授)	190

I. 環境プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

社会経済システムのグローバルな拡大は、世界各地で深刻な環境・資源問題を引き起こしています。自然の浄化能力を超える環境汚染、自然が再生できない資源の枯渇、多くの生物種の絶滅など、人間の生存基盤である地球・地域の生態系は危機的状況にあります。資源やエネルギーを大量に利用して物質的に豊かな生活を追求した人間の諸活動が、地球温暖化から身近なごみ問題までさまざまな環境問題を引き起こしています。経済社会のグローバル化は、地球規模での持続可能な社会の構築を求めています。

こうした問題を解決するために、われわれの社会はどのような取り組みを必要としているのでしょうか。

環境・資源問題は人間活動の総体がもたらす問題であり、その解決には自然科学・社会科学・人文科学にまたがる学際的なアプローチが必要になります。気候変動問題の解決一つをとっても、気候変化の観測・予測などに関する自然科学的知識が必要であるばかりか、経済・社会への影響や二酸化炭素などの温室効果ガス排出をいかに抑制するかの方策設計、開発途上国の経済発展や国際協定などに関する社会科学・人文科学的知識が必要になります。

さらに、二酸化炭素排出の大半を占める化石燃料燃焼に代わる、原子力、さらには風力、太陽光、バイオマスなどの再生可能エネルギーに関する総合的な技術開発、省エネ型住宅や都市およびそれを支える都市交通システムの構築などの脱温暖化の社会づくりには、文理融合的な自然科学・社会科学の教育とともに、人々のライフスタイルなど価値形成にも関連した歴史・文化・哲学などの人文科学の教育を受けた人材が求められています。

また、市場経済システムの中心的な活動主体である企業が、環境保全についての社会的責任を認識して積極的な取り組みを行っている今日、標準・モニタリング・評価や環境会計・環境監査・環境報告書などに関する環境経営および社会会計や国際会計などの知識をもった人材や、製品などのライフサイクル全体の環境負荷の最小化を目指すエコデザインなどの知識をもった人材、さらには環境保全活動を営利活動に結びつけることができるような企業家精神をもった人材が求められています。

以上から、環境に関する体系的で学際的な教育工房としての「環境プログラム」の意義はたいへん高いと考えられます。広い視野を持って、持続可能な経済社会の実現を目指して環境・資源問題に取り組もうという意欲をもった学生の参加を期待しております。

2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
星野 智	法学部	-	3	2	合併（B・C）
佐々木 創	経済学部	-	-	1	単独（C）
藪田 雅弘	経済学部	1	-	-	単独（A）
西川 可穂子	商学部	2	4	1	合併（A・B・C）
谷下 雅義	理工学部	4	4	5	合併（A・B）/単独（C）
西田 治文	理工学部	1	-	2	合併（A・C）
盛田 富容子	文学部	4	3	-	合併（A・B）
ハリスン、ブライアン	総合政策学部	2	2	1	合併（A・B・C）
横山 彰	総合政策学部	3	-	1	合併（A・C）
合計		17	16	13	

3. プログラムスケジュール

4 月	履修ガイダンス 第一回部門授業担当者委員会
6 月	2018 年度募集に伴う総合ガイダンス
7 月	第二回部門授業担当者委員会
9 月	2018 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス 学外活動（サマースクール・一関市）
11 月	2018 年度募集に伴う選考試験 第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催） 学内活動（中間報告会） 第四回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
12 月	第五回部門授業担当者委員会 第六回部門授業担当者委員会（持ち回り開催） 学内活動（期末成果報告会）
1 月	第七回部門授業担当者委員会
3 月	FLP 修了発表 FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①中間報告会

実施日： 2017年11月14日(火) 11:00～12:30
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 5201 教室
発表者1： 星野 智ゼミ
実施内容： ゼミでの学び
発表者2： 谷下 雅義ゼミ
実施内容： エコツーリズムを通して地域の持続性を考える
発表者3： 西田 治文ゼミ
実施内容： 多摩キャンパスの植物の多様性

②期末成果報告会

実施日： 2017年12月16日(土) 10:00～
実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室
実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2017年度までの環境プログラム修了生の主な就職・進学先

東北電力、トヨタ自動車、三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行、住友信託銀行、三菱UFJ信託銀行、日本放送協会（NHK）、河北新報社、博報堂プロダクツ、リクルート、INAX、小松製作所、シャープ、東芝、住商スチール、住友重機械エンバイロメント、日立ビルシステム、富士ゼロックス、富士通、住友林業、日本電設工業、千代田化工建設、日本工営、住友化学、三井化学、凸版印刷、資生堂、イトーヨーカ堂、クオール、JTB 法人東京、エイチ・アイ・エス、小田急箱根ホールディングス、ヤマト運輸、新日本有限責任監査法人、日本自動車連盟（JAF）、国家・地方公務員（農林水産省、公正取引委員会、会計検査院、北海道庁、東京都庁、埼玉県庁、岐阜県庁、日野市役所、習志野市役所など）、東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻、東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻、北海道大学大学院環境科学院生物圏科学専攻、上智大学大学院地球環境学研究科、筑波大学大学院生命環境科学研究科、慶應義塾大学法科大学院、中央大学法科大学院、中央大学大学院（経済学研究科、理工学研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 星野 智 (法学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

環境政治とガバナンス

<授業の概要>

環境政治についての基本的な文献を購読することを通じて、各国および地球社会に生じている環境問題への取組を研究する。森林破壊、大気汚染、水質汚染、河川・海洋汚染、地球温暖化、オゾン層破壊、生物多様性喪失、有害廃棄物の越境移動などへの取り組みを考察し、そこでのガバナンスとレジームの構造を検討する。環境政治は、基本的には、環境破壊の歴史、グローバル、リージョナル、ナショナル、ローカルな領域での環境政策や環境運動、資源をめぐる紛争などを主な対象としている。授業ではこれらの問題を取り上げたい。

<活動内容>

今年度、FLP 環境の星野ゼミ (3・4 年合併) は、受講生が 2017 年度と同じであったことからテキストを利用せずに受講生の問題関心に合わせた形で実施した。具体的には、春学期には、環境政治というテーマを基本としつつもより広い視点から、各受講生に環境問題についての関心のあるテーマを選んで報告してもらうという形式で実施した。主なテーマは、気候変動問題を取り上げ、ゼミ生は気候変動に関連するテーマで報告した。

秋学期もまた、学生の関心がある自由テーマで報告してもらった。学生の自由研究のテーマは、気候変動、再生可能エネルギー問題、パーム油に関する環境問題など、多岐にわたった。再生可能エネルギーに関しては、日本の太陽光発電事情、ドイツの再生可能エネルギーのシステムが取り上げられた。また環境先進国デンマークのバイオガス発電については、デンマークの環境政策の経緯を辿りながら、農業国でもあるデンマークでは農業廃棄物からメタンガスを生産して発電するバイオガス発電が盛んであるということから、バイオガス発電の基本構造についての報告があった。

再生可能エネルギーに関しては、エネルギーミックスという視点から、太陽光や風力は不安定な側面があるので、それ以外の地熱、水力、バイオマスなどの再生可能エネルギーの割合を増やすべきであるという観点からの報告があった。パーム油に関する環境問題では、日常生活で使われている植物油のほとんどがパーム油であり、世界の年間の植物油におけるパーム油の割合が増加しているという認識の下で、パーム油が引き起こしている諸問題 (絶滅のおそれのある野生生物、生物多様性の喪失、伐採や森林火災による温室効果ガスの増加) が取り上げられ、持続可能な開発のための国際的取り組み、日本企業の取り組みなどが検討された。

また地球環境問題における持続可能な開発という視点から、地球生態系のシステムとそこから提供されている「自然の恩恵」としての生態系サービスと地球環境の将来という問題も取り上げた。生態系サービスは、人々が生態系から享受しているさまざまな便益であり、これには食糧、燃料、淡水、素材などの提供サービス、大気の調整、水の調整、疾病の予防、

花粉媒介、自然災害の防止などの調整サービス、その他文化サービスや基盤サービスがある。これら生態系サービスの費用は、貨幣に換算すると、莫大な費用となり、地球生態系の破壊はわれわれが負担するコストの上昇につながり、経済的な損失につながる点を検討した。

(2) 佐々木 創 (経済学部・准教授)

FLP演習C

<テーマ>

環境問題を学際的に分析し、解決策を検討する

<授業の概要>

履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成する。

本演習の具体的な到達目標は以下の2つであり、3年間の演習での取り組みの集大成として履修生各個人が課題とする環境問題を設定し、卒業論文を作成した。

1. 環境問題の分析枠組みについて経済学、政策学、行政学、法学、工学などの学際的な理解をすること。
2. 多種多様な環境問題の中から、自ら課題を設定し、その課題を改善する具体的な政策提案について、自らの考えを論理的に表現できるようになること。

履修者が作成した卒業論文のテーマは、以下の通りである。

- ESG投資と企業の成長性

(3) 藪田 雅弘 (経済学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

環境問題を経済学的アプローチで考える

<授業の概要>

2017 年度の前期では、環境経済学の基本的な考え方について、ノートを中心にして学習を行った。具体的には、公共財、コモンプール財などを中心に、市場の失敗と環境問題に視点を当てて議論を行った。また、後半からは、リサーチペーパーを記述する目的で、テーマをいかに設置するか、目的意識をどのように集約させるかを議論した後で、テーマを設定し、多くの関連する先行研究の解題を行った。これまで FLP ゼミで行ってきた議論、分析手法などを学ぶことを目的に議論を重ねた。

テーマは、おおむね「景観ガバナンスの進展と分析＝埼玉県由市域を中心に」ということで決定し、地域特性を把握したうえで、景観条例や景観計画の形成状況と内容について分析し、埼玉県由市域における環境計画の状況と課題について研究することとした。2018 年 2 月末を目途として、ペーパーをまとめ上げる予定である。

<活動内容>

2017 年度の藪田ゼミ演習 FLPA については、藪田の研究上の都合により、2017 年度限りのゼミとなるが、2018 年度の FLPB での研究を進めるのに必要な基礎学習を行った。ほかに、課外学習として、2018 年 1 月 12 日には、日本銀行、東京証券取引所に見学に出かけた。

(4) 西川 可穂子 (商学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

水環境を中心とした環境問題とその対策 <化学物質汚染とその影響評価>

<授業の概要>

本演習では主に水環境に焦点をあて、履修学生がグループに分かれて実態調査（フィールドワーク）を実施し、調査対象に関する理解を深めていく。大学や研究所における最先端技術に関しても理解を深めるため、テーマに関連のある研究については、学会やシンポジウムにも参加する。

年間を通して、フィールドワークを行うが、その間に演習の前半では、主に基礎的な知識を習得するため、毎年テーマに沿った本（英文）を選び、それぞれ担当章を分担し抄読会も行う。夏休みには、他大学の学生とも交流を深める夏のフィールドワークに参加する。演習後半では、フィールドワークに関する文献調査などを行い、調査データのまとめ方、その意義などをまとめて1年間の報告と次年度の課題についてまとめていく。調査内容についての詳細は、履修学生と相談し決定する。

<活動内容>

年間を通して、東京都内の池や河川など環境表層水中の薬剤耐性菌の分布調査を実施した。前期ゼミでは“Marine Pollution（英文）”を輪読した。後期ゼミでは、学園祭において研究内容を展示し、多くのご父兄や一般来場者に発表をした。12月には環境情報科学センター主催の学術論文発表会に参加しポスター発表を行い、成果が認められ事務局長賞を授与された。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017年5月20日(土)

実施都市：東京都江戸川区

実施場所：葛西臨海公園

実施内容：環境表層水中の薬剤耐性菌の分布調査

成 果：試料水から薬剤耐性菌が検出された

対象演習：A・B・C

実施日：2017年6月3日(土)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：新横浜公園・入江川

実施内容：環境表層水中の薬剤耐性菌の分布調査

成 果：試料水から薬剤耐性菌が検出された

対象演習：A・B・C

実施日：2017年8月21日(月)～2017年8月23日(水)

実施都市：愛媛県西条市

実施場所：地域創生センター西条・他

実施内容：5 大学以上の学生と教員が集まり、所属大学が異なる学生から成るグループに分かれて、西条市の表層水および地下水利用の水質調査と利用実態の調査を実施した。

成果：農業用水に地下水を100%利用している水利用の利点と問題点を聴取し、地下水減少などの複合的な問題から生じる地下水の塩害化問題について理解を深めた。

対象演習：B・C

実施日：2017年11月25日(土)

実施都市：神奈川県川崎市

実施場所：柿生駅周辺

実施内容：環境表層水中の薬剤耐性菌の分布調査

成果：試料水から薬剤耐性菌が検出された

(5) 谷下 雅義 (理工学部・教授)

FLP演習A・B

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

持続可能な地域社会について考える際には、都市と農山漁村をセットで議論する必要がある。都市で十分生産できない資源である食やエネルギーを提供してきたのが農山漁村である。これまでこうした地域では過疎化が進み、地方財政の悪化とともに、「撤退」や「たたむ」という議論が行われている一方で、地域にある資源：森川里海の連環を強化して、新しい暮らし方がはじまっている場所も少なくない。農山漁村で十分ないのは、「仕事」であるが、その一つとして「観光、ツーリズム」があげられる。このゼミでは、「エコツーリズム」に着目し、また農山漁村のフロンティア地域として石川県能登半島や宮城県南三陸町を取り上げ、持続可能な地域社会について、現地の方から学び、一緒に考える。

<活動内容>

前期は、2年生は、エコツーリズムについて、3年生は、地域の持続可能性や観光産業に関する文献購読を行うとともに、6月に能登町においてエコツーリズムの体験と、夏の訪問に向けての打ち合わせを行った。夏休みに、クロモジ採取からエッセンシャルオイル「ノトノカ」抽出体験をさせていただき、それをベースに、秋の「エコツーリズム学生大会」でポスター発表を行った。後期は、自然公園・図書館や芸術祭そして八王子の観光という3つのテーマをかけた、現地調査やヒアリングを行った。そして、3年生は次年度夏のエコツアープログラムの実施のための事前打ち合わせで南三陸町を訪問した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017年8月9日(水)～2017年8月12日(土)

実施都市：石川県能登町

実施場所：岩井戸公民館・他

実施内容：クロモジ採取からエッセンシャルオイル「ノトノカ」抽出体験、まちなか鳳雛塾や能登内浦のクルーズ体験

成果：「ノトノカ」の映画撮影を行っており、その映画の中で私たちの活動も記録していただいた。この体験をヒントにして、「エコツーリズム学生大会」でポスター発表のテーマを「ノトノカを巡る旅」と決めることができた。またまちなか鳳雛塾や能登内浦のクルーズ体験を通じて、地元の中高生との交流、里山里海がともに体験できる場所が能登であることを学んだ。

対象演習：B・C

実施日：2018年2月2日(金)～2018年2月6日(火)

実施都市：宮城県南三陸町

実施場所：南三陸さんさん商店街・他

実施内容：来年度のエコツアープログラムのための事前準備と被災地域における図書館の役割についての学習

成果：来年夏に行う予定のエコツアー実施に当たり、地元でお世話になる方々との顔合わせ（4年生はこの夏のお礼）と、南三陸町で震災後につくられた「かもしか文庫」また陸前高田市の「市立図書館」また街なか図書館として「ペチカ」における活動状況を伺い、地域資源としての図書館とエコツアーとの接点や可能性についてお話を伺い、学習を行った。

FLP演習C

<テーマ>

エコツーリズムを通じて農山漁村の未来を考える

<授業の概要>

これまでのエコツーリズムに係る知識と農山漁村の暮らしについての智慧等、そして農山漁村の再生に資する関連分野の知識に基づき、最終的にゼミ論文という形式でまとめる。

<活動内容>

前期は、夏の南三陸町でのエコツアープログラムを自分たちで提案するための調査活動を行った。夏休みに、卒業生にも声かけして、エコツアーを実施した。

後期は、一人一人、所属学部や進路の観点からテーマを設定し、それについての先行研究レビューおよび調査・検討などを行い、途中成果をみなで議論し、最終的にリサーチペーパーという形でまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年8月24日(木)～2017年8月26日(土)

実施都市：宮城県南三陸町

実施場所：さんさん館

実施内容：エコツアーの提案及び実施

成果：地元のみなさんまたゼミの卒業生にも参加していただき、ガイドの重要性や課題の再確認を行った。来年度も地元の皆さんまたゼミの卒業生に声かけして、エコツアープログラムの実施を行うことにした。

対象演習：C

実施日：2017年9月1日(金)～2017年9月3日(日)

実施都市：岩手県一関市

実施場所：久保川イーハトーブ自然再生研究所・骨寺村

実施内容：FLP プログラムのサマースクールとして、自然再生への取り組みについて学習を行い、最終日に発表会を行った。

成果：理工学研究科の大学院生また担当教員の先生方との意見交換の場をつくることができ、参加者は刺激をうけた。樹木葬墓地やエコツアーを行いたいと地元の方が考えている場所を訪問して、自然歴史文化の重要性を学んだ。

対象演習：B・C

実施日：2018年2月2日(金)～2018年2月6日(火)

実施都市：宮城県南三陸町

実施場所：南三陸さんさん商店街・他

実施内容：来年度のエコツアープログラムのための事前準備と被災地域における図書館の役割についての学習

成 果：来年夏に行う予定のエコツアー実施に当たり、地元でお世話になる方々との顔合わせ（4年生はこの夏のお礼）と、南三陸町で震災後につくられた「かもしか文庫」また陸前高田市の「市立図書館」また街なか図書館として「ペチカ」における活動状況を伺い、地域資源としての図書館とエコツアーとの接点や可能性についてお話を伺い、学習を行った。

（６）西田 治文（理工学部・教授）

FLP演習A・C

<テーマ>

生物多様性と地球環境

<授業の概要>

受講者の設定した課題について個別指導を行うこともあれば、課題の設定がまだ充分にできない者に対しては例えば、様々な生物の観察を通して生物多様性を実感してもらうこともある。学外活動以外は、理工学部の研究室で演習を行うことが多い。

<活動内容>

2017年度は歴代ゼミで断続的に行なってきた、多摩キャンパス植生調査を本格的に行うこととした。西田が同伴した野外調査は、4/28、1/19の2回行なったが、それ以外に随時ゼミ生が独自に実施したこともある。

採集した乾燥標本は同定後A4版クリアファイルに保存することとした（図1）。種名を同定した植物については表にまとめ、標本あるいはキャンパス内で撮影した写真に簡単な解説を添えて「中央大学多摩キャンパスの植物」として編纂する作業を開始した。完成後は冊子体ではなく電子版のpdfとして公開すべく作業を進めている（図2）。

<実態調査・見学調査・講演会>

補助費を申請しての活動は行わなかったが、下記の学外活動を実施した。

1. 5月14日 都立神代植物公園 植物の多様性を知る（理工教職課程実習に同行）。
2. 5月29日 国立科学博物館「大英自然史博物館展」見学（招待券にて入場）。
3. 6月10日 南方熊楠賞受賞記念シンポジウム（大正大学）に参加 生物多様性 JAPANとの協働。
4. 7月2日 箱根火山周辺の自然と植生観察後、神奈川県立生命の星・地球博物館見学（理工教職課程実習に同行）。
5. 9月30日 学術会議進化学分科会主催シンポジウム「沖縄から育む共存と持続的発展の心 ―現代の自然史博物館が果たす役割―」（東大理学部生物科学科講堂）に参加。
6. 12月15日 生物多様性 JAPAN 開催の小集会「ブータン植物のタイプ標本を世界に求めて」の活動を支援した。



図1. 標本の例。ツボスミレ。



目次

1. はじめに
2. 生物多様性の重要性～多摩から世界へ～
3. 春の植物
 - コラム①多摩キャンパスの歩き方（探検ルート、四季の多摩キャンパス）、注意点
 - コラム②多摩キャンパスの動物たち
4. 夏の植物
 - コラム②多摩キャンパスのきのこいろいろ
5. 秋の植物
 - コラム③多摩の森林（昨年などの報告から）
6. 冬の植物
 - コラム④ゆうちゃんがなんか書く？
7. おわりに
8. 参考文献



図 2. 編集集中の「多摩キャンパスの植物」

(7) 盛田 富容子 (文学部・兼任講師)

FLP演習A・B

<テーマ>

都市環境マネジメント

<授業の概要>

環境マネジメントの観点から都市環境をめぐる様々な問題を整理し、持続可能な都市構造のあり方について考察する。持続可能な都市の基本的概念やその計画手法等について、基本的な文献を講読し、内容に関するディスカッションによって理解を深める。また、国内外の事例研究を通じて、持続可能な都市づくりについて基本的かつ総合的な議論を進めていく。

<活動内容>

盛田ゼミは、今年度で二年目のまだ新しいゼミであり、研究実績等の蓄積はこれからの段階ではあるが、ゼミ生の研究に対する関心も高く、また、取組みも極めて熱心であることから、今後の成果が大いに期待されるところである。

本ゼミでは、「持続可能な都市」をテーマに、昨年度から、持続可能な都市の一形態であるコンパクトシティについて研究を進めている。コンパクトシティは、少子高齢化で人口が減少し、都市の縮小が確実視されている日本において、近年、注目を集めている都市形態であり、各自治体でのコンパクトシティ政策への取組みも盛んである。ゼミでは、こうした自治体の取組み事例の研究を通して、日本におけるコンパクトシティ政策の現状・実態とその課題等について考察を重ねてきているが、その過程において、各自治体におけるコンパクトシティ政策の共通の課題の一つとして、空き家問題に対するゼミ生の関心が高まってきたことから、今年度は、日本における空き家問題を中心に研究を進めた。

都市の空き家問題を考えるにあたり、まず前期では、参考文献として細田衛士『グズとバズの経済学 (第2版)』(東洋経済新報社、2012年)を講読し、空き家は資源なのか、ゴミなのかの観点から、持続可能な都市づくりのための空き家の利活用・処分のあり方や、空き家の発生抑制策等についてディスカッションを繰り返すことで、空き家問題についての知識を修得し、理解を深めた。また、後期からは、グループ分けを行い、グループごとに、空き家問題について、前期で修得した知識等をもとにテーマを決め、それぞれのテーマに沿って研究を進めている。各グループが決定した研究テーマに沿って、次年度にフィールドワークを行うことを予定しているため、後期のゼミでは、その準備段階として、データや資料の収集、仮設定などを行った。各グループの進捗状況については、毎回ゼミで報告し合い、内容について相互に議論を重ねることで、グループ間で情報を共有し、それぞれの研究に活かしている。なお、各グループには、研究経過報告書を作成し、提出してもらうことで、後期のまとめとしたが、これらの報告書の内容についても、ゼミ内で共有化を図り、次年度の各グループの研究に活かしていく考えである。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実 施 日：2017 年 9 月 1 日(金)～2017 年 9 月 3 日(日)

実施都市：岩手県一関市

実施場所：久保川イーハトーブ自然再生研究所・骨寺村

(8) ハリソン、ブライアン (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

Environmental studies: pollution control and environmental management

<授業の概要>

We covered various aspects of environmental management and pollution and considered the countermeasures used; we also looked at sustainable approaches to energy supplies and general management of the environment.

<活動内容>

Specific examples of topics discussed included air pollution in various cities around the world (e.g. Beijing, Rajshahi in India, Delhi, Nairobi, Tokyo), permafrost warming, illegal logging, toxic chemicals in the marine environment such as plastics, investment in renewable energy around the world, oil pollution in Nigeria, Switch to electric cars, traffic policies in Calgary, the Netherlands and Denmark, light pollution, use of drugs for factory farming, food waste, the ivory trade, etc.

【FLP-A】

In addition to class discussions, students prepared and performed a group project, as well as conducting an individual research project leading to a short report and presentation on an environmental topic of their own choosing.

【FLP-B】

In addition to class discussions, students prepared and performed a group project, as well as conducting an individual research project leading to a medium-length report and presentation on an environmental topic of their own choosing.

【FLP-C】

In addition to class discussions, the student prepared and performed a group project with younger students, as well as conducting an individual research project leading to a 5,000-word thesis and presentation; the specific topic chosen was a review of the various renewable energy options available to Japan together with a critique of which forms of energy would be the most feasible (including an analysis of the economic implications).

<実態調査・見学調査・講演会>

No activities outside the university were conducted apart from social gatherings.

(9) 横山 彰 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A・C

<テーマ>

環境政策論

<授業の概要>

【演習 A】

日本が実施している環境政策について、法律・政治・経済・社会などの多角的視点から実証的に評価・検証し、政策改善案を考え論証します。その研究成果は共同論文にまとめて、12月上旬に実施する環境経済学交歓セミナー（一橋大学山下ゼミ・慶應義塾大学細田ゼミ・同志社大学岸ゼミ・中央大学横山ゼミ）や12月中旬のISFJ（Inter-University Seminar for the Future of Japan: 日本政策学生会議）の場で発表討論して他大学との研究交流を行います。

【演習 C】

演習 C では、前年度までに環境経済学交歓セミナーや ISFJ で発表討論した共同論文の研究を基礎に、個人で個別事例研究を行って卒業論文を作成します。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年8月30日(水)～2017年9月2日(土)

実施都市：山梨県笛吹市

実施場所：石和びゅうほてる

実施内容：総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成果：合宿に参加した総合政策学部横山ゼミのOBたちや現役生の前で、卒業論文「日本と中国の環境リスクマネジメントの比較」の中間報告を行い、先輩たちから有益な指導を受け、後期における研究の課題を明確にした。

対象演習：A

実施日：2017年11月5日(日)

実施都市：茨城県つくば市

実施場所：筑波大学 筑波キャンパス

実施内容：鈴木石根教授への藻類バイオマスに関するヒアリング

成果：ヒアリング結果を、環境経済交歓セミナー発表の共同論文「藻類バイオマスの早期普及」の中で記載する形で取りまとめた。

対象演習：A・C

実施日：2017年12月16日(土)

実施都市：東京都港区

実施場所：慶應義塾大学 三田キャンパス

実施内容：環境経済交歓セミナーでの研究報告・討論

成 果：演習 A は、12 月上旬までに完成させた共同論文「藻類バイオマスの早期普及」について研究報告を行い他大学の学生たちや教員との質疑応答を行い、演習 C は他大学の研究報告に対して討論を行い、研究交流を深めた。

対象演習：A・C

実 施 日：2018 年 2 月 18 日(日)～2018 年 2 月 21 日(水)

実施都市：東京都渋谷区

実施場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

実施内容：総合政策学部横山ゼミと合同合宿

成 果：合宿に参加した総合政策学部横山ゼミの 0B・0G たちや現役生の前で、演習 A は 2017 年 12 月の環境経済交歓セミナーの報告論文を改訂した内容の研究報告を行い、演習 C の学生は卒業論文の最終報告を行った。

Ⅱ. ジャーナリズムプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

本プログラムは、長谷川如是閑や杉村楚人冠といった日本の歴史に残る著名なジャーナリストを輩出した中央大学の伝統を継承し、ジャーナリズム全体のさらなる発展をこの中央大学から巻き起こすことを目的としている。

所属する学部で学ぶ専門知識と本プログラムのフィールドワークを融合させることにより、広い視野を持ち物事の本質を深く考察・分析・報告できる人材を育てる。さらには、企画力、文章力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力などの社会人基礎力を向上させ、ジャーナリズムの世界で活躍できる人材を育成する。

また、学生諸君が個々の目的と将来に向けてのキャリアデザインを描けるように、担当教員はマスメディア界を含めた広い社会の要請に十分応えられる指導と教育を行う。



長谷川如是閑



杉村楚人冠



山根真治郎

中央大学は、1909年に新聞学科を設置。日本では、最も早くジャーナリスト養成に取り組んだ大学のうちの1つである。これまで、東大、早慶とともに、マスコミ業界に多数の人材を輩出してきた。また、戦前に、「新聞学院」という民間のジャーナリズムスクールがあったが、それを設立した山根真治郎も、中央大学出身であった。この「新聞学院」はのちに、日本新聞協会付属の機関となり、終戦まで続いた。

戦後も駿河台にキャンパスがあった時代には、朝毎読の新聞社の各部長、デスクに必ず1人は中大出身者がいたという時代もあるほど、ジャーナリストを輩出していた。しかし、1978年の多摩全面移転以降、マスコミ志望者の減少、大学としての公的教育プログラムの消滅によって、ジャーナリストの道へ進む学生の数が激減した。権力を監視し弱者の声を代弁し社会に対し大きな影響力をもつジャーナリストを中央大学が育成することは、大学のみならず民主的な社会を構築する上で極めて重要である。

このため、2003年に「FLP ジャーナリズムプログラム」を設置。戦前戦後に渡って、優秀なジャーナリストを輩出してきた中央大学の名誉と勢いを回復せんとするものである。実際、2003年以降、このFLPの演習を受講した後、朝日・毎日・読売などの新聞業界、NHKや民放

などの放送業界、電通などの広告業界、講談社などの出版業界などのマスコミへ就職した学生数は、100 人以上に及んでおり、本プログラムは確実に実績を出している。

2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
臼井 敏男	経済学部	4	5	5	単独（A）/合併（B・C）
辻 泉	文学部	7	7	6	合併（A・B・C）
松田 美佐	文学部	7	8	6	合併（A・B・C）
市川 哲夫	総合政策学部	11	11	11	単独（A）/合併（B・C）
大橋 正和	総合政策学部	8	1	-	合併（A・B）
松野 良一	総合政策学部	10	11	14	単独（A・B・C）
山田 俊治	全学連携教育機構	1	4	4	合併（A・B・C）
合計		48	47	46	

3. プログラムスケジュール

4 月	履修ガイダンス 第一回部門授業担当者委員会
6 月	2018 年度募集に伴う総合ガイダンス
7 月	第二回部門授業担当者委員会
9 月	2018 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
11 月	2018 年度募集に伴う選考試験
12 月	第三回部門授業担当者委員会 学内活動（期末成果報告会）
1 月	第四回部門授業担当者委員会
3 月	FLP 修了発表 FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

実施日： 2017年12月16日(土) 13:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 11430 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2017年度までのジャーナリズムプログラム修了生の主な就職・進学先

日本放送協会（NHK）、テレビ朝日、TBS テレビ、中部日本放送、東海テレビ放送、朝日新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、中日新聞社、中国新聞社、岐阜新聞社、新潟日報社、共同通信社、NTT 東日本、NTT データ、電通、小学館、日本出版販売、ベネッセコーポレーション、文藝春秋、光文社、白泉社、ダイヤモンド社、有斐閣、WOWOW、東北新社、京王エージェンシー、読売広告社、IMAGICA、PRAP JAPAN、デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム、学情、リクルート、みずほフィナンシャルグループ、横浜ゴム、日本銀行、三井住友銀行、三菱東京 UFJ 銀行、千葉銀行、京葉銀行、八十二銀行、川崎信用金庫、日本政策金融公庫、東京海上日動火災保険、損害保険ジャパン日本興亜、野村総合研究所、野村証券、富士通、リコー、凸版印刷、野村不動産パートナーズ、ヤフー、ニフティ、GeeeN、全日本空輸、ANA エアポートサービス、日本旅客鉄道、JTB 首都圏、オリエンタルランド、地方公務員（県庁・市役所など）、慶應義塾大学、早稲田大学大学院政治学研究科 ジャーナリズムコース、中央大学大学院（文学研究科、総合政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 臼井 敏男（経済学部・客員講師）

FLP演習A

<テーマ>

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

<授業の概要>

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③新聞記者の直面する問題の3本立てです。①の作文は毎週、宿題として800字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHKの過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、取材される側のプライバシーやメディアスクラムがテーマです。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は38年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

<活動内容>

ゼミ生は2年生4人。

■作文

手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」などの各紙の一面コラム。一面のコラムは通常、本や映画、ことわざなどを引用して書き出し、社会的な問題につないでいる。ゼミの作文では、前半で自分の体験や取材の経験を書き、後半で社会的な問題につなぐようにしてもらった。新聞社の採用試験の作文は、エントリーシート(ES)と同じで、自己PRの場だからだ。

作文では自分の体験や取材の経験について、5～6本の鉄板ネタをつくってもらうのが目標だ。5～6本の面白いネタがあれば、採用試験でどんなテーマを出されても、テーマに沿って書くことができる。

後半で社会的な問題を取り上げるのは、記者をめざすうえで当然だからだ。

毎週書いてもらった作文を講師が添削し、次回のゼミで講評した。

作文ではインターンの応募へ向けてES、街ダネも書いてもらった。テーマは次の通り。

- ①日本のゆがみ ②坂 ③人工知能 ④食のこれから ⑤豊 ⑥隣人といかに付き合うか
⑦声 ⑧男女格差 ⑨大学 ⑩日本人に足りないもの ⑪ES「なぜ記者になりたいのか。
記者になったら、どんな仕事をしたいか」 ⑫ES「学生時代に力を入れたこと」 ⑬ES「これまでで困難だったことは何か、どうやって乗り越えたか」 ⑭街ダネの取材 ⑮朝日、
読売、NHKの今年の採用試験のES ⑯東京五輪に期待すること ⑰移民 ⑱フェイクニュー
ース ⑲10年後の日本 ⑳リセット ㉑排除 ㉒生命 ㉓言葉の力 ㉔貫く ㉕偽装
㉖生み出す ㉗世論 ㉘送る ㉙働く

■紙面をもとに議論

日々の新聞を取り上げて、「いい記事か悪い記事か」「自分が記者だったら、どう書くか」「自分が記者だったら、どんな質問をするか」の視点で意見を言ってもらい、議論をした。読者目線だけでなく記者目線で新聞を読んでもらうのが狙いだ。

取り上げた記事や議論した主なものは次の通り。

▽千葉の少女殺害事件で一報をどう書くか。記者会見で何を聞くのか。

▽逮捕・送検・勾留、検挙とは何か。

▽容疑者の写真をどこで撮るか。被害者の写真はどこで入手するのか。

▽容疑者、被害者はなぜ実名か。匿名発表の場合はどうするのか。

▽なぜ被害者を取材するのか。取材を拒まれたらどうするのか。

▽安倍首相の9条改憲案をどう考えるのか。

▽改正個人情報保護法のポイントは何か。

▽前文部科学次官の個人的な行動について読売新聞の報道をどう考えるのか。

▽共謀罪かテロ準備罪か。

▽1強政権下のテレビ報道についてどう考えるか。

▽首相会見要旨をもとに、自分なら何を質問するか。

▽被告と拘置所で面会の記事について、どう考えるか。

▽選挙応援での安倍首相へのヤジについて、各社の報道の違いは何か。

▽「天声人語」と「編集手帳」はどちらが面白いのか。

▽各紙の立ち位置はどこか。保守かリベラルか。

▽人ものの書き方のポイントは何か。街ダネの書き方のコツは何か。

▽朝日と読売の世論調査の方法の違いとは何か。

■講演会

新聞社や通信社、テレビ局に内定した先輩の4年生に就活体験を話してもらった。講師が担当しているインターンシップ新聞社コースのゼミの4年生も含めて、次の内定先の4年生が来てくれた。

読売1人、共同1人、NHK3人。

読売新聞の人事部次長、朝日新聞の人事部採用担当部長をそれぞれ招き、各社の特色や就活のコツ、ESの書き方、面接の受け方を聞いた。

3回の講演会のあと、引き続き高幡不動や多摩センターで懇親会を開いた。

■インターンへの参加

2年生でも参加できるインターンには積極的に応募してもらった。2人が読売の夏のインターンに参加した。

FLP演習B・C

<テーマ>

タフで心優しい新聞記者を育てることです。

<授業の概要>

授業は①作文の講評②日々の新聞記事の分析③入社試験を突破するための技術を磨くことの3本立てです。①の作文は毎週、宿題として800字を書いてもらいます。テーマは新聞社、通信社、NHKの過去の入社試験の課題です。作文を書く狙いは、一つには分かりやすく論理的な文章を書く訓練をすることです。もう一つは、自分を見つめ、社会の問題を深く考えることです。②では、いい記事と悪い記事、特ダネ、ユニークな記事などを取り上げます。③では、現代の社会の問題の考え方、エントリーシートの書き方、面接での答え方などを指導します。いずれも講師が学生に質問して、学生に自ら考えてもらうのが授業の特徴です。

講師は38年間、朝日新聞社で社会部記者、週刊誌記者、社会部長、論説委員を務めました。その経験を学生に伝えたいと思っています。

<活動内容>

ゼミ生は3年生、4年生各5人。

■作文

前期は夏のインターンの応募へ向けてエントリーシート(ES)、街ダネを書いてもらった。

後期は作文に戻った。作文の手本は朝日新聞の「天声人語」、読売新聞の「編集手帳」、毎日新聞の「余録」などの各紙の一面コラム。一面のコラムは通常、本や映画、ことわざなどを引用して書き出し、社会的な問題につないでいる。ゼミの作文では、前半で自分の体験や取材の経験を書き、後半で社会的な問題につなぐようにしてもらった。新聞社の採用試験の作文はESと同じで、自己PRの場だからだ。

作文では自分の体験や取材の経験について、5～6本の鉄板ネタをつくってもらうのが目標だ。5～6本の面白いネタがあれば、採用試験でどんなテーマを出されても、テーマに沿って書くことができる。

後半で社会的な問題を取り上げるのは、記者をめざすうえで当然だからだ。

毎週、作文を講師が添削し、次回のゼミで講評した。

作文、ESのテーマは次の通り。

①ES「なぜ記者になりたいのか。記者になったら、どんな仕事をしたいか」 ②ES「学生時代に力を入れたこと」 ③ES「最近印象に残ったニュースは何か」 ④ES「これまでで困難だったことは何か、どうやって乗り越えたか」 ⑤ES「あなたの長所と短所」 ⑥ES「自己PR」 ⑦ES「なぜ朝日の記者になりたいのか」 ⑧ES「なぜ読売の記者になりたいのか」 ⑨ES「なぜ毎日の記者になりたいのか」 ⑩ES「なぜ共同通信の記者になりたいのか」 ⑪私の大切にしていること ⑫推し量る ⑬驚いたこと ⑭街ダネ取材 ⑮朝日、読売、NHKの今年の採用試験のES ⑯東京五輪に期待すること ⑰移民 ⑱フェイクニュ

ース ⑭10 年後の日本 ⑮リセット ⑯排除 ⑰生命 ⑱言葉の力 ⑲貫く ⑳偽装
㉑生み出す ㉒世論 ㉓送る ㉔働く

■紙面をもとに議論

日々の新聞を取り上げて、「いい記事か悪い記事か」「自分が記者だったら、どう書くか」「自分が記者だったら、どんな質問をするか」の視点で意見を言ってもらい、議論をした。読者目線だけでなく記者目線で新聞を読んでもらうのが狙いだ。

取り上げた記事や議論した主なものは次の通り。

▽千葉の少女殺害事件で一報をどう書くか。記者会見で何を聞くのか。

▽逮捕・送検・勾留、検挙とは何か。

▽容疑者の写真をどこで撮るか。被害者の写真はどこで入手するのか。

▽容疑者、被害者はなぜ実名か。匿名発表の場合はどうするのか。

▽なぜ被害者を取材するのか。取材を拒まれたらどうするのか。

▽安倍首相の9条改憲案をどう考えるのか。

▽改正個人情報保護法のポイントは何か。

▽前文部科学次官の個人的な行動について読売新聞の報道をどう考えるのか。

▽共謀罪かテロ準備罪か。

▽1強政権下のテレビ報道についてどう考えるか。

▽首相会見要旨をもとに、自分なら何を質問するか。

▽被告と拘置所で面会の記事について、どう考えるか。

▽選挙応援での安倍首相へのヤジについて、各社の報道の違いは何か。

▽「天声人語」と「編集手帳」はどちらが面白いのか。

▽各紙の立ち位置はどこか。保守かリベラルか。

▽人ものの書き方のポイントは何か。街ダネの書き方のコツは何か。

▽朝日と読売の世論調査の方法の違いとは何か。

<実態調査・見学調査・講演会>

■実態調査・見学調査

対象演習：B

実施日：2017年4月14日(金)～2017年4月16日(日)

実施都市：沖縄県石垣市

実施場所：米軍飛行士慰霊碑

実施内容：B29搭乗兵の慰霊祭への参加

成果：慰霊を続ける人々の思いを知ることができた。沖縄戦の実情を学べた。

対象演習：B

実施日：2017年5月25日(木)

実施都市：東京都奥多摩町

実施場所：笠松展望園

実施内容：台湾人戦没者の慰霊祭への参加

成 果：日本兵として戦った台湾人の歴史を知ることができた。台湾人との交流もできた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 6 月 2 日(金)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：衆議院第 2 議員会館

実施内容：国連特別報告者の講演会

成 果：日本の表現の自由とメディアの独立性、さらには共謀罪の審議をめぐって注目されている国連特別報告者制度の意義とその手続き、実情を学べた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 6 月 29 日(木)

実施都市：東京都文京区

実施場所：講談社 レセプションルーム

実施内容：シリア難民の現状を知る。

成 果：紛争勃発から 6 年以上経ち、シリア難民の苛立ち、無念さを知ることができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 7 月 25 日(火)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：中央大学 駿河台記念館

実施内容：毎日新聞編集委員との懇談

成 果：戦争で多くの証言を取材してきた記者と懇談した。自分たちの取材について、アドバイスを頂けた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 11 月 2 日(木)～2017 年 11 月 3 日(金)

実施都市：長野県阿智村

実施場所：満蒙開拓平和記念館

実施内容：満蒙開拓団の証言を聞く。リニア建設現場の視察。

成 果：国策に翻弄されてきた長野県南部の人々の思いに触れ、記者を目指す者として、記憶しておきたいと思った。

■講演会

新聞社や通信社、テレビ局に内定した先輩の 4 年生に就活体験を話してもらった。講師が担当しているインターンシップ新聞社コースのゼミの 4 年生も含めて、次の内定先の 4 年生が来てくれた。

読売 1 人、共同 1 人、NHK3 人。

読売新聞の人事部次長、朝日新聞の人事部採用担当部長をそれぞれ招き、各社の特色や就活のコツ、ES の書き方、面接の受け方を聞いた。

3 回の講演会のあと、引き続き高幡不動や多摩センターで懇親会を開いた。

<4 年生の内定状況>

朝日新聞、読売新聞、共同通信、河北新報 各 1 人

(2) 辻 泉 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

ポピュラー文化とメディア変容

<授業の概要>

本演習は、ポピュラー文化に関連するメディアの実態について、広く理解を深めることを目的としている。たとえば、趣味やファッション、ライフスタイルに関する雑誌やインターネット情報であったり、あるいはスポーツジャーナリズムであったりというように、われわれの日常生活において身近な、ポピュラー文化を切り口にして、今日のメディアの実態や問題点について考察することが主たる目的である。

具体的には、関連する文献の読解からスタートして、実際にメディア情報の内容分析を行ったり、あるいはこれらの情報発信に携わる現場への訪問調査なども織り交ぜつつ取り組んできた。なお2017年度は、男性ファッション誌と若年男性たちの理想像を中心テーマとして取り上げた。

<活動内容>

辻ゼミは、上記したような目的に基づき、『POPEYE』『MEN'S NON・NO』『FINEBOYS』『Samurai ELO』『smart』『streetjack』『MEN'S KNUCKLE』の7誌を主たる対象として、こうした系統の雑誌を購読するような男性読者たちの文化、および彼らの理想像に関する実態調査を行った。具体的な活動内容などは、下に掲載した日程表などを参照のこと。

日程	予定	文献 (要約/コメント)	雑誌ウォッチ担当	その他
<前期>				
4月12日	(1) ガイダンス・分担決めなど			
4月19日	(2) 昨年度・2016年度成果復習			
4月26日	(3) 基礎論①「男性雑誌の現在」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
5月3日	憲法記念日			
5月10日	(4) 基礎論②「男らしさの現在」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		
5月17日	(5) 基礎論③「マルチメソッドアプローチ」	※前日正午までにfacebookに論文についてコメント		仮説構成開始
5月24日	(6) 休講			
5月31日	(7) 『ファッションビジネスの文化論』8章 ファッション誌の過去と現在、未来	日笠/堀田	『FINEBOYS』 真壁 『MEN'S NON-NO』 室屋	各誌ごとの作業仮説提出・質問項目作成開始
6月7日	(8) 『男らしさの快楽』第一章・終章	押切/加瀬	『POPEYE』 森田 『samurai ELO』 石原	
6月14日	(9) 『男らしさの快楽』第三章「部族化するおしゃれな男たち」	田村/相原	『smart』阿部『street JACK』平川	
6月21日	(10) 休講			
6月28日	(11) 『雑誌メディアの文化史』『POPEYE』におけるアメリカニズムの変容と終焉	常盤/辻	『Men's KNUCKLE』 笠本	質問項目提出
7月5日	(12) ゲスト 元POPEYE編集長来訪			
7月12日	(13) インタビュー項目調整①			
7月19日	(14) インタビュー項目調整②			
7月26日	(15) 内容分析			

<後期>	予定	項目①	その他
9月27日	(1)ガイダンス		9月27～10月11日ゼミ展示
10月4日	(2)合宿のおさらい①(メンノン、fb、ナックル)	3257教室へ	ゼミ見学会
10月11日	(3)合宿のおさらい②(ELO、SJ、popeye、smart)	3257教室へ	ゼミ見学会
10月18日	(4)smart編集長来訪		
10月25日	(5)休講		
11月1日	学祭前全日休講		
11月8日	(6)班ごと中間報告①(メンノン、fb、popeye、elo)		11月6～9日ゼミ選考
11月15日	(7)班ごと中間報告②(smart、SJ、ナックル)		
11月22日	(8)休講		
11月29日	(9)年表作成&プレゼン準備①		
12月6日	(10)報告書執筆指示&プレゼン準備②		12月9日(土)年表最終〆切
12月13日	(11)リハーサル		12月16日(土)成果報告会
12月20日	(12)報告書執筆作業①		
12月27日	冬期休業		
1月3日	冬期休業		
1月10日	(13)報告書執筆作業②		1月6日(土)報告書〆切
1月17日	(14)班ごと最終報告会①(メンノン、fb、popeye、elo)		
1月24日	(15)班ごと最終報告会②(smart、SJ、ナックル)		

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年7月5日(水)

講演者：清水 一彦氏(江戸川大学)

演題：雑誌の過去・現在・未来

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 3256 教室

実施内容：マガジンハウス『POPEYE』の元編集長である清水一彦氏より、ファッション雑誌の過去・現在・未来についての展望を語っていただいた。

成果：実体験に基づくプレゼンテーションにより、学生の理解が深まった。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月19日(火)～2017年9月20日(水)

実施都市：岩手県宮古市

実施場所：宮古駅周辺・宮古市商店街

実施内容：地方都市における若年男性のファッションや実態についてのフィールドワークを行った。

成果：宿舎では、前期中の研究成果についてのプレゼン大会も行い、親睦を深めると共に、理解を深めることができた。

(3) 松田 美佐 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

学問としてのジャーナリズム、および、取材・表現活動の実践

<授業の概要>

ネット社会の進展にともない新聞やテレビなど伝統的メディアの報道に批判の目が向けられるなか、ジャーナリズム機能をどう維持、発展させるかが問われている。本演習では、ジャーナリズムの原理・理念について文献で学んだ後、ゼミでの議論を通じてジャーナリズム活動の現状と可能性を考えたい。また、それと並行する形で、受講生自らが取材し、記事にまとめる活動をおこなう。具体的には、夏期ゼミ合宿を取材・調査にあてることとし、前期には取材地の選定から始め、グループに分かれて取材の準備をおこなう。後期にはゼミでの発表などを通じて、記事にまとめることとする（2016年度は高知市、2015年度は広島市、2014年度は石巻市をベースにおこなった）。このような取材・表現活動の実践やゼミでのディベートにより、現代社会で広く必要とされている「主体的に情報収集し、議論を通じて理解し、自分なりの見解をまとめ、わかりやすく表現する力」を磨くことを目的とする。

<活動内容>

本年の活動は四点に大きく分けることができる。

まず、文献講読によるジャーナリズムの理解とそれに基づき議論をおこなう訓練である。文献講読で取り上げた本は、松林薫, 2016, 『新聞の正しい読み方』NTT出版である。この文献を講読しながら、ジャーナリズムの基礎について理解を深め、さらに、関連するさまざまなテーマについて、受講生の専門領域と関係づけながら議論をおこなった。次に、例年議論の練習のためにディベートをおこなうこととしているが、本年も受講生からテーマの希望を募り、「統合型リゾート内カジノ設置の是非」「救急車有料化の是非」「義務投票制の是非」「消費税増税の是非」などのテーマで、ディベートをおこなった。さらに、三点目として、本年は夏に島根県で調査・取材合宿をおこなうこととし、グループに分かれ事前取材・調査をした上で、8月28-31日に実態調査に出かけた。取材地の決定から、具体的な取材計画立案、取材の申し込みなど、取材合宿の全ての過程は学生たち自身が企画・実行する。成果はすべてのグループが後期に行われた新2年生の見学が可能なゼミにおいて発表し、全員が1,000~2,000字程度の記事にまとめた。そのうち2名の記事は『Hakumon CHUO』冬号に掲載され、2名が春号に掲載予定である。四点目として「ネット上の情報流通を考える」を大きなテーマとするグループ研究を行った。この研究はネット上の情報流通のありかたについて、「ネットいじめ」「企業炎上」「個人炎上」「テレビにおけるネット情報」「キュレーションサイト問題」の5つのグループにわかれ、1. 現状 2. 問題点 3. 改善策をまとめ、プレゼンテーションし、グループ研究論文にまとめるものである。

以上の活動を通じて、学年末に受講生全員が合宿取材記事を修正して完成させ、「ネット上の情報流通を考える」グループ研究のプレゼンテーション資料と研究論文をゼミ論集としてまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年8月28日(月)～2017年8月31日(木)

実施都市：島根県松江市

実施場所：島根県庁・他

実施内容：取材合宿

成 果：全員が取材成果を 1000～2000 字程度の記事にまとめ、そのうち 4 名の記事が『Hakumon CHUO』冬号と春号（予定）に掲載された。

(4) 市川 哲夫 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

前期：全 15 回にわたり、映像のアーカイブを参照しながらテレビ放送史の画期となった事象を学び、放送の使命と可能性を考究する。

後期：『二十歳の自画像』というタイトルのオムニバス・ドキュメンタリーに取り組む。

本ゼミにおいて、2014 年以降、毎年制作 (DVD) している企画。

併せて、戦後「若者論」の変遷を『調査情報』506 号をテキストに使用して学ぶ。

<活動内容>

市川ゼミでは、上記授業の一方、テレビ局スタジオ見学、京都研修合宿、ゲスト講演会そして、『二十歳の自画像』の学外撮影を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017 年 6 月 24 日 (土)

実施都市：東京都港区赤坂

実施場所：TBS (『王様のブランチ』生放送)

実施内容：生放送の模様をスタジオ・フロアで見学。

番組終了後、報道制作局担当局次長・中野匡人氏から「テレビの仕事」と題し、レクチャー。その後、ゼミ生との間で質疑を行う。

成 果：生放送の現場を目の当たりにして、新鮮な刺激を受ける。

また、局次長からの懇切なテレビ局の仕事の実態の説明を聞き、各ゼミ生の進路設定の大きなヒントを得た。

のちに提出されたレポートによれば、異口同音に大きな刺激を受けたと感想が記されていた。

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 9 月 4 日 (月)～2017 年 9 月 6 日 (水)

実施都市：京都市中京区御池通・太秦

実施場所：(1)堀木エリ子&アソシエーツ

(2)東映京都太秦撮影所

実施内容：(1)和紙のアート・デザイナーの第一人者堀木エリ子氏のショー・ルームを訪ねた。氏のこれまでの作品の実物・映像をチーフ・スタッフの細尾さんの解説つきで鑑賞。のち、予習して臨んだゼミ生との間で質疑を行う。

(2) 制作会社 (C・A・L) 代表取締役社長・白石統一郎氏の案内で、氏がプロデューサーを務める時代劇『水戸黄門』(BS-TBS 主演・武田鉄矢) と『大岡越前』(BS プレミアム主演・東山紀之) の収録現場を見学。

成 果：(1)和紙を使ったアートというユニークな創作活動の堀木氏の仕事の一端に触れた。銀行 OL から、アートの世界に転身し道を切り拓いた『生き方』そのものに感銘を受けた。

(2)ゼミ生全員、時代劇の撮影現場見学は、初めてで新鮮な驚きを感じていた。また武田鉄矢、東山紀之といった有名俳優の演技を間近に見て感動。

後日、提出させた研修レポートでみな貴重なカルチャー体験をしたと綴っていた。

対象演習：A・B

実 施 日：2017 年 12 月 9 日(土)

講 演 者：松尾 紀子 氏 (前・フジテレビアナウンス部長)

小島 英人 氏 (TBS 経営企画局担当部長)

演 題：テレビ局で働くということ

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11514 教室

実施内容：タイトル通り、「テレビ局」での労働の実態を率直に語っていただいた。

「オーバー・ワーク」と噂されるテレビ局の「働き方」の実態は？

そして、テレビ局への就活の心得も、「模擬面接」を行うなど実践的指導を実施。

すでに民放テレビ局の就活が本格化していた時期であり、二人の大先輩直々の助言は、時間オーバーの盛り上がりを見せた。

成 果：貴重な講演会ということで、FLP ジャーナリズム・プログラムの他ゼミ生の参加も受け入れた。

市川の出身の TBS のみならず、フジテレビの前アナウンス部長にも参加してもらい民放テレビ局を複眼で捉えられたので、例年にも増して貴重な機会となった。

FLP というゼミの特性もあり、次年度も実施したい取り組みと言える。

F L P 演習 B・C

<テーマ>

放送文化論

<授業の概要>

2015 年夏に、上梓された『70 年代と 80 年代～テレビが輝いていた時代』（市川哲夫編・毎日新聞出版）をテキストに、今年度は 1980 年代のディケードを研究対象とした。（70 年代は、昨年実施済み）

テキスト所収の 30 本の論文を毎回ゼミ生が輪番で報告し、各テーマについてゼミ生相互のディスカッションを行い、解題と締め括りの総括を市川が行った。

「平成」時代も 2019 年 4 月で終るが、「昭和」を歴史として捉えることが可能となりつつある。日本の「来し方」「行く末」を考えることは益々重要となっている。

<活動内容>

演習 B・C では、上記ゼミナールの他に京都研修合宿と講演会を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 9 月 4 日（月）～2017 年 9 月 6 日（水）

実施都市：京都市中京区御池通・太秦

実施場所：(1)堀木エリ子&アソシエーツ
(2)東映京都太秦撮影所

実施内容：(1)和紙のアート・デザイナーの第一人者堀木エリ子氏のショー・ルームを訪ねた。氏のこれまでの作品の実物・映像をチーフ・スタッフの細尾さんの解説つきで鑑賞。のち、予習して臨んだゼミ生との間で質疑を行う。

(2)制作会社（C・A・L）代表取締役社長・白石統一郎氏の案内で、氏がプロデューサーを務める時代劇『水戸黄門』（BS-TBS 主演・武田鉄矢）と『大岡越前』（BS プレミアム主演・東山紀之）の収録現場を見学。

成 果：(1)和紙を使ったアートというユニークな創作活動の堀木氏の仕事の一端に触れた。銀行 OL から、アートの世界に転身し道を切り拓いた『生き方』そのものに感銘を受けた。

(2)ゼミ生全員、時代劇の撮影現場見学は、初めてで新鮮な驚きを感じていた。また武田鉄矢、東山紀之といった有名俳優の演技を間近に見て感動。

後日、提出させた研修レポートでみな貴重なカルチャー体験をしたと綴っていた。

対象演習：A・B

実施日：2017 年 12 月 9 日（土）

講演者：松尾 紀子 氏（前・フジテレビアナウンス部長）

小島 英人 氏 (TBS 経営企画局担当部長)

演 題：テレビ局で働くということ

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11514 教室

実施内容：タイトル通り、「テレビ局」での労働の実態を率直に語っていただいた。

「オーバー・ワーク」と噂されるテレビ局の「働き方」の実態は？

そして、テレビ局への就活の心得も、「模擬面接」を行うなど実践的指導を実施。

すでに民放テレビ局の就活が本格化していた時期であり、二人の大先輩直々の助言は、時間オーバーの盛り上がりを見せた。

「模擬面接」は演習 B の 3 年生が対象であり、出演した。

成 果：3 年生にとっては、とりわけ為になったプログラムとなった。

※今年度は、A・B・C の合同の企画がいくつかあり、2・3・4 年生の絆が強化された。

(5) 大橋 正和 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

現代社会の変容研究 –デジタル革命による社会の変容について–

<授業の概要>

Social Media やクラウドコンピューティングなどが浸透することによりコミュニケーションやメディアが大きな変容を迎えている。グローバルには、2011 年以来インダストリー4.0 と呼ばれるデジタル革命が急速に進行しつつある。

米国では、「2011 年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの 65%は、大学卒業時には存在していない職業に就くだろう。」と言われており今後 20 年くらいでこの革命により現代社会は、基盤から大きく変容すると考える。デジタル革命の中心となる技術は、IoT、AI、ビッグデータ、3D ビジョン&ソリューション、ロボット技術などであり人間の働き方や教育にも大きな変革をもたらすと言われている。人工知能やビッグデータなどを利用した自動車の自動運転などすでに実現しつつある技術等実社会にも大きな変革をもたらすものが実現しつつある。21 世紀の現代社会がどのように変容しつつあり今後どのような方向に向かうのかをデジタル革命の研究により研究する。研究成果は、外部で発表もしくは公表するものとする。

<活動内容>

大橋ゼミは、Facebook 上のグループを利用した PBL の手法を用いて個人もしくはグループごとに研究テーマを定めその研究テーマに沿った活動を行った。

今年度の研究テーマは、「デジタル革命による社会の変容について」特に第 4 次産業革命による社会システムの変容をテーマに、AI(人工知能)、IoT(Internet of Things)、ビッグデータ、フィンテックなどの具体的事例にそって研究を行った。その中でも、ブロックチェーン技術と事例について突っ込んだ研究を行った。さらに、フィンテックの主要技術であるブロックチェーンの重要な技術である時刻認証について研究を行った。

ゼミ中には、共通テーマである「現代社会の変容」「Social Media の社会への影響」などについて最新の事例と研究成果について議論した。

2017 年 7 月には、情報社会学会の年次研究発表大会(東京大学福武ホール)に参加し学会での研究発表の実際に触れた。

FLP 演習 A 所属の全員と B 所属の廣田君が台湾で 2017 年 11 月に行われた国際学会において下記の論文を発表した。

Nozomi Tomura, Saki Uehara, Konosuke Kaneta, Ryosuke Hara, Ryogo Sasaki,
Maho Tsuchida, Ayu Shibuya, Maiko Yamashita, Chuo University (Japan)

“CONSTRUCTION OF THE E-GOVERNMENT –CASE STUDY OF JAPAN AND ESTONIA– “

Shinnosuke Hirota, Chuo University (Japan)

“BLOCKCHAIN PROMOTES OPEN INNOVATION FOR SERVICE BUSINESS”

THE THIRTEENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON KNOWLEDGE-BASED ECONOMY AND GLOBAL MANAGEMENT

Southern Taiwan University of Science and Technology, November 23-24, 2017

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B

実施日：2017年11月22日(水)～2017年11月26日(日)

実施都市：台南市（台湾）

実施場所：南台科技大学

実施内容：国際会議（THE THIRTEENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON KNOWLEDGE-BASED ECONOMY AND GLOBAL MANAGEMENT, Southern Taiwan University of Science and Technology, November 23-24, 2017）

成 果：上記国際会議に参加し論文発表を行うとともに、研究関連論文のセッションに参加した。論文を作成するための研究や英文での作成過程を学ぶことが出来たことと国際会議に参加して交流を深めることが出来たことが成果として上げられる。また、現地で各国からの参加者とも交流した。特に FLP 演習 A の諸君は、エストニアの大学から参加した教員から研究上の様々なサジェスションを受けることが出来た。

(6) 松野 良一 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

番組制作およびノンフィクション執筆活動

<演習のスケジュール>

1. 4月～12月 「多摩探検隊」番組制作活動
2. 11月ゼミ合宿 (制作会議)
3. 9月～3月 模擬面接の設営、ゼミ活動報告書の作成
4. ノンフィクションの執筆は、年間で行う

<活動内容 (学内・学外・講演会等) >

多様な能力開発およびジャーナリストマインドの育成のために、実践的な活動を行なった。主として、①実際にケーブルテレビで放送するための番組制作、②各種活字メディアへの執筆活動、を2本柱とした。

- ① 番組制作については、ケーブルテレビ向けの番組「多摩探検隊」および「にっぽん列島探検隊」の2本を制作した。視聴世帯可能世帯数は、多摩探検隊はJCOM系列の約270万世帯、にっぽん列島探検隊はイッツコム系列の約68万世帯である。

1) 「中央大学と戦争」プロジェクト

2010年に出版された『戦争を生きた先輩たちⅠ』、『戦争を生きた先輩たちⅡ』、2013年に出版された『中央評論 戦争を生きた先輩たち (完結編)』の取材対象者に再度取材を行い映像化した。2017年度は、元特攻志願兵、元朝鮮人学徒兵にインタビューを行い、映像制作を行った。

- ② 執筆活動については、学内のメディアである『中央評論』『草のみどり』に定期的にルポルタージュ等を投稿し掲載された。さらに、独立した取材・執筆プロジェクト立ちあげ、実行した。

1、番組「多摩探検隊」¹制作

放送月	企 画	D	番 P	進行状況
‘17 年 1 月	清瀬のおばあちゃんに会いに行こう！	會田	大塚	放送済み
2 月	平和観音像に刻まれた遺志 ～東村山に墜ちた B29～	山田	山田	放送済み
3 月	東光寺大根(前編)	尾崎	平木場	放送済み
4 月	東光寺大根(後編)	尾崎	平木場	放送済み
5 月	ドイツの小さな町を救った日本人医師の物語	荒川	荒川	放送済み
6 月	被ばく棕の木ー長崎から狛江へー	西山	西山	放送済み
7 月	後にくを信ず～中央大学と戦争～（前編）	渡邊	名越	放送済み
8 月	後にくを信ず～中央大学と戦争～（後編）	渡邊	名越	放送済み
9 月	つなぎー型紙版画家田中清ー	仲山	仲山	放送済み
10 月	立川のヤギ ～都会のオアシスの謎にせまる～	星	星	放送済み
11 月	ペンシルロケットー国分寺から飛んだ夢ー	明田	明田	放送済み
12 月	勤労学徒の証言ー中島飛行機武蔵製作所ー	堀場	堀場	放送済み
‘18 年 1 月	元朝鮮人学徒の証言 ～中央大学と戦争～（前編）	鈴木	鈴木	放送済み
2 月	元朝鮮人学徒の証言 ～中央大学と戦争～（後編）	鈴木	鈴木	放送中
3 月	ゾウのはな子	清水	清水	放送予定

① 「中央大学と戦争」プロジェクト

取材対象者	住所	取材者	進行状況
梁 敬宣	台湾 台北	柚木	編集中
ファン ギョンジュン	韓国 ソウル	鈴木	放送中

¹東京・多摩地域のケーブルテレビ局 3 局、J:COM 系列 15 局、九州地域の 2 局の計 20 局（視聴可能世帯数:約 270 万）で放送されている 10 分間の地域再発見番組。

2、番組「にっぽん列島探検隊」²制作

放送月	番組回	企 画	キャスター	ゲスト	番 P
‘16 年 1 月	27 回	清瀬こども放送局特集	堀場	會田	仲山
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	26 回	風船爆弾	堀場	広瀬・和田	藤江
4 月	28 回	八王子空襲	梅田	平木場	明田
5 月	〃	〃	〃	〃	〃
6 月	29 回	高浜	梅田	中川	久保寺
7 月	〃	〃	〃	〃	〃
8 月	30 回	中大と戦争	〃	渡邊	友利
9 月	〃	〃	〃	〃	〃
10 月	31 回	型染版画家	〃	仲山	柳下
11 月	〃	〃	〃	〃	〃
12 月	32 回	熊本	—	—	原
‘17 年 1 月	33 回	国分寺特集	梅田	明田	桑山
2 月	〃	〃	〃	〃	〃
3 月	32 回	熊本	—	—	原

3、地域密着プロジェクト³

活動日程	場所	内容	アウトプット
2017 年 2 月 27 日～3 月 2 日	熊本県南阿蘇村	タイトル：「南阿蘇に生きる」 熊本県南阿蘇村。23 年前、この村に移住してきた夫妻がいる。2016 年 4 月に起きた、熊本地震で住宅が損壊するなど大きな被害を受けた。熊本地震から 1 年。地震を経ても、2 人は南阿蘇で暮らすという。二人にとって南阿蘇と	ユーチューブでの公開。イッツコムで編集した映像を放送。また、南阿蘇村観光復興プロジェクト交流協議会のフェイスブックで配信。

² 佐世保ケーブルテレビと東急沿線イッツコムエリア（約 68 万世帯）で放送されている全国の土地に密着した 30 分番組。

³ 地域に密着したドキュメンタリーを撮ることによって、地域の魅力の再発見を目指したプロジェクト。

		はどのような存在なのか。南阿蘇に生きる、夫婦の物語に迫った約 30 分のドキュメンタリー。	
2017 年 8 月 13 日～21 日	福井県高浜町	高浜町で開催されるお祭り「漁火想」に密着した中国人留学生を追った 22 分のメイキングドキュメンタリー。	2017 年 12 月、編集した映像を高浜町に送達。町の中で上映会を実施。また、YouTube で公開。

4、執筆プロジェクト

①中央評論グラビア⁴

掲載号	執筆者	内容
No.299	渡邊 七海	日本全国 B29 慰霊碑物語特集
No.300	真野 隼伸	少年が見た戦争 ～元人間地雷要員の証言～
No.301	會田 野乃花	真珠湾攻撃、ニイハウ島事件、そして 「五つの名札」
No.302	友利 桂都	「新しい日本らしさ」の発見 ～小さな町の大きな発信～

⁴ 中央大学が出版している学内誌。文字数は 4500～5000 字。内容としては、歴史に埋もれた事実を掘り起しその証言を残すルポルタージュ。

② 草のみどり（「多摩探検隊」制作日誌）

納品月	執筆・タイトル
‘17年 3月 (301号)	「あの名物看板犬・シバ君は今・・・」 原 啓介
5月 (302号)	「80歳の差のインタビューー特別養護老人ホームで考えたことー」 會田 野乃花
7月 (303号)	「原爆から少女を救った『棕の木』の物語」 西山 周
9月 (304号)	「後にくを信ずー元特攻志願兵を取材してー」 渡邊 七海
11月 (305号)	「つなぎー型染版画家から学んだことー」 仲山 一志
‘18年 1月 (306号)	「立川のヤギー都会のオアシスの謎に迫るー」 星 彩華
3月 (307号)	「日本の宇宙開発のルーツ、国分寺ー偶然ではなかった発祥の理由ー」 明田 夕芽

5、コンテストの受賞歴について

日時	コンテスト名	賞	作品	制作者	時間	内容
2017年 9月	那須国際短編 映画祭	ノミ ネー ト	女学生と風船 爆弾	広瀬 愛奈恵	20 分	太平洋戦争末期、日本軍は 最終兵器として「風船爆弾」 の製造を開始した。その任 務を担ったのがまだ 10 代 の女学生達だった。当時、 製造にあたった女学生の記 憶をたどったドキュメンタ リー。
2017年 9月	外国特派員協 会ジャーナリ ズム奨学金	受賞	日本全国 B29 慰霊碑物語	會田 野乃花		全国、17ヶ所の B29 搭乗員 を吊った慰霊碑を取材し、 中央評論の特集にまとめ た。
2017年 11月	「地方の時代」 映像祭 市民・学生・自 治体部門	奨励 賞	後にくを信 ずー中央大学 と戦争ー	渡邊 七海	16 分	太平洋戦争末期、徴兵猶予 制度は廃止され、学生たち は戦地に出陣した。中央大 学 OB の細井巖さん(93)は、

						1943 年 12 月に繰り上げ卒業して入営。特別操縦見習士官となり、45 年 6 月に沖縄への特攻命令を受ける。 しかし、本土決戦のための待機特攻隊員に回され、そのまま終戦を迎えた。彼には 2 人の友人がいた。1 人は、特攻で戦死。もう 1 人は、玉音放送の翌日に自決。青春を戦争に捧げた 3 人の若者の生き様に迫ったドキュメンタリー。
2018 年 1 月	東京ビデオ フェスティバル	①ビデオ 大賞 ②③ 入賞	①女学生風 船爆弾 ②ドイツの 小さな町を 救った日本 人医師の物語 ③平和観音 像に刻まれた 遺志～東 村山に墜ち た B29～	広瀬 愛奈恵 荒川 あずさ 山田 俊輔	① 20 分 ② 10 分 ③ 10 分	①上記と同じ ②ドイツのヴリーツェンに、東京都八王子市出身の日本人医師・肥沼信次の墓がある。ヴリーツェンのたった一人の医師として多くのチフス患者の命を救った。そんな八王子市出身の医師・肥沼信次の物語を追ったドキュメンタリー。 ③東村山市秋津町。ある民家の庭先に、1 体の平和観音像がある。太平洋戦争末期、1 機の B29 爆撃機が、日本軍の対空放火を受け、東村山に墜落した。搭乗していたアメリカ兵 11 人全員が死亡した。墜落で亡くなった米兵全員を弔うために建立された平和観音像の物語を追ったドキュメンタリー。

① 2017年11月11日 「地方の時代」映像祭（NHK、民放連など主催）奨励賞を受賞



2017 年	掲載紙・出演番組	取り上げられた活動	
11 月 24 日	朝日新聞	ゼミ活動の紹介	資料①

[illegible]

7、合宿について

・2017年11月25日、26日 奥多摩「奥多摩温泉郷旅館 観光荘」にて高浜プロジェクトのプレビュー、多摩探検隊の簡易構成表添削を行った。

8、見学調査

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2017年4月

実施場所： 型染版画家 田中清氏アトリエ

実施内容： 多摩探検隊「つなぎー型染版画家ー」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2017年4月～8月

実施場所： 立飛ホールディングス みどり地区

実施内容： 多摩探検隊「立川のヤギ-都会のオアシスの謎に迫る-」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2017年4月～5月

実施場所： 法政大学中学高等学校

武蔵野中央公園

田村禮二氏宅

実施内容： 多摩探検隊「勤労学徒の証言ー中島飛行機武蔵製作所」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2017年5月～11月

実施場所： 多摩全生園・花さき保育園

実施内容： 多摩探検隊「多摩全生園」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実施日： 2017年5月～8月

実施場所： 尚武会

藤森体育館

実施内容： 多摩探検隊「ムエタイ」の制作

成果： 制作した番組はCATVで放送し、更にWEBで配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 5 月 25 日
実施場所： 国分寺駅
実施内容： 多摩探検隊放送「ペンシルロケット」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信した。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 7 月～12 月
実施場所： 小平中央公園
株式会社キャッセン大船渡
大船渡ふるさと交流センター「三陸 SUN」
実施内容： 多摩探検隊「こだいらサーカス」の制作
成 果： 制作した番組は CATV で放送し、更に WEB で配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 6 月～8 月
実施場所： 内藤昭雄氏宅
高乗寺
浅川地下壕
中林秀介氏宅
実施内容： 多摩探検隊「浅川地下壕」の制作。
成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 6 月 23 日～24 日
実施場所： 静岡市戦禍犠牲者慰霊塔・B-29 墜落搭乗員慰霊碑
実施内容： 慰霊祭に参加し、ハワイの航空博物館長夫妻に取材を行った。
成 果： 「B29 慰霊碑物語」が外国特派員協会で受賞した。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 8 月 13 日～21 日
実施場所： 福井県若狭高浜観光協会
実施内容： 「漁火想」を追う中国人留学生のメイキングドキュメンタリーの制作
成 果： 高浜町で上映会を行った。

・見学調査 演習 A・B・C

実 施 日： 2017 年 6 月～11 月
実施場所： 八王子市役所
京王八王子駅

北野市民センター
藤森体育館
左田野氏宅
中町公園
八王子エルシィ
八王子市学園都市センター

実施内容： 多摩探検隊「肥沼信次医師続編」の制作

成 果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日： 2017年8月～10月

実施場所： 森重昭氏宅・他

Honeybee イングリッシュスクール

実施内容： 多摩探検隊「中央大学と戦争」の制作

成 果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日： 2017年10月～11月

実施場所： 築地本願寺

横浜媽祖廟

実施内容： 多摩探検隊「奥多摩の台湾出身戦没者慰霊碑」の制作

成 果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日： 2017年11月～12月

実施場所： 栃木県那須町 中込敏朗氏宅

実施内容： 多摩探検隊「満蒙開拓団」の制作

成 果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日： 2017年12月

実施場所： まちだ中央公民館

実施内容： 多摩探検隊「町田米軍機墜落事故」の制作

成 果： 制作した番組はCATVで放送やWEBで配信する予定。

・見学調査 演習A・B・C

実 施 日： 2017年7月～12月

実施場所： 日本丸メモリアルパーク

エスカル横浜

帆船日本丸

実施内容： 「元 LST 乗組員」の制作

成 果： 制作した番組は CATV で放送や WEB で配信する予定。

(7) 山田 俊治 (全学連携教育機構・兼任講師)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

明治前期のメディア史研究

<授業の概要>

本年度は、昨年度までの成果を踏まえ新たな調査・研究を二件並行して展開する。第一に、新聞・雑誌の流通網の発達する過程を捉え、稗史小説類の出版・流通との相関を明らかにする。第二に、広告メディアの多様性とその時代的変遷、地域発信の広告戦略の様相を捉えるための事例研究として、草津温泉発信の広告を江戸時代のものより網羅的に調査・収集し、その史的展開をたどってみる。

データ入力等、授業時間外の作業となるが、その作業に基づく報告と討議を主軸に授業を進め、それに基づいて、次年度を目途に共同の論文に仕上げるまでを行う。また、新たな研究資料を得るための調査合宿を行う。

<活動内容>

明治前期のメディア史研究ゼミは、昨年度までの成果を踏まえて、稗史小説などの出版・流通との相関を明らかにすることを目的とした。明治二〇年前後の新聞には、書籍の廉価販売広告を一面全体に掲載することがあった。東京では兎屋や鶴声社が有名で、大坂では大坂朝日新聞に掲載された岡島真七や、駸々堂などの出版社が広告を出していた。その中でも、今年度の課題は兎屋の広告に掲載されている書籍の一冊一冊を調査・研究することで、それらの出版や流通過程について明らかにすることを試みた。

調査に当っては、国会図書館の近代デジタルライブラリーや国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースを活用して、書影や奥付などを翻字データとして収集することを前期中に実施した。具体的には、流通過程を明らかにするために、奥付に記載された情報、中でも出版人や価格の情報ばかりではなく、大売捌や売捌書店の地理的な分布が判定できるデータファイルを作成した。

収集されたそのデータファイルは、後期に集中的に解析することを実施した。そこで判明したのは、奥付記載の定価の一割近くまで値下げされた書籍があったことである。これは、現在の出版界が採用する、著作物の再販制度が確立する以前の様態を推測させ、奥付定価が必ずしも実際価格とはならず、流通過程で販売価格が適宜設定されることを示していた。

出版人の集計データからは、東京、大坂、京都が出版の中心地であったことが分かった。そればかりではなく、現在の東京では千代田、文京、新宿が出版社の多い地区だが、明治二〇年前後には、日本橋や京橋、芝などの下町の商業地区に出版書肆が集中していたことが判明した。これは、江戸期から引き続く現象であり、下町商業地区には印刷や製本などの出版に関わる職種が背後にあったこととの関わりを窺わせてくれ、興味深いデータとなった。

大売捌の集計データは、基本的にはそれぞれの地域を中心に大売捌が設定されていたが、東京の出版社が大坂などの出版社を大売捌とする書籍も少なくはなかった。さらに、売捌書店の集計データからは、小売販売網が北海道から九州までを網羅していることが判明した。

ただし、これには出版人との関わりがあり、東京の出版社は東日本の販売網に強く、大坂の出版社は西日本に強いという傾向を見出すことができた。

ところで、廉価販売広告に掲載された書籍群と兎屋との関係については、明確な事情を明らかにすることができなかった。なぜなら、出版人、大売捌や売捌に兎屋が記載されている書籍は、調査データの三分の一以下だったからである。つまり、兎屋の廉価販売広告の書籍は、必ずしも兎屋と関わらない書籍も多く含まれていたということである。しかし、大売捌の集計データからは、東京書林会社という組織が浮上した。

東京書林会社に加盟している出版社は、兎屋（望月誠）の他に、鶴声社（森仙吉）、金松堂（辻岡文助）、春陽堂（和田篤太郎）、明三閣（覚張栄三郎）、延寿堂（小林鉄太郎）、文苑閣（鈴木喜右衛門）、金泉堂（鈴木金次郎）、自由閣（西村富次郎）、永昌堂（村形吉作）、文事堂（市川路周）などであった。これらの出版社が出版人などになった書籍は、兎屋の廉価販売広告の書籍数の上位にはあるが、それが全てというわけでもなかった。そのため、東京書林会社の出版書籍を含むとはいっても、兎屋支店と何らかの関わりをもつ大坂や、それ以外の地方の出版社の書籍も網羅した廉価販売広告になっていたのである。そのため、この兎屋と掲載書籍の出版社との関係性については、今後の課題として残されることになった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月5日(火)～2017年9月6日(水)

実施都市：山梨県甲府市

実施場所：山梨県立図書館

実施内容：山梨大学が所蔵する、旧湯地孝の蔵書である近代文庫の書籍を調査した。さらに山梨県立図書館では、所蔵の峡中新報などの地方紙掲載の書籍廉価販売広告の調査収集を実施した。

成果：近代文庫では、近代デジタルライブラリーや近代書誌・近代画像データベースなどの画像では得られなかった実物による、紙質や装丁などの書籍の細部を体験できたとともに、それらのデジタル資料にはなかった書籍に廻り合うことも可能になった。また、山梨県立図書館のマイクロ資料からは、地方紙にも存在したかなり多くの書籍廉価販売広告を収集することができた。

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

21 世紀、人類の抱えるもっとも深刻な問題は、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として経済的に厳しい貧困な状況に喘いでおり、栄養、人口、教育、衛生疾病、人権、環境、時には難民、紛争などの側面で、様々な深刻な問題が生じています。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な成長の軌道に乗るには、そこに住んでいる人々自身による自立した自助努力が不可欠です。まだ未成熟の市場の機能を強めるような民間の産業や企業を開発育成していくことが重要ですが、さらに社会の様々な領域で効率的な政府が積極的に介入し、単に市場機能だけでは解決できない深刻な構造的な問題を解決していかなければなりません。幅広い分野にわたる社会開発、ハード・ソフトのインフラ整備、計画的な経済開発の推進など、今後も長い時間をかけて継続的に全力で取り組むべき問題が山積しています。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の継続的かつ大規模な国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国との緊密な協力のもとに、資金面、人材面、貿易面、情報面の幅広い分野で、今後も長期間にわたって継続して積極的に開発問題に参加しなければ、人類の貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。国家レベルでの多様な国際協力、NGO など民間レベルでの国際協力、さらに、先進国の優れた技術の国際移転や途上国におけるグローバル企業の活動などが、貧しい途上国の経済社会の活性化（テイクオフ）に非常に重要な貢献をしていることは、確かな事実です。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関する様々な分野で高度に優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、高度な語学力による国際コミュニケーション能力、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、途上国問題に関する国際政治や経済社会の分析における高度な専門的知識・技術などが、国際協力に参加する人材にとって不可欠の個人的資質能力として強く求められています。異文化社会の複雑な社会経済構造を的確に分析し、様々な困難な環境の中でも経済社会の発展の方策を具体的に模索試行する、逞しい精神力と高度な専門能力を持った人材こそが、21 世紀の人类的な課題に挑戦することができるのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、21 世紀の人类的課題に挑戦する人材の基礎的な専門能力を養成する場として設定されました。国際的なコミュニケーション能力を継続的に強化するとともに、複数学部にまたがる様々な開発問題の専門科目群の学修を進めていきます。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、複数の担当教員とより緊密に協力しながら様々な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力育成を目標にしています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジアなどでの現地社会調査「Project-Based Field Work」による調査報告書を執筆する、実践的教育を重視しています。

2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
小森谷 徳純	経済学部	－	2	－	単独（B）
林 光洋	経済学部	11	9	4	単独（A・B・C）
武石 智香子	商学部	7	4	3	合併（A・B・C）
中迫 俊逸	商学部	－	－	1	単独（C）
平澤 敦	商学部	12	7	3	単独（A・B・C）
新原 道信	文学部	3	3	2	単独（A・B・C）
野宮 大志郎	文学部	1	2	1	合併（A・B・C）
佐々木 弘世	全学連携教育機構	28	26	12	単独（A・B・C）
稲葉 誠	全学連携教育機構	－	3	10	合併（B・C）
合計		62	56	36	

3. プログラムスケジュール

4 月	履修ガイダンス
5 月	第一回部門授業担当者委員会 第二回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
6 月	2018 年度募集に伴う総合ガイダンス
7 月	第三回部門授業担当者委員会
9 月	2018 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
11 月	2018 年度募集に伴う選考試験 第四回部門授業担当者委員会
12 月	学内活動（期末成果報告会）
3 月	FLP 修了発表 FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

実施日： 2017年12月16日(土) 10:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3453、3454、3455 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

特別講演会（下記に記載）

講演者： 伊藤 晋 氏（国際協力機構（JICA））

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 3455 教室

演 題： 国際協力の最前線から

5. 2017年度までの国際協力プログラム修了生の主な就職・進学先

国際協力機構（JICA）、日本国際協力センター（JICE）、海外産業人材育成協会（HIDA）、日本貿易保険、伊藤忠商事、日本郵船、全日本空輸、日本航空インターナショナル、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、JTB 首都圏、三菱東京UFJ銀行、三菱UFJ信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、横浜銀行、信金中央金庫、大和証券、岡三証券、石川島播磨重工業、キヤノン、日産自動車、NEC、日本IBM、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、清水建設、三井物産、大王製紙、中外製薬、船井総合研究所、アビームコンサルティング、日食、国分グループ本社、セブン・イレブン・ジャパン、LIXIL、北海道新聞社、テレビ信州、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、国家・地方公務員（厚生労働省、会計検査院、県庁、市役所など）、東京大学大学院農学生命科学研究科、東京大学大学院新領域創成科学研究科学科、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 小森谷 徳純 (経済学部・准教授)

FLP 演習 B

<テーマ>

グローバル経済環境における多国籍企業

<授業の概要>

本演習では経済学を用いて多国籍企業に関する様々なトピックをみていきます。現在のグローバル経済環境が多国籍企業にどのような変化を促すのか、あるいは多国籍企業が国々にどのような変化をもたらすのかなどがその例です。そして各トピックの中にどのような問題が存在しているのかを考えます。

その上で具体的な課題について研究を進めていくことになりますが、どのようなトピックの、どのような課題に挑戦するかは履修者の問題意識次第です。

演習 B では、経済学 (経済学入門、国際経済学) を「考えるためのツール」として用いて、多国籍企業に関する具体的な課題について本格的な研究を行い、論文を執筆していきます。なお研究はグループ単位で行います。

<活動内容>

小森谷ゼミの演習 B では、多国籍企業に関する具体的な課題について、グループ研究を行うことになっています。本年度の履修者は「多国籍企業の CSR 活動を途上国の経済発展に効果的に活用する枠組み」という大きなテーマで研究をしています。当初予定では本年度中にグループ論文を書き上げる予定でしたが、学生の海外留学などのために、在籍する学生が 1 名となり、本年度と来年度の 2 年間で論文を書き上げることとしました。したがって現時点においては未だ研究途中です。来年度実施する海外実態調査を有意義に活かして立派な論文を書き上げて欲しいと考えています。

<実態調査・見学調査・講演会>

上記の通り海外実態調査は来年度に延期した。

(2) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1年単位のゼミではなく、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェアトレード

<活動内容>

2017年度は、開発経済学（2冊）、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計4冊使用して学習しました。5月末からの1週間、11月中旬の1週間を使い、中央大学の生協店舗でフェアトレード・フェアを実施したり、11月上旬の白門祭ではフェアトレードカフェを出店したりして、実践的にフェアトレードについて学習し、中央大学のキャンパスを中心に普及・啓発にも努めました。後期には、3班に分かれて、『アジアにおける運輸交通インフラ整備の現状と課題－PPPを用いた手法の比較・考察－』、『アジア諸国における教育の質向上－公的・私的教育支援機関によるアプローチ－』、『児童労働廃止に向けた課題解決アプローチ－Child LaborからChild Workへ－』という3編のグループ論文を執筆しました。

下記の通り、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、開発分野の最新情報を吸収し、開発分野のネットワークを形成するように努力しました。活動内容の一部については、最下段に記載したURLもご参照ください。



中央大学生協の店舗で開催した秋のフェアトレード・フェア

【訪問授業等】

1) 訪問授業

実施期間：2017年11月6日(月)、11月8日(水)、11月17日(金)、11月29日(水)

実施場所：中央大学高校、中央大学附属高校、中央大学杉並高校、神奈川県立相模原高校（実施期間順）

実施内容/成果：自分たちで昨年度実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業を実施。授業時に高校生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

2) 助言講師

実施期間：2018年2月8日(木)

実施場所：群馬県立中央中等教育学校

実施内容/成果：先方の中学3年生が1年かけて実施したSDGs（持続可能な開発目標）に関する研究へのコメント、助言等を提供。「飢餓をなくす」（目標2）、「質の高い教育」（目標4）、「清潔な水と衛生」（目標6）、「持続可能な

まちと地域社会」(目標 11)のテーマについて、それぞれ 8 組、合計 32 組が研究結果を報告し、それらに対してさまざまなアドバイスや情報を提供した上で講評。中学生への助言を通じて、ゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 途上国での現地調査の実施手法について学ぶ

実施期間：2017 年度前期毎週木曜日（合計 11 回）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7406 教室

実施内容/成果：途上国での現地調査の豊富な実践経験を有する専門家、社会開発国際調査研究センターの山田恭稔先生を招き、現地調査を含む開発分野の研究を行なう際、具体的に、準備をどのように行ない、現場で現地調査をどのように実施し、得られた結果をどのように論文としてまとめていったらいいのか、といったことについて学習

2) NGOs の役割について学ぶ

実施期間：2017 年 6 月 6 日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：開発コンサルタントの伊藤解子さん（元シャンティ国際ボランティア会、元 JICA）を招き、途上国開発、特に教育分野における NGOs の役割について学習

3) アフリカとアジアの国際協力、経済開発について学ぶ

実施期間：2017 年 6 月 13 日(火)、10 月 10 日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室、8201 教室および 7709 教室

実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a) 日本のケニア向け国際協力、b) ベトナムの経済成長と行政改革について学習

4) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間：2017 年 7 月 4 日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、中南米途上地域における経済統合の特徴、進捗等について学習

5) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実施期間：2017 年 7 月 18 日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB のアジア途上地域向け貧困削減プロジェクトについて学習

6) アフリカ向け国際協力について学ぶ

実施期間：2017年9月21日(木)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7709 教室

実施内容/成果：林ゼミのOBでJICA/青年海外協力隊の浅羽政良さんを招き、現在の任地、ウガンダにおける農村開発/コミュニティ開発の活動について学習

7) 国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ

実施期間：2017年10月24日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室および 7709 教室

実施内容/成果：JICA 人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に付けていく必要があるのかについて学習

8) WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援について学ぶ

実施期間：2017年11月7日(火)、11月14日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 2号館会議室4および8201 教室

実施内容/成果：11月7日は国連 WFP 協会の本村佳子さんと西平久美子さんを招き、WFの行なっている食糧援助についてセミナー形式で学習。11月14日は、元 WFP（国連世界食糧計画）アジア地域局長の忍足謙朗さん（国連 WFP 協会）を招き、WFP の緊急支援について学習

9) 「ユニセフ・ウィーク」を通じて UNICEF の子どもに対する支援活動について学ぶ

実施期間：2017年11月28日(火)、12月5日(火)、12月6日(水)～12月12日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室、7203 教室、生協店舗、多摩センター駅周辺

実施内容/成果：「ユニセフ・ウィーク」というプロジェクトを企画し、そのもとで、日本ユニセフ協会と連携し、特別授業（11月28日）、スペシャル・セミナー（12月5日）、募金活動（12月6～12日）を実施。日本ユニセフ協会の高円承子さんを2回招き、UNICEF の子どもや母親に対する保健・健康・衛生、教育分野の支援活動について学習。本年は、特に水分野に焦点を絞ってセミナー、募金活動を行ない、集まった17万円の寄付金は浄水剤の寄付に充当

10) フェアトレードについて学ぶ

実施期間：2017年5月29日(月)～6月2日(金)、11月2日(木)～11月5日(日)、11月13日(月)～11月17日(金)、12月8日(金)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、6号館ペデ下および6102 教室

実施内容/成果：a) 5月と11月の2回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c) 12月にスターバックスを招いて講演会を開催し、実践的にフェアトレードを

学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを啓蒙・啓発

11) JICA ボランティア事業について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 12 月 19 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 3115 教室

実施内容/成果：青年海外協力協会の藤田晃典さんを招き、青年海外協力隊をはじめとする JICA ボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ。中央大学文学部 0B で JICA/青年海外協力隊の隊員として派遣された原真人さんも招き、任地であったマラウイでの水・衛生管理（きれいな水の供給、下水、トイレの整備）に焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習

【参考 URL】

1) JICA 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/10/8251/>

2) WFP 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8396/>

3) ユニセフ・ウィークを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8550/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8520/>

4) フェアトレード関連のイベントを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8407/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8629/>

F L P 演習 B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェアトレード

<活動内容>

2017 年度は、日本語のテキスト 3 冊（『フィリピン-急成長する若き「大国」』（井出穰治、2017 年）、『貧困と闘う知：教育、医療、金融、ガバナンス』（デュフロ、E.、2017 年）、『なぜ貧しい国はならないのか：正しい開発戦略を考える』（大塚啓二郎、2014 年）、英語のテキスト 2 冊（アジア開発銀行の *Key Indicators for Asia and the Pacific 2016*、世界銀行の *Philippines: Fostering More Inclusive Growth*）を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。また、林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう 3 年次の 1 年間の研究プロジェクトも実施しました。前年度末の 2017 年 2 月から本格的にスタートし、研究対象国・テーマを決め、経済学部鈴木敏文奨学金に応募して資金を確保し、研究計画書を作成し、国内事前調査を行ない、訪問先のアポイントメントをとりつけ、ロジスティクスの手配をし、フィリピンでの海外現地調査（9 月初旬から 2 週間）を実施し、最終的に、2018 年 2-3 月、英語版および日本語版の本格的な研究論文を完成させました。

このプロジェクトでは、フィリピンの低所得者層の生活改善について、教育、社会福祉、環境（ごみの分別）マイクロファイナンスの 4 分野で研究を行ないました。外部から専門家

を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。また、現地調査実施後は、さまざまな機会を利用して研究成果を発表しました。活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



マニラのスモーキーマウンテン（ごみ山）として有名なトンド地区で子どもたちと

【海外現地調査】

フィリピン現地調査

実施期間：2017年9月2日(土)～9月15日(金)

実施場所：フィリピン（マニラおよびその周辺地域）

実施内容/成果：フィリピンにおける、①代替教育（ALS：Alternative Learning System）としての A&E プログラム（Accreditation and Equivalency Program）の教育の質とその改善に必要なこと、②児童養護施設で生活する子どもたちの意見表明と施設スタッフの意識の関係、③家庭廃棄物の分別行動促進とバランガイの役割、④マイクロファイナンスを活用した事業支援プログラムと女性のエンパワーメントについて研究。それぞれの社会開発的な活動・行為に持続性を持たせるために必要なことを学習

【訪問授業等】

1) 訪問授業

実施期間：2017年11月6日(月)、11月8日(水)、11月17日(金)、11月29日(水)

実施場所：中央大学高校、中央大学附属高校、中央大学杉並高校、神奈川県立相模原高校（実施期間順）

実施内容/成果：自分たちで昨年度実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業を実施。授業時に高校生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

2) 助言講師

実施期間：2018年2月8日(木)

実施場所：群馬県立中央中等教育学校

実施内容/成果：先方の中学3年生が1年かけて実施したSDGs（持続可能な開発目標）に関する研究へのコメント、助言等を提供。「飢餓をなくす」（目標2）、「質の高い教育」（目標4）、「清潔な水と衛生」（目標6）、「持続可能なまちと地域社会」（目標11）のテーマについて、それぞれ8組、合計32組が研究結果を報告し、それらに対してさまざまなアドバイスや情報を提供した上で講評。中学生への助言を通じて、ゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) 途上国での現地調査の実施手法について学ぶ

実施期間：2017年度前期毎週木曜日（合計11回）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7406 教室

実施内容/成果：途上国での現地調査の豊富な実践経験を有する専門家、社会開発国際調査研究センターの山田恭稔先生を招き、現地調査を含む開発分野の研究を行なう際、具体的に、準備をどのように行ない、現場で現地調査をどのように実施し、得られた結果をどのように論文としてまとめていったらいいのか、といったことについて学習

2) NGOs の役割について学ぶ

実施期間：2017年6月6日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および7709 教室

実施内容/成果：開発コンサルタントの伊藤解子さん（元シャンティ国際ボランティア会、元 JICA）を招き、途上国開発、特に教育分野における NGOs の役割について学習

- 3) アフリカとアジアの国際協力、経済開発について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 6 月 13 日(火)、10 月 10 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室、8201 教室および 7709 教室
実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a) 日本のケニア向け国際協力、b) ベトナムの経済成長と行政改革について学習
- 4) 国際開発金融機関の役割について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 7 月 4 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室
実施内容/成果：元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、中南米途上地域における経済統合の特徴、進捗等について学習
- 5) 国際開発金融機関の役割について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 7 月 18 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室
実施内容/成果：元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB のアジア途上地域向け貧困削減プロジェクトについて学習
- 6) アフリカ向け国際協力について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 9 月 21 日(木)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7709 教室
実施内容/成果：林ゼミの OB で JICA/青年海外協力隊の浅羽政良さんを招き、現在の任地、ウガンダにおける農村開発/コミュニティ開発の活動について学習
- 7) 国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ
実 施 期 間：2017 年 10 月 24 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室および 7709 教室
実施内容/成果：JICA 人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に付けていく必要があるのかについて学習
- 8) WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 11 月 7 日(火)、11 月 14 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 2 号館会議室 4 および 8201 教室
実施内容/成果：11 月 7 日は国連 WFP 協会の本村佳子さんと西平久美子さんを招き、WFP の行なっている食糧援助についてセミナー形式で学習。11 月 14 日は、元 WFP（国連世界食糧計画）アジア地域局長の忍足謙朗さん（国連 WFP 協会）を招き、WFP の緊急支援について学習
- 9) 「ユニセフ・ウィーク」を通じて UNICEF の子どもに対する支援活動について学ぶ
実 施 期 間：2017 年 11 月 28 日(火)、12 月 5 日(火)、12 月 6 日(水)～12 月 12 日(火)
実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室、7203 教室、生協店舗、多摩センター駅周辺

実施内容/成果：「ユニセフ・ウィーク」というプロジェクトを企画し、そのもとで、日本ユニセフ協会と連携し、特別授業（11月28日）、スペシャル・セミナー（12月5日）、募金活動（12月6～12日）を実施。日本ユニセフ協会の高円承子さんを2回招き、UNICEFの子どもや母親に対する保健・健康・衛生、教育分野の支援活動について学習。本年は、特に水分野に焦点を絞ってセミナー、募金活動を行ない、集まった17万円の寄付金は浄水剤の寄付に充当

10) フェアトレードについて学ぶ

実施期間：2017年5月29日(月)～6月2日(金)、11月2日(木)～11月5日(日)、11月13日(月)～11月17日(金)、12月8日(金)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、6号館ペデ下および6102教室

実施内容/成果：a) 5月と11月の2回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c) 12月にスターバックスを招いて講演会を開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを啓蒙・啓発

11) JICA ボランティア事業について学ぶ

実施期間：2017年12月19日(火)

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 3115教室

実施内容/成果：青年海外協力協会の藤田晃典さんを招き、青年海外協力隊をはじめとするJICAボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ。中央大学文学部OBでJICA/青年海外協力隊の隊員として派遣された原真人さんも招き、任地であったマラウイでの水・衛生管理（きれいな水の供給、下水、トイレの整備）に焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習

【その他】

下記の活動等を通じて、それぞれに関連する知識や情報を獲得

1) ライフスキル教育について学ぶ

実施日：2017年6月17日(土)

実施都市：東京都港区

実施場所：慶應義塾大学 三田キャンパス

実施内容/成果：NPO 法人ソルトパヤタス開催のイベント「ライフスキル教育が変える未来」に参加し、ライフスキル教育の必要性、具体的な内容、成果の測定方法について学習

2) フィリピンのカランガイとそこでの廃棄物処理について学ぶ

実施日：2017年7月18日(火)

実施都市：東京都文京区

- 実施場所：東京大学 本郷キャンパス
実施内容/成果：東京大学工学部横張真教授を訪ね、フィリピンのバランガイの状況を確認するとともに、バランガイにおける廃棄物処理について学習
- 3) フィリピンに関する研究内容の的確性について確認
実施日：2017年7月25日(火)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：JICA 本部
実施内容/成果：JICA 本部の仲宗根邦宏さん（元 JICA フィリピン事務所次長）に研究内容案を報告し、JICA の視点から、アドバイスをもらうとともに、関連する機関・団体に関する情報収集
- 4) 日本のごみ処理経験について学ぶ
実施日：2017年8月4日(金)
実施都市：東京都八王子市
実施場所：八王子市役所
実施内容/成果：八王子市役所資源循環部ごみ減量対策課にインタビューし、日本の高度経済成長期のごみ処理政策に関する情報を収集。特に、ごみ処理政策が優れていると言われている八王子市のごみ袋有料化政策の実施・推進方法について学習
- 5) フィリピンのサリサリストアについて学ぶ
実施日：2017年8月4日(金)
実施都市：東京都武蔵野市
実施場所：亜細亜大学
実施内容/成果：亜細亜大学の荒井将志先生から、研究計画書や現地調査の手法に関するアドバイスを入手。フィリピンの BOP 層やサリサリストアの状況の詳細について学習
- 6) インフォーマル教育について学ぶ
実施日：2017年8月23日(水)
実施都市：東京都千代田区
実施場所：上智大学 四谷キャンパス
実施内容/成果：上智大学の丸山秀樹教授を訪ね、インフォーマル教育の詳しい情報（インフォーマル教育の質、先行研究、学習者へのインタビュー手法等）について学習
- 7) フィリピンのごみのリサイクル、コンポスト化について学ぶ
実施日：2017年8月30日(水)
実施都市：千葉県千葉市
実施場所：IDE-JETRO
実施内容/成果：アジア経済研究所の小島道一先生を訪ね、フィリピンのリサイクルやコンポスト化、地方自治体のごみ・廃棄物処理政策について学ぶ
- 8) フィリピンの持続的な社会開発について学ぶ

実 施 日：2017 年 9 月 2 日(土)～9 月 15 日(金)

実 施 都 市：マニラ（フィリピン）

実 施 場 所：マニラおよび近郊

実施内容/成果：教育、福祉、環境、マイクロファイナンスの 4 班に分かれて現地調査を実施。教育班は教育省や小学校、福祉班は児童養護施設、環境班は NGO やバランガイ政府、マイクロファイナンス班は民間企業や地元のサリサリストアを訪問し、インタビュー・アンケート調査を実施。各班が設定した仮説の検証のために必要な情報を収集。文献調査では知ることのできなかったフィリピンの状況について学習

9) フィリピンの開発の現状と地方政府の役割について学ぶ

実 施 日：2017 年 9 月 3 日(日)

講 演 者：BJ Gotanci さん（開発・経営コンサルタント）

演 題：フィリピンの開発の現状と地方政府の役割

実 施 都 市：マニラ（フィリピン）

実 施 場 所：Best Western Oxford Makati Hotel

実施内容/成果：フィリピンの最新の開発・貧困状況に関する講演。フィリピンの貧困の状況や地方政府の人的資本の水準、行政能力等について学習

10) フィリピンのストリートチルドレンとノンフォーマル教育について学ぶ

実 施 日：2017 年 9 月 11 日(月)

講 演 者：Helen Estrada さん（KnK International Philippines）

演 題：Empowerment for Street Children in the Philippines

実 施 都 市：マニラ（フィリピン）

実 施 場 所：KnK International Philippines

実施内容/成果：フィリピンのストリートチルドレンとノンフォーマル教育についての講演。フィリピンでストリートチルドレン保護やノンフォーマル教育支援を行なっている Helen さんから、現場でしか分からない現状や課題、必要とされている支援や制度について学習

11) エンパワーメントの評価方法について学ぶ

実 施 日：2017 年 12 月 11 日(月)

実 施 都 市：神奈川県横浜市

実 施 場 所：横浜国立大学

実施内容/成果：横浜国立大学の藤掛洋子先生を訪ね、エンパワーメントの評価方法や関連する文献・資料について学習

12) 開発教育の手法について学ぶ

実 施 日：2018 年 1 月 28 日(日)

実 施 都 市：東京都渋谷区

実 施 場 所：JICA 東京

実施内容/成果：JICA が実施する教師海外研修東京報告会に参加し、SDGs を小学生・中学生・高校生に教える際の注意点について学習。次年度実施予定の訪問授業のネットワークの形成

【参考 URL】

1) JICA 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/10/8251/>

2) WFP 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8396/>

3) ユニセフ・ウィークを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8550/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8520/>

4) フェアトレード関連のイベントを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8407/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8629/>

F L P 演習 C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学に軸足を置きつつ、しかし研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・衛生・医療、ジェンダー、環境・エネルギー等の社会・環境面へも広げ、学際的に開発問題を扱っていきます。本演習は、1 年単位のゼミではなく、3 年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、女性開発（ジェンダー）
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、フェアトレード

<活動内容>

2017 年度は、特に卒業論文の完成に向けて、研究計画書作りと幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげました。卒業論文の作成に加えて、下記のように、外部から専門家を招いて特別授業を実施したり、外部で開催されたセミナー、講演会、ワークショップ等に参加したりして、研究に必要な知識や情報の獲得に努めました。

本年度は、2017 年 11 月、4 つの高校（中央大学附属高校、中央大学杉並高校、中央大学高校、神奈川県立相模原高校）に対して訪問授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えるとともに、学生自身の知識の整理を行ない、また、開発教育についての実践的研究も実施しました。加えて、先方からの依頼に基づいて、7 月には千葉県立佐原高校で訪問授業を実施し、また、2 月には群馬県立中央中等教育学校で助言講師を務めました。さらに、日本ユニセフ協会と連携して、スペシャル・セミナー、特別授業、募金活動から成る「ユニセフ・ウィーク」を企画し、11 月から 12 月にかけて実施しました。

活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。



中大附属高校にて「国際協力セミナー」というテーマで訪問授業を実施

【訪問授業等】

1) 訪問授業

実 施 期 間：2017 年 11 月 6 日(月)、11 月 8 日(水)、11 月 17 日(金)、11 月 29 日(水)

実 施 場 所：中央大学高校、中央大学附属高校、中央大学杉並高校、神奈川県立相模原高校（実施期間順）

実施内容/成果：自分たちで昨年度実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等について「国際協力セミナー」というテーマで高校生に対して参加型の授業を実施。授業時に高校生に対して質問票を配布し、開発教育の効果、開発教育で留意すべきこと等についての調査も実施。高校生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

2) 訪問授業

実 施 期 間：2017 年 7 月 12 日(水)

実 施 場 所：千葉県立佐原高校

実施内容/成果：上記同様、自分たちで昨年度実施した海外現地調査（フィリピン）の経験や結果を材料として使用しながら、途上国の基礎的な状況、貧困の特徴、貧困に陥る要因、貧困解決の方法等の内容で高校生に対して参加型の授業を実施。高校生に対する途上国の開発・国際協力の啓発推進や情報提供、そしてゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

3) 助言講師

実 施 期 間：2018 年 2 月 8 日(木)

実 施 場 所：群馬県立中央中等教育学校

実施内容/成果：先方の中学 3 年生が 1 年かけて実施した SDGs（持続可能な開発目標）に関する研究へのコメント、助言等を提供。「飢餓をなくす」（目標 2）、「質の高い教育」（目標 4）、「清潔な水と衛生」（目標 6）、「持続可能なまちと地域社会」（目標 11）のテーマについて、それぞれ 8 組、合計 32 組が研究結果を報告し、それらに対してさまざまなアドバイスや情報を提供した上で講評。中学生への助言を通じて、ゼミ学生自身の知識の整理、情報の伝えかたの学習。さらに、開発教育の効果、開発教育を実施する際に求められていること、注意すべきこと等について学習

【特別授業、セミナー、講演会等】

下記の特別授業、セミナー、講演会等を通じて、それぞれの分野について多くを学習

1) NGOs の役割について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 6 月 6 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：開発コンサルタントの伊藤解子さん（元シャンティ国際ボランティア会、元 JICA）を招き、途上国開発、特に教育分野における NGOs の役割について学習

2) アフリカとアジアの国際協力、経済開発について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 6 月 13 日(火)、10 月 10 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室、8201 教室および 7709 教室

実施内容/成果：A&M コンサルタントの松本彰さんを招き、a) 日本のケニア向け国際協力、b) ベトナムの経済成長と行政改革について学習

3) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 7 月 4 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：元 IDB（米州開発銀行）の綿貫雅一さんを招き、中南米途上地域における経済統合の特徴、進捗等について学習

4) 国際開発金融機関の役割について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 7 月 18 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7709 教室

実施内容/成果：元 ADB（アジア開発銀行）の前川司さんを招き、ADB のアジア途上地域向け貧困削減プロジェクトについて学習

5) アフリカ向け国際協力について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 9 月 21 日(木)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 7709 教室

実施内容/成果：林ゼミの OB で JICA/青年海外協力隊の浅羽政良さんを招き、現在の任地、ウガンダにおける農村開発/コミュニティ開発の活動について学習

6) 国際協力に従事する人材に求められていることについて学ぶ

実 施 期 間：2017 年 10 月 24 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室および 7709 教室

実施内容/成果：JICA 人事部長の戸川正人さんを招き、国際協力にはどのような人材が求められていて、そのような人材になるためにはどのような能力をどのように身に付けていく必要があるのかについて学習

7) WFP（国連世界食糧計画）の食糧支援、緊急支援について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 11 月 7 日(火)、11 月 14 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 2 号館会議室 4 および 8201 教室

実施内容/成果：11 月 7 日は国連 WFP 協会の本村佳子さんと西平久美子さんを招き、WFP の行なっている食糧援助についてセミナー形式で学習。11 月 14 日は、元 WFP（国連世界食糧計画）アジア地域局長の忍足謙朗さん（国連 WFP 協会）を招き、WFP の緊急支援について学習

8) 「ユニセフ・ウィーク」を通じて UNICEF の子どもに対する支援活動について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 11 月 28 日(火)、12 月 5 日(金)、12 月 6 日(水)～12 月 12 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 8201 教室、7203 教室、生協店舗、多摩センター駅周辺

実施内容/成果：「ユニセフ・ウィーク」というプロジェクトを企画し、そのもとで、日本ユニセフ協会と連携し、特別授業（11 月 28 日）、スペシャル・セミナー（12 月 5 日）、募金活動（12 月 6～12 日）を実施。日本ユニセフ協会の高円承子さんを 2 回招き、UNICEF の子どもや母親に対する保健・健康・衛生、教育分野の支援活動について学習。本年は、特に水分野に焦点を絞ってセミナー、募金活動を行ない、集まった 17 万円の寄付金は浄水剤の寄付に充当

9) フェアトレードについて学ぶ

実 施 期 間：2017 年 5 月 29 日(月)～6 月 2 日(金)、11 月 2 日(木)～11 月 5 日(日)、11 月 13 日(月)～11 月 17 日(金)、12 月 8 日(金)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 生協店舗、6 号館ペデ下および 6102 教室

実施内容/成果：a) 5 月と 11 月の 2 回、中央大学生協の店舗でフェアトレード・フェアを、b) 11 月の白門祭でフェアトレード商品の販売会を、c) 12 月にスターバックスを招いて講演会を開催し、実践的にフェアトレードを学習すると同時に、学内の学生、教職員にフェアトレードを啓蒙・啓発

10) JICA ボランティア事業について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 12 月 19 日(火)

実 施 場 所：中央大学 多摩キャンパス 3115 教室

実施内容/成果：青年海外協力協会の藤田晃典さんを招き、青年海外協力隊をはじめとする JICA ボランティア事業の職種、応募条件、応募方法等の仕組みについて学ぶ。中央大学文学部 0B で JICA/青年海外協力隊の隊員として派遣された原真人さんも招き、任地であったマラウイでの水・衛生管理（きれいな水の供給、下水、トイレの整備）に焦点を当てたコミュニティ開発の活動について学習

11) 開発教育について学ぶ

実 施 期 間：2017 年 10 月 24 日(火)

実 施 場 所：聖心グローバルプラザ（東京都渋谷区）

実施内容/成果：開発教育協会主催の開発教育セミナーに参加し、開発教育分野の授業の進め方、ファシリテーターの役割、グループワークの進め方、アンケートの作成方法等について学んだ

【参考 URL】

1) JICA 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/10/8251/>

2) WFP 特別授業を実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8396/>

3) ユニセフ・ウィークを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8550/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8520/>

4) フェアトレード関連のイベントを実施

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/11/8407/>

<http://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2017/12/8629/>

(3) 武石 智香子 (商学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

日本文化紹介英語プレゼンおよび近代社会の共通課題 (サステナビリティ)

<授業の概要>

A 生の主たる課題は英語によるプレゼン・討論である。実態調査先であるニューヨークでは、海外で働くことについて、若い OB 達から薫陶を受けた。ボストンでは、シラバスを重ねて授業を進めているブランダイス大学の学生、および共通の読み物を教材として読んできたハーバード大学において、プレゼンや討論等を行った。

B・C 生は、これから発展すると予測されるインバウンド型の国際協力に向けて、福島県・宮城県で震災後の持続可能性 (サステナビリティ) に関する調査を行った。2 月にはオレゴン州に赴き、オレゴン大学で授業参加、ポートランド州立大学でプレゼンを行った。両大学では、東北実態調査に基づく調査票調査も実施した。

【演習 A】

ブランダイス大学において、①日本のダイバーシティ教育について英語によるプレゼンを行った。また、ブランダイス大学の学生とは 1 対 1 のペアを組み、秋から冬にかけて COIL プロジェクトを実施した。さらにボストン大学の教授らとともに、ナショナリズムに関する研究集会に参加して、討論を行った。

ハーバード大学では、共通の読み物である Douglass の *Narrative* および “So-Called Emancipation” を学期中に読んだうえで、ハーバード大学の学生との合同授業に参加した。

【演習 B・C】

社会が直面する地球規模課題について、国境を越えて協力し、解決していく国際社会の発展のために、地球規模課題に直面し、サステナブルな社会の創出に向かっている東北地方で実態調査を行った。福島県いわき市では地元密着型の企業を訪れ、震災後の企業による社会貢献活動についてヒアリングを行った。また、復興のためのオーリーブプロジェクトの実地見学も実施した。宮城県では、市役所・町役場を訪問し、津波被災地の復興と少子高齢化への施策についてヒアリングを行った。さらに東北における実態調査に基づき、インバウンドと絡めた国際協力の在り方について、世界一魅力的な街とされるオレゴン州ポートランド市および近郊のユージーン市を訪れ、調査票調査を実施した。

【演習 A・B・C 共通】

フルブライト招聘教員である Nancy Sanders 教授をお迎えし、秋学期を通して Shapiro & Stefkovich 著 *Ethical Leadership and Decision Making in Education* を読んだ。



<活動内容>

武石ゼミのテーマは、International Cooperation for Sustainability および Decision Making in Diversity である。

地球規模課題の解決には、異なる文化的・社会的背景を持つ人々の間で「意思決定」が成立することが不可欠である。演習 A では、国外実態調査およびアメリカ人教員との授業を通じて、多様性・寛容性の重要性がますます高まっていること、それに伴い、国内の問題であっても意思決定が非常に難しくなっていることを学んだ。他方で、地球環境・社会の持続可能性のためには、国境を越えて協力できる国際社会の構築が大切である。現実認識の文化的背景や価値観や異なる人々が合意にたどり着くために、エビデンスに基づきつつ普遍的価値に訴えていくことが今後ますます重要になってくる。演習 B・C では、主にエビデンスを統計的にまとめる分析法について英語で学んだ。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017年8月6日(日)～2017年8月9日(水)

実施都市：宮城県東松島市

実施場所：宮城県環境未来住宅暮らし事業協同組合

実施内容：8/6(日) 東京→いわき市に移動。(株) マルベリィ 桑名社長にヒアリング調査。いわきオリーブプロジェクト 木田氏にヒアリング調査。

8/7(月) 午前：東松島市に移動、経済学部井村教授と合流。環境未来住宅暮らし事業協同組合 高橋理事・本郷副理事長にヒアリング調査。

午後：石巻市復興まちづくり情報交流館(中央館) 見学

夜：OB 2名と合流、喜八櫓きた道(きはちろきたみち)を見学

8/8(火) 午前：七ヶ浜町役場でヒアリング調査

午後：大郷町役場でヒアリング調査

8/8(水) 午前：東松島市役所で古山副市長にヒアリング調査。HOPE(東松島未来都市機構)でヒアリング調査、その後 HOPE の案内により「東松島スマート防災エコタウン」の見学。

午後：山元町役場でヒアリング調査、その後、東京に移動

成果：インバウンドによる地域活性化に繋がる実態調査を行うことが出来た。写真は東松島市古山副市長へのヒアリング。



対象演習：A

実施日：2017年10月28日(土)～2017年11月5日(日)

実施都市：ニューヨーク・ボストン（アメリカ）

実施場所：ブランダイス大学・ハーバード大学

実施内容：10/28（土） NY 着

10/29（日） NY 白門会との会合、夜ボストンに移動の予定が、嵐によるフライトキャンセルにて延期

10/30（月） 昼前後：ニューヨークからボストンに移動

午後：Brandeis University プレゼン

14:00～15:20 Pairing Project 教室：Golding 109

交流会（1時間）

11/1（水） 午前：MIT 見学

午後：Harvard University 授業参加@Room305/William James Hall
Nicolas Prevelakis 先生、Don Tontiplaphol 先生

11/3（金） 嵐で実現できず、再設定してくれた Brandeis キャンパスツアー
Brandies University, International and Global Studies との
Panel Discussion "Nationalism and Globalization in East
Asia" @Mandel Humanities Center

Chandler Rosenberg 先生

その後、嵐で再設定してもらったプレゼン

11/4（土） 帰国

成果：ハーバードでは、現地学生の討論を実感することが出来た。ブランダイス大学の学生とは、帰国後も続くペアで、COIL プロジェクトの企画を話し合うことが出来た。英語によるプレゼンも好評で、交流会、キャンパスツアーを通じて現地学生との関係を構築することができたこともあり、年度末にはペアでプレゼンを創り上げることが出来た。研究集会ではアメリカの分断などについて話し合わせ、帰国後の授業につなげることが出来た。写真左はブランダイス大学での集合写真、右はハーバード大学での合同授業の様子。



(4) 中迫 俊逸 (商学部・教授)

FLP演習C

<テーマ>

ビジネス・コミュニケーションとその関連分野の研究

<授業の概要>

本演習においては、異文化コミュニケーションの理論と実践の研究を行った。また、ビジネス・コミュニケーションの研究においては、受講生による個人発表をさせた。

今年度は4年生のみが履修していたので、例年と異なり、個人研究に重点を置いて論文作成指導を行った。

<活動内容>

4年生のみが履修していたので、履修者と相談の上、決定したテーマに沿って論文作成指導を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

特になし。

(5) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミAは、グローバル的な思考に重要な基礎的知識をMBAのテキスト中の、マーケティング・財務諸表分析等を解説することを通じて、習得しながら、各グループが研究テーマを設定し、海外ヒアリング・年度末成果報告会に向けて、毎回2～3グループの研究報告をもとにディスカッションを行った。

各グループの研究テーマ（分野）が異なるため、テーマを進めるにあたって学習が必要な分野を適宜解説し、ディスカッションが一方通行にならないような工夫を施した。

他方、改善点としては、グループの進捗状況に差があり、テーマの選択方法には、途中で消化不良を起こさないように、慎重に行うことが問われた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017年11月14日(火)～2017年11月18日(土)

実施都市：バンコク（タイ）

実施場所：日本通運バンコク事務所

実施内容：アジアの物流事情の動向について～日本との比較において

成 果：全グループで、アジアの物流についてヒアリングを行い、海運・空運・陸運による物流事情を中心に、ヒアリング先の詳細な解説により、最新の動向を習得することができた。また、インフラ整備の観点のみならず、個別商品の流通事情等についての質問項目についても詳細な回答を頂いた。

F L P 演習 B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミ B は、ツーリズムビジネスの課題の1つである旅行者増加と新規ホテルの参入についての関係性につき、5 名がそれぞれパートを決めて、毎回研究の進捗状況を報告し、問題点を洗い出して、活発なディスカッションを行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017 年 11 月 29 日(水)～2017 年 12 月 1 日(金)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：H. I. S 台北

実施内容：台湾への旅行者増加と新規ホテル参入の相関性についてのヒアリング

成 果：現地の日本人スタッフ 3 名がヒアリングの対応にあたってくださり、事前に送付した質問票をもとに、詳細な回答を頂いた。

年度末成果報告会において、事前に分析を重ねていた点にヒアリング内容を加味して、満足のいく内容の報告資料を作成することができ、プレゼンも充実した内容であったと確信できた。

F L P 演習 C

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

平澤敦ゼミ C は、わが国のツーリズムビジネスの動向につき、個人研究を進めていった。前半は就職活動の影響もあって個別対応としたが、その後は3名でわが国のツーリズムが抱える課題を洗い出し、ディスカッションを行った。

(6) 新原 道信 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

惑星規模の問題解決とコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

<授業の概要>

“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、フィールドに出て行くための準備をします（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、栃木県日光市と新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワー

ク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整え、台湾調査を実行しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2017年8月29日(火)～2017年8月31日(木)

実施都市：栃木県日光市

実施場所：鬼怒川温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月2日(木)～2017年11月5日(日)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：台北市内・礁溪温泉

実施内容：事前調査に基づき、観光と開発、コロニアリズムの歴史などをテーマとして、国内調査との比較に基づき、台湾でのフィールドワークを実施しました。

成 果：台湾側の調査協力者との連携により、台北および宜蘭での総合的なフィールドワークを実施しました。その成果は、国際プログラムの報告会で報告し、後輩にむけての申し送り事項を整理しました。

FLP演習B

<テーマ>

惑星規模の問題解決とコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

<授業の概要>

“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、国際フィールドワークを計画・立案して実施していきます（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海

外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整え、台湾調査を実行しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月2日(木)～2017年11月5日(日)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：台北市内・礁溪温泉

実施内容：事前調査に基づき、観光と開発、コロニアリズムの歴史などをテーマとして、国内調査との比較に基づき、台湾でのフィールドワークを実施しました。

成 果：台湾側の調査協力者との連携により、台北および宜蘭での総合的なフィールドワークを実施しました。その成果は、国際プログラムの報告会で報告し、後輩にむけての申し送り事項を整理しました。

FLP演習C

<テーマ>

惑星規模の問題解決とコミュニティ形成のための国際フィールドワーク

<授業の概要>

“惑星社会のフィールドワーカー”として社会で活躍していく力を身につけるため、前期はグループワーク、夏休みに合宿、後期は論文執筆という一連の〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉のプロセスを体験します。まずは、実習科目の質的調査と国際フィールドワーク論を受講してもらい、“惑星社会のフィールドワーク”を行うために必要な、惑星社会論と“臨場・臨床の智”——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学びます。こうした「座学」に加えて、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」などで、立川や被災地、海外での活動に参加してもらい、国際フィールドワークを計画・立案して実施していきます（こうして先輩たちは、世界各地に巣立っています）。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、栃木県日光市と新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワー

ク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整え、台湾調査を実行しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2017年8月29日(火)～2017年8月31日(木)

実施都市：栃木県日光市

実施場所：鬼怒川温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめ、国際ゼミとしての知見については国際プログラムの報告会で報告しました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月2日(木)～2017年11月5日(日)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：台北市内・礁溪温泉

実施内容：事前調査に基づき、観光と開発、コロニアリズムの歴史などをテーマとして、国内調査との比較に基づき、台湾でのフィールドワークを実施しました。

成 果：台湾側の調査協力者との連携により、台北および宜蘭での総合的なフィールドワークを実施しました。その成果は、国際プログラムの報告会で報告し、後輩にむけての申し送り事項を整理しました。

(7) 野宮 大志郎 (文学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

世界に働きかける：グローバルな市民社会活動の創造

<授業の概要>

社会は、その中に住む個人を強制しある特定の方向に仕向ける力を持つ。戦争での兵隊志願者はその最たる現れであろう。しかし、個人はその「社会の力」にだまって従うばかりではない。自分の権利や考えに基づき、時には社会の力に抗しても行動する主体さらには社会変革を担うエージェンシーとなりうる。そうしたエージェンシーとしての個人が集まることで市民社会が成立する。

本演習では、社会の構造的力から観察を始め、その力に対抗するもの、変革をめざすものとしてのエージェンシーをまず理解する。次に、市民社会概念について理解し、かつ実際にそれがどの様に現れるかを学ぶ。最後に、市民社会の現代的現れであるグローバル市民社会についていくつかの事例を観察して学ぶ。

本演習の最終的な目標は、たとえ小さなことでも自ら社会に対して働きかけ、社会に資する行動や理解を創り出していく人を育てることである。

<活動内容>

今年度は、フィリピン社会の社会問題に焦点を当てて研究活動を行った。具体的には、ストリートチルドレン、シングルマザー、LGBTQ、マイノリティの教育である。

前期は、テーマごとに各班に別れ、日本で見られる問題の研究を行った。文献を読み、その後、問題の背景や解決策などを深く理解するために、社会奉仕活動に従事するNGOなどの市民団体への聞き取り調査に出かけた。

後期に入ってから、フィリピン社会が抱える問題を集中的に研究し、本格的な日本＝フィリピン比較調査が可能なレベルにまで研究を進めた。

その後、フィリピンに行き、現地調査に臨んだ。調査にて収集したデータは帰国後に整理し・解釈を行った。その解釈のもとに、上述の社会問題について日本＝フィリピンの比較を行った。比較研究の成果は、学年末論文とプレゼンテーションを通して発表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月15日(水)～2017年11月21日(火)

実施都市：ケソン・マニラ (フィリピン)

実施場所：フィリピン大学・市内各地のNGO事務所・調査対象者が居住・集合する地域 (インタビュー調査を実施)

実施内容：ケソン市到着後、調査テーマごとに4つの班に分かれて調査を行った。各班で調査対象が異なるため、フィリピン大学日本語学科の学生を雇用した。現地学生には、通訳と道案内を依頼し、同時に調査に際しての危険な場所や行為について

て、逐次アドバイスを受ける形にした。最後に、フィリピン大学日本語学科で、現地学生に対して、四つの班の研究成果をプレゼンした。

成 果：フィリピン社会が抱える問題は大きく、また多様である。今回、フィリピン訪問に先立ち、前期すべてと後期の一ヶ月を使ってフィリピン社会が抱える問題について自分たちで情報を集め、理解を進めた。現地調査は、大変充実したものだった。現地滞在は、実質的に5日間だったが、それまでの日本での学習にて獲得した知識をはるかに上回る知識と理解が獲得できた。今回の訪問学習・調査では、フィリピン社会が抱える問題のうち、幾つかについて学習し、調査し、理解を深めたに過ぎないが、それでも、訪問前に獲得した知識をはるかに上回る理解を得ることができた。

(8) 佐々木 弘世 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP演習A

<テーマ>

国際協力論入門

<授業の概要>

本演習では「開発」の基本的な概念及び開発途上国の抱える諸問題（貧困、教育、保健衛生、ガバナンス、環境、紛争等）に関し、講義や関連する様々な文献・レポートの輪読等を基にその基本的な事項についての理解を深めることを目標とする。更に第二次世界大戦終結後こうした開発途上国の開発に対し国連・国際金融機関及び先進諸国がどのような国際開発支援戦略を採用してきたのかについてその当時の国際関係（東西冷戦構造等）も十分に視野に入れながら分析し、そうした各戦略の有効性とその限界についても可能な限り取り上げその理解を深めるよう努力する。

<活動内容>

2017年度の本ゼミでは関連の文献講読や視聴覚教材を利用したグループ・ワーク、プレゼンテーションと全員参加によるディスカッションを中心に活動を行った。こうした活動により当ゼミの当初の目標である「開発とは何か?」、「開発途上国とはどのような国なのか?」、「国際協力は誰のために、何故行うのか?」といった問いかけに対しゼミ員各自が自らの考えを、自らの言葉で説明することが可能となるよう学習を深めることができた。更に、開発途上国の開発問題や国際協力の現状や課題を取り上げている主要な書籍を毎月課題図書として選定し、ゼミ員各自が読後の感想及びゼミ全体でその理解を深めるべき事項等を纏めた「課題図書レポート」を作成・提出し、同レポートによる全体討議を行った。

上記記載の活動に加え、(1)外部講師を招聘して最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用した課外学習実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年5月12日(金)

講演者：青柳 仁士氏（国際連合(UN)国連開発計画(UNDP)東京事務所副所長）

実施内容：2016年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」について国連諸機関及び世界銀行等の国際機関の中核として同目標を強力に推進している国連開発計画(UNDP)の基本方針と実施戦略、更にSDGs推進の一翼を担うことが期待されている市民社会・学生及び民間企業等の活動状況についての説明を受けた後、SDGsに関する自由討議を行った。

成果：SDGsに先立つ2001年から2015年までの期間、開発途上国での主に貧困問題の解消を目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の総括及び現在の

SDGs で掲げられている諸目標の設定経緯及びその背景について深く理解することができた。併せて SDGs 推進の主要なアクターである市民社会・学生及び民間セクターに対しどのような行動が期待されているかについて改めて考える貴重な機会となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年7月7日（金）

講演者：周藤 潤香 氏（中央大学総合政策学部卒業生・2014年度佐々木ゼミ修了生）

実施内容：本学及び本ゼミの卒業生である講師より卒業後進学した英国大学院（修士課程）での研究生生活及び現在勤務している外資系コンサルタントでの勤務内容について説明を受けた後自由討議を行った。

成果：FLP での学習がその後の英国での大学院生活及び現在の勤務にどの様に繋がっているのか、更に英語圏での大学院で学位を取るために求められる語学能力及び専門性について詳細な説明があり参加者全員が自らのキャリア形成を考える上で大変有益な場となった。

合同合宿

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月30日（土）～2017年10月1日（日）

実施都市：山梨県山中湖村

実施場所：清風荘山中湖

実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のゼミでの学習活動の進捗状況及び具体的な研究内容等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する質疑応答及び自由討議を行った。

成果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、参加者全員から様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表に向けより一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進する大変貴重な機会となった。

見学調査

対象演習：A

実施日：2017年10月16日（月）

実施都市：栃木県益子町

実施場所：益子町役場

実施内容：栃木県益子町は栃木県の南東部に位置し陶器の益子焼で全国に名前が知られる地方の小規模な町であり、現在の人口は約2万人となっているがここでも過疎化の波が急激に押し寄せており、町役場の関係者より同町で現在推進している

過疎化対策としての地域の活性化戦略について説明を受けた後、「地域おこし協力隊員」の活動現場の視察を行った。

成 果：東南アジア諸国でも近い将来経験する可能性が極めて高い地方部の過疎化及び少子高齢化社会の現実を理解することができた。また住民主体による地域おこしの具体的な進め方についても基本的な理解を得ることができ、開発途上国での同様な活動を考える上で極めて重要な参考となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実 施 日：2017 年 11 月 19 日（日）

講 演 者：三好 崇弘 氏（株式会社エム・エムサービス代表・横浜国立大学大学院講師）

演 題：国際協力の現場で考える効果的な開発支援とは？

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 地球ひろば セミナールーム

実施内容：国際協力現場での協力事業の成果を確実なものにするためには、住民の真のニーズの把握に基づく協力の実施が必要不可欠であるが、その前提となる住民参加による協力事業の計画策定の重要性について開発途上国での豊富な実例をもとに包括的な説明を受けた後、具体的な計画策定手法の一つである PCM（プロジェクトサイクルマネジメント）手法についてグループワークを実施した。

成 果：住民参加型計画手法（PCM 手法）の実際とその限界についてケース・スタディを基としたグループワークの実施により非常に良く理解することができた。PCM 手法は国際協力の現場のみならず我々の学習活動においても利用可能な汎用性の高い手法でありその基本的な理解を基に今後の応用が期待される。

F L P 演習 B

<テーマ>

国際協力論研究—海外実態調査による実証的研究—

<授業の概要>

これまで日本の ODA の協力が集中的に供与され、また過去に世界銀行による「東アジアの奇跡」レポート等によりその目覚ましい経済社会発展が大きく取り上げられた東南アジア地域での現地実態調査を実施する。現地調査においては現地の住民が直面していた、或いは直面している多くの開発課題についての構造やその複雑さを直接確認し、そうした開発課題の解消に向け先方政府や地域住民等と共に実施されてきた国際協力プロジェクトの支援現場や関連する支援機関(NGO 等)を訪問し国際協力により達成された具体的な成果とその限界等について分析し理解する。

<活動内容>

2017 年度の本ゼミでは、前期では夏季休暇期間に実施するミャンマー（ヤンゴン市及びネピドー市）での現地調査を効果・効率的に実施するために必要となる関連の先行研究及び調査研究レポートの精読を中心に各種の準備学習・作業を実施した。現地調査を実施した後の後期では、グループ毎に調査結果の取り纏めや必要に応じ参考文献の精読、国内での有識者に対するインタビュー調査等の追加調査を実施し最終報告書の取り纏めを行った。

上記の B ゼミ独自の活動に加え下記の様な、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する施設等の訪問や同施設を利用しての課外学習、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解の促進にも努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 5 月 12 日(金)

講演者：青柳 仁士 氏（国際連合(UN)国連開発計画(UNDP)東京事務所副所長）

実施内容：2016 年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」について国連諸機関及び世界銀行等の国際機関の中核として同目標を強力に推進している国連開発計画(UNDP)の基本方針と実施戦略、更に SDGs 推進の一翼を担うことが期待されている市民社会・学生及び民間企業等の活動状況についての説明を受けた後、SDGs に関する自由討議を行った。

成果：SDGs に先立つ 2001 年から 2015 年までの期間、開発途上国での主に貧困問題の解消を目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の総括及び現在の SDGs で掲げられている諸目標の設定経緯及びその背景について深く理解することができた。併せて SDGs 推進の主要なアクターである市民社会・学生及び民間セクターに対しどの様な行動が期待されているかについて改めて考える貴重な機会となった。

講演会

対象演習：B

実施日：2017年6月30日(金)

講演者：北澤 仁 氏（インターナショナル・リクルートメント・ジャパン代表取締役・中央大学法学部卒業生）

実施内容：本学の卒業生で現在ミャンマーを中心に現地の人材育成のためのコンサルティングサービスを展開している講師を招き、ミャンマーの現在の経済・社会状況の概要及びミャンマーにおける人材育成の現状について特に最近同国への進出が目覚ましい日系企業から見たその「強み」と「弱み」についての包括的な説明を受け、その後自由討議を行った。

成果：東南アジア諸国での業務経験が豊富で又ミャンマーの最新事情に非常に詳しい講師からの人材育成に関する説明は他国との比較を含め詳細かつ極めて示唆に富む内容であり、現地調査を効果的に進める上で大いに参考となった。また現地調査時に訪問すべき機関等に関する助言を受けることができたことも非常に有益であった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年7月7日(金)

講演者：周藤 潤香 氏（中央大学総合政策学部卒業生・2014年度佐々木ゼミ修了生）

実施内容：本学及び本ゼミの卒業生である講師より卒業後進学した英国大学院（修士課程）での研究生活及び現在勤務している外資系コンサルタントでの勤務内容について説明を受けた後自由討議を行った。

成果：FLPでの学習がその後の英国での大学院生活及び現在の勤務にどの様に繋がっているのか、更に英語圏での大学院で学位を取るために求められる語学能力及び専門性について詳細な説明があり参加者全員が自らのキャリア形成を考える上で大変有益な場となった。

現地実態調査

対象演習：B

実施日：2017年8月7日(月)～2017年8月12日(土)

実施都市：ヤンゴン市・ネピドー市（ミャンマー連邦共和国）

実施場所：ヤンゴン大学・JICA事務所・ミャンマー日本人材育成センター・電力省技術者訓練センター・UNHCR ミャンマー事務所・僧院学校・他

実施内容：アウン・サン・スー・チー女史主導による新たな国づくりが進み、国際社会が大きな関心を有しているミャンマーを訪問し同国の経済・社会開発の現状とその課題を理解するための現地調査を実施した。同国滞在中にはヤンゴン大学等で学ぶ現地大学生との交流や小学校等公的な教育機関へのアクセスを持たない貧困家庭の子供達への識字教育を行っている僧院学校を訪問し同国の人材育成

の根幹となる教育制度の現状と課題について調査を行った。また併せて地域格差是正のために JICA が ODA 事業として実施している地方貧困地域での無電化村への小規模電力供給プロジェクトの現場を視察しその効果等について対象住民へのインタビュー調査による確認作業を実施した。

成 果：上記の様な関連機関・関係者・プロジェクト現場の訪問及び面談を通じ現在国づくりが急ピッチで進むミャンマーでの経済・社会開発の現状やロヒンギャ問題等歴史的にも複雑な経緯を持つ同国の少数民族問題を含む今後早急に解決すべき課題とその様な課題解決に期待される国際協力の果たすべき役割について詳細に調査することができた。また、ヤンゴンでの現地大学生との交流を通じ先方の高い英語能力と国際関係に関する幅広い見識に触れ大いに触発された。

合同合宿

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月30日(土)～2017年10月1日(日)

実施都市：山梨県山中湖村

実施場所：清風荘山中湖

実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のゼミでの学習活動の進捗状況及び具体的な研究内容等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する質疑応答及び自由討議を行った。

成 果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、参加者全員から様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表に向けより一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進する大変貴重な機会となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月19日(日)

講演者：三好 崇弘 氏（株式会社エム・エムサービス代表・横浜国立大学大学院講師）

演 題：国際協力の現場で考える効果的な開発支援とは？

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 地球ひろば セミナールーム

実施内容：国際協力現場での協力事業の成果を確実なものにするためには、住民の真のニーズの把握に基づく協力の実施が必要不可欠であるが、その前提となる住民参加による協力事業の計画策定の重要性について開発途上国での豊富な実例をもとに包括的な説明を受けた後、具体的な計画策定手法の一つである PCM（プロジェクトサイクルマネジメント）手法についてグループワークを実施した。

成 果：住民参加型計画手法（PCM 手法）の実際とその限界についてケース・スタディを基としたグループワークの実施により非常に良く理解することができた。PCM

手法は国際協力の現場のみならず我々の学習活動においても利用可能な汎用性の高い手法でありその基本的な理解を基に今後の応用が期待される。

FLP演習C

<テーマ>

国際協力論（上級）

<授業の概要>

これまで履修してきた「演習 A」及び「演習 B」での学習を十分に踏まえながら、各人が開発途上国の開発問題や国際協力の在り方等に関する個別のテーマを設定し最終論文の形で取り纏めることを目指す。

<活動内容>

2017 年度のゼミでは、前期においては各ゼミ生が FLP でのこれまでの学習を通じて深めた国際協力における関心領域やそこでの問題意識を取り纏めた事項をゼミにおいて発表しつつ夫々の最終論文のテーマ設定の準備作業を行った。併せて国際協力の現状を取り上げた文献の輪読や国際開発支援に関する最新のテーマ等について自由討議を行った。後期では激動する国際情勢や新たな開発潮流等について取り纏められた論文及びレポートの輪読やゼミ生により各自の論文作成の進捗に応じた中間発表と全体討議を行いながら最終論文を完成させた。

上記の C ゼミ独自の学習に加え、(1)外部講師を招聘しての最新の国際協力の動向等に関する講話、(2)国際協力に関連する機関等の訪問や同施設を利用した課外学習、等を実施することにより国際協力に対する総合的・包括的な理解にも努めた。

<実態調査・見学調査・講演会>

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 5 月 12 日（金）

講演者：青柳 仁士 氏（国際連合(UN)国連開発計画(UNDP)東京事務所副所長）

実施内容：2016 年より国際社会全体でその取り組みが開始されている「持続可能な開発目標(SDGs)」について国連諸機関及び世界銀行等の国際機関の中核として同目標を強力に推進している国連開発計画(UNDP)の基本方針と実施戦略、更に SDGs 推進の一翼を担うことが期待されている市民社会・学生及び民間企業等の活動状況についての説明を受けた後、SDGs に関する自由討議を行った。

成果：SDGs に先立つ 2001 年から 2015 年までの期間、開発途上国での主に貧困問題の解消を目標として実施された「ミレニアム開発目標(MDGs)」の総括及び現在の SDGs で掲げられている諸目標の設定経緯及びその背景について深く理解することができた。併せて SDGs 推進の主要なアクターである市民社会・学生及び民間セクターに対しどのような行動が期待されているかについて改めて考える貴重な機会となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年7月7日(金)

講演者：周藤 潤香 氏（中央大学総合政策学部卒業生・2014年度佐々木ゼミ修了生）

実施内容：本学及び本ゼミの卒業生である講師より卒業後進学した英国大学院(修士課程)での研究生活及び現在勤務している外資系コンサルタントでの勤務内容について説明を受けた後自由討議を行った。

成果：FLPでの学習がその後の英国での大学院生活及び現在の勤務にどの様に繋がっているのか、更に英語圏での大学院で学位を取るために求められる語学能力及び専門性について詳細な説明があり参加者全員が自らのキャリア形成を考える上で大変有益な場となった。

合同合宿

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月30日(土)～2017年10月1日(日)

実施都市：山梨県山中湖村

実施場所：清風荘山中湖

実施内容：年末に予定されている FLP 成果報告会に向け、A・B・C の各ゼミ生が夫々のゼミでの学習活動の進捗状況及び具体的な研究内容等について各々プレゼンテーションを行い、参加者全体でその内容に関する質疑応答及び自由討議を行った。

成果：各ゼミでのグループワークの内容に関し、参加者全員から様々な観点からのコメント・意見が出され期末成果報告会での発表に向けより一層の質的向上を図る絶好の機会となった。また併せて A・B・C ゼミ生間の相互交流及び相互のネットワーク形成を促進する大変貴重な機会となった。

講演会（合同ゼミ）

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月19日(日)

講演者：三好 崇弘 氏（株式会社エム・エムサービス代表・横浜国立大学大学院講師）

演題：国際協力の現場で考える効果的な開発支援とは？

実施都市：東京都新宿区

実施場所：JICA 地球ひろば セミナールーム

実施内容：国際協力現場での協力事業の成果を確実なものにするためには、住民の真のニーズの把握に基づく協力の実施が必要不可欠であるが、その前提となる住民参加による協力事業の計画策定の重要性について開発途上国での豊富な実例をもとに包括的な説明を受けた後、具体的な計画策定手法の一つである PCM（プロジェクトサイクルマネジメント）手法についてグループワークを実施した。

成果：住民参加型計画手法（PCM 手法）の実際とその限界についてケース・スタディを基としたグループワークの実施により非常に良く理解することができた。PCM 手法は国際協力の現場のみならず我々の学習活動においても利用可能な汎用性の高い手法でありその基本的な理解を基に今後の応用が期待される。

(9) 稲葉 誠 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

開発途上国における農村社会の持続的開発

<授業の概要>

多くの開発途上国では農村部に多数の人口が分布し、経済の基幹である第一次産業を支えています。しかし農村部における人々の生活水準は一般的に低く、住民の生計の多くは農林水産業、すなわち森・水・土地といった自然環境に依存していると言っても過言ではありません。また、社会経済開発の二極化が進むなか、後発の途上国においては農村の貧困問題が、発展の進む新興国では都市と地方の地域間格差が拡大し、農村部の社会経済開発の在り方が大きな課題となっています。近年の経済のグローバル化は、市場を通じて途上国の第一次産業にも大きな影響を与え、同じく地球規模の気候変動は、自然環境に依存する生計に影響を及ぼしています。これは必ずしも途上国に限定されているわけではなく、日本を含む先進国においても同様に当てはまりますが、途上国においては不十分なセーフティーネットや社会インフラの整備の点から、影響がより深刻となっている状況です。本授業では、講師自身が現在実際に途上国諸国で行っている農業・農村開発、一村一品運動やフードバリューチェーン形成による産業振興など、様々な技術指導や調査等の内容・模様をリアルタイムにゼミ学生に紹介し、それらを教材として途上国における農業・農村開発、コミュニティ開発の要点と課題、特に社会経済開発事業の持続性に必要な要点等について議論・学習しました。具体的事例として今年度紹介した国/地域はインドネシア、ラオス、ベトナム、モザンビーク、コロンビア、ボリビア、ルワンダ、ガーナ、米国（ハワイ）などです。特に最近日本企業の進出が著しいインドネシア、ベトナム、ラオスなど ASEAN 諸国については、従来の ODA 事業に加え、その数倍規模の民間投資及び企業活動が行われている現況を紹介し、途上国の社会経済開発事業における民間企業の役割、期待等についても議論しました。更に経済発展と同時に深刻化している地域間格差、貧困増大、環境問題などの課題についても実際の事例を題材として議論・学習しました。また援助や公共事業など、ドナーや行政主導による社会経済開発事業の課題について議論し、持続的社会経済開発のための住民主導型事業、住民と行政が一体となった協働型開発事業について議論・学習しました。プロジェクトのテーマは本演習の内容に沿った形でゼミ生自身によって決定され、海外実態研修先は、現在に至るまで数多くの ODA/NGO プロジェクトが実施され、日本の民間企業進出の著しい反面地域格差も拡大しているインドネシアを選びました。

<活動内容>

稲葉ゼミでは、インドネシア国南東スラウェシ州ワカトビ県で実施されている JICA 草の根技術プロジェクト「地域に根差した環境保全型観光開発推進プロジェクト；(特活) 沖縄環境クラブ実施」とも連携し、住民主導型エコツーリズム振興事業による地域開発について学ぶと共に、現地エコツーリズム活動の更なる改善に資するため、ゼミ学生による日本の若者の視点からのエコツーリズムポイントの評価、現地住民の環境保全意識の評価、住民グルー

プが生産する土産物や同販売方法の評価などを実施し、環境保全活動とも調和する地域振興の在り方や住民の所得向上活動に対し、外部者としての視点から検討・議論し、同結論内容を同プロジェクトに報告しました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年9月10日(日)～2017年9月16日(土)

実施都市：南スラウェシ州マカッサル市・南東スラウェシ州ワカトビ県(インドネシア国)

実施場所：JICA 草の根技術協力プロジェクト・他

実施内容：海外現地実態調査は、近年経済成長が著しく数多くの日本企業が進出しているインドネシア国を選び、その中でも経済発展に伴い都市部と地方との地域格差が拡大している東部インドネシア地域を対象として取り上げました。同地域は1990年代後半からのアジア経済危機、スハルト体制崩壊後の社会経済混乱の中で、日本政府が世界銀行など他ドナー等と連携/協調して、民主化支援、地方分権化支援を積極的・継続的に実施している地域であり、インドネシア国内でも貧困率の高い地域での社会経済開発事業の在り方を調査・学習しました。マカッサル市では東部インドネシア地域開発アドバイザーとして活動中の JICA 専門家や在マカッサル日本領事事務所長らと面談し、東部インドネシア地域開発の課題や日本政府の貢献について学び、更に日本企業現地法人社長として活躍中の中央大学卒業生に日本企業の貢献について話を聞きました。ワカトビ県では持続的住民主導型開発の一つとして沖縄の NGO が実施しているエコツーリズム振興プロジェクトを訪問しました。同プロジェクト活動の視察と県開発責任者らとの討論と共に、現地住民グループが行っている様々なエコツーリズム振興活動を視察・意見交換し、日本の若者観光客としての視点から活動を観察・評価を行い、エコツーリズム振興のための各種提案を行いました。



(ワカトビ県開発企画局長及び NGO 関係者との議論)



(ワカトビ県カボタ島視察・住民との意見交換)

成果：JICA 専門家、外交官、中大卒業生らから、途上国での日本の貢献と課題についての具体的説明を聞き、今後の日本の貢献、特にゼミ学生自身の将来の国際貢献の可能性についてのイメージや理解を深めました。またワカトビ県行政関係者、沖縄 NGO や現地住民グループ等との討議により、住民と行政とが一体とな

って実施する地域開発、コミュニティベースドツーリズム振興について学ぶと共に、外国人、特に若者の視点からの魅力ある観光開発/地域振興に必要な活動、事項等について現地関係者らと議論し提案を行うことにより、開発途上国における地域開発、エコツーリズム振興、住民主導型開発等についての関心を高めました。帰国後は現地調査参加学生の報告を基として、エコツーリズム振興についてゼミ学生全員で議論し、同内容はプロジェクト及びワカトビ県に報告されました。

IV. スポーツ・健康科学プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

少子高齢化社会の到来のみならず、高度テクノロジー化と IT 化に伴い、心身の健康の維持増進がこれまで以上に重要になっています。そして、スポーツ・健康科学の発展と普及は、21 世紀の日本社会にとって不可欠なものとなっています。今日我が国の健康問題の多くは、運動不足や情報横溢と密接にかかわるライフスタイルの変化や生活文化に起因しています。そのような中で、特にスポーツや運動活動に求められる期待値は大きく、それらを取り入れた日常生活の質的向上の取り組みが随所で見られるようになっていきます。近年、地域コミュニティにおけるスポーツ基盤の整備や生涯スポーツの機会の提供が進んでいます。他方、地球規模でのスポーツの発展には、目を見張るものがあります。ボーダーレス化や商業化が急速に進み、レジャー・イベント・プロスポーツ・メディア等のスポーツ関連領域は巨大な市場を形成しています。このことは同時に、スポーツを媒介とした国際交流や国際貢献の可能性がさらに大きくなっていることを意味します。

このような状況を背景に、「スポーツ・健康科学プログラム」は学際的な性格を持つスポーツ科学と健康科学を基盤とし、スポーツや健康に纏わる問題を健康・医療・文化・ビジネス・サービス・行政等との関連の中で多面的かつ総合的に考察し、この分野に寄与できる人材の育成を目的としています。

本プログラムでは、従来の体育ないしはスポーツ講義・実技という枠組みではない多様なアプローチが可能になり、総合的かつ体系的な能力が養成されます。つまり、各学部におけるそれぞれの専門科目を履修しながら、当プログラムのスポーツ・健康科学の領域の中で各人が興味をもつ分野を深めていくことができます。そこでは、本プログラム独自に開講する演習科目を通じて専門的な研究を行います。

スポーツや健康に関わる社会的ニーズの増大と多様化によって、それに対応できる資質を備えた人材が今後さらに求められます。これまで学校教師の養成を主眼としてきたいわゆる教育・体育系学部とは異なり、本プログラムが社会の幅広い領域にマルチスペシャリストを送り出すことの意義は大きいのです。

2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
宮崎 伸一	法学部	－	－	2	単独（C）
村井 剛	法学部	11	12	5	単独（A） / 合併（B・C）
中谷 康司	経済学部	1	－	－	単独（A）
市場 俊之	商学部	－	5	2	合併（B・C）
小峯 力	理工学部	17	11	7	単独（A・B・C）
加納 樹里	文学部	9	8	4	単独（A） / 合併（B・C）
布目 靖則	文学部	1	－	2	単独（A・C）
森 正明	文学部	－	1	1	合併（B・C）
小林 勉	総合政策学部	6	5	4	単独（A・B・C）
合計		45	42	27	

3. プログラムスケジュール

4 月	履修ガイダンス 第一回部門授業担当者委員会
5 月	第二回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
6 月	2018 年度募集に伴う総合ガイダンス
7 月	第三回部門授業担当者委員会
8 月	第四回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
9 月	2018 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス
11 月	2018 年度募集に伴う選考試験 学内活動（オリエンテーション）
12 月	第五回部門授業担当者委員会 学内活動（期末成果報告会）
3 月	FLP 修了発表 FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①オリエンテーション

実施日： 2017年11月11日(土) 10:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス

実施内容： (1)スポーツレクリエーション
(2)卒業生とのパネルディスカッション

(1)スポーツレクリエーション

テーマ： 動くこと・動かすこと

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 第2体育館2階アリーナ

(2)卒業生とのパネルディスカッション

テーマ： 大学時代の学びと現在の仕事

登壇者： 池本 泰尚 氏 (2011年度卒業・株式会社日刊スポーツ新聞西日本)

菅沼 卓徒 氏 (2014年度卒業・ディスポートブルリーフ、まちスポ)

林 尚志 氏 (2008年度卒業・東京医科大学病院リハビリテーションセンター)

実施施設： 中央大学 多摩キャンパス 5306 教室

②期末成果報告会

実施日： 2017年12月16日(土) 13:00～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 6103 教室

実施内容： 各ゼミによる年度活動報告

5. 2017年度までのスポーツ・健康科学プログラム修了生の主な就職・進学先

電通、TBS テレビ、Jリーグフォト、日刊スポーツ新聞西日本、ゴールドウィン、ランナーズ、琉球スポーツキングダム、川崎フロンターレ、楽天野球団、山形新聞社、三菱東京 UFJ 銀行、みずほフィナンシャルグループ、三井住友銀行、静岡銀行、山梨中央銀行、足利銀行、川崎信用金庫、大和証券、住友生命、三井住友海上火災保険、損害保険ジャパン、丸紅、日立製作所、富士重工、小松製作所、神戸製鋼所、大林組、麒麟ビール、サッポロビール、ロッテ、富士通、富士ゼロックス、ヤマト運輸、佐川急便、日本通運、東日本旅客鉄道、近畿日本ツーリスト、JTB コーポレートセールス、星野リゾート、東京テアトル、KDDI、NTT コミュニケーションズ、リクルートコミュニケーションズ、コクヨ、テルモ、セブン・イレブン・ジャパン、日本公文教育研究会、休暇村協会、中央大学、警視庁、地方公務員（東京都庁など）、東京学芸大学大学院、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科、首都大学東京大学院人文科学研究科社会行動学専攻など

6. 演習教育活動

(1) 宮崎 伸一（法学部・教授）

FLP演習C

<テーマ>

障がい者と障がい者スポーツ

<授業の概要>

国内の障がい者、障がい者スポーツの実態を知る。

<活動内容>

本ゼミは、障がい者、特に知的障がい者に焦点を当て、彼らの日常活動や余暇活動、スポーツ活動に関する調査をおこなってきた。この過程で、沖縄県にある知的障がい児を対象とする特別支援学校から、時に障がい者として全国レベルのスポーツ技能を持つ選手が出現することや、障がい児・者を対象とする民間のスポーツクラブが存在することがわかり、沖縄県は知的障がい者スポーツに関して、独自の醸成土壌を持っていると思われた。そこで、本年度は、沖縄県にある知的障がい児・者のスポーツ活動の実態を調査するため、上記機関を訪問し、担当者にインタビューを行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年9月13日(水)～2017年9月15日(金)

実施都市：沖縄県浦添市

実施場所：一般社団法人琉球スポーツサポート・沖縄県立南風原高等支援学校

実施内容：担当者から活動の実態を聴取し、知的障がい者のスポーツ活動への影響を考察する。

成果：一般社団法人琉球スポーツサポートは、行政からの補助金に頼らず、恒久的な障がい者スポーツへの支援活動をすることを目指している。地元企業や有志からの寄付金と利用者の参加費が主な収入源となっている。学校や近所ではスポーツ活動をする機会のなかった障がい者が参加し、また、生涯スポーツとして健常の中高齢者も参加するようになった。また、有望な選手が全国大会や国際大会に参加する際には、沖縄県民の特性からか寄付金が集まることが多い。このように、琉球スポーツサポートは新しいスポーツクラブの形態として注目に値すると思われた。また、沖縄県立南風原高等支援学校は、一般校である沖縄県立南風原高校に併設され、一部の授業（体育、芸術、郷土芸能など）やすべてのクラブ活動を合同でおこなっている。このシステムにより、障がい児は自分の好むスポーツを一般高校生のレベルで行うことができる。また、一般高校生も障がい者との交流を通じて、早い時期から障がい者への理解が進むなどの相乗効果がみられる。新しい教育形態として興味深い。なお、成果の概要は2017年12月のFLP報告会にて発表した。

（２）村井 剛（法学部・准教授）

FLP演習A

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

<活動内容>

体育連盟サッカー部振興

1) 交流会

9 月にフットサルのミニゲームを通して、サッカー部員と一般学生の交流会を行った。普段関わりの少ないサッカー部員を身近に感じてもらうことを目的に、教授にご協力を頂き、体育の授業 2 コマを使って実施した。両授業合わせて参加人数は 49 人となり、高い満足度を得ることができた。

2) PR 動画作成

11 月 11 日の試合を PR するための約 30 秒の動画を作成した。サッカー部から写真や動画をもらい、サッカー部公式 Twitter と学内のヒルトップで動画を流すことでより多くの人に試合の告知をすることができた。

3) ビラ配り

FLP 村井ゼミオリジナルの試合告知のためのビラを作り、ゼミ生とサッカー部員協力してビラ配りを行った。計 3 日間、昼休みに行われ、約 600 枚のビラを配った。

4) サイン会

11 月 11 日の試合当日、J リーグ内定者によるサイン会を行った。試合開始前に J リーグ内定者 2 人に協力して頂き、企画を行うことができた。

その結果、目標としていた 11 月 11 日の試合では集客人数は普段約 200 人であるのが 353 人となり、増加した。

FLP演習B・C

<テーマ>

スポーツ心理（認知・行動）部分を知る

<授業の概要>

スポーツの技能と学習、心理的効果、心理的適応、動機づけ（モチベーション）、競技心理について、文献や実態を確認しながら理解を進めた。

【FLP 演習 B】

<活動内容>

中央大学ハンドボール部振興

【目的】

活動の目的としては、我々の一連の活動を通してハンドボール部の活躍を一般生に周知するとともに、集客を増やす事で選手のモチベーションアップを図ること、そしてモチベーションビデオを提供する事で、選手のパフォーマンスの向上を図る事の二つである。

【方法】

活動全体の流れ

4月…集客イベント（試合）の企画、提案

5月…集客用ビデオ作製のための取材、素材集め

6月…取材、素材集め、集客用ビデオ作製開始

7月…集客用ビデオ完成、放映開始

8月…集客用ビデオ放映

9月…集客試合（秋期リーグ最終節）本番、モチベーションビデオ作成依頼受理・作成開始

10月…モチベーションビデオ完成、提供

11月…ハンドボール部インカレ

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2018年2月26日(月)～2018年2月28日(水)

実施都市：長野県山ノ内町

実施場所：志賀高原横手山スキー場

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

【FLP 演習 C】

<活動内容>

・リーダーシップが集団凝集性に及ぼす影響

7月下旬から8月31日 質問紙調査

・モチベーションビデオ制作

5 月初旬	駅伝部へ企画の説明・挨拶
5 月 16 日	藤原監督よりヒアリング
6 月 18 日	全日本大学駅伝予選会撮影（@さいたま市駒場運動公園）
7 月下旬	練習風景撮影（@中大陸上競技場）
8 月 14. 15 日	夏合宿撮影（@山形県蔵王市）
9 月 12. 13 日	夏合宿撮影 2 回目（@山形県蔵王市）→合宿日程変更のため撮影中止
9 月 23. 24 日	日体大記録会撮影（@日体大健志台キャンパス）
9 月下旬	中大一般生からのメッセージ撮影
10 月上旬	4 年生のご両親へサプライズメッセージ依頼 4 年生から下級生へ向けてのメッセージ撮影
10 月 13 日	モチベーションビデオ上映会（@駅伝部東豊田寮）
10 月 14 日	第 94 回箱根駅伝予選会（@国営昭和記念公園）
10 月中旬	アンケート実施
10 月下旬	練習風景撮影
～12 月中旬	（@中大陸上競技場）
11 月 12 日	日体大記録会撮影（@日体大健志台キャンパス）
11 月 19 日	上尾シティハーフマラソン撮影（@埼玉県上尾市）
11 月 25 日	学連記録会撮影（@慶應義塾大学日吉キャンパス） 八王子ロングディスタンス記録会撮影（@法政大学多摩キャンパス）
12 月 3 日	日体大記録会撮影（@日体大健志台キャンパス）
12 月 17 日	国士舘大学長距離記録会撮影（@国士舘大学多摩キャンパス）
12 月 30 日	モチベーションビデオ上映会（@駅伝部東豊田寮）
1 月 2. 3 日	箱根駅伝本戦

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実 施 日：2018 年 2 月 26 日(月)～2018 年 2 月 28 日(水)

実施都市：長野県山ノ内町

実施場所：志賀高原横手山スキー場

実施内容：スノースポーツ活動時の唾液アミラーゼ活性に関する調査

(3) 中谷 康司 (経済学部・助教)

FLP 演習 A

<テーマ>

身体感 (観) と身体論

<授業の概要>

運動を成立させるためには、体を動かすための身体能力が重要です。しかし、一方で同じくらい外界や身体の状態を捉えるための感覚能力も重要になってきます。そのような身体感覚、身体感 (観) といったものは自分たちの受けた教育・社会の考え方に知らず知らずのうちに左右されており、その影響は軽視できません。本演習では、運動について感覚を重視した視点から検討していきます。実技を通して身体感覚を再検討するとともに、運動に必要なシステムについて医学的な知識を学び、また身体についての捉え方 (考え方) の基礎になっている思想的背景も検討していきます。担当教員の専門分野が東洋的な実技に立脚しているため、皆さんの地盤である東洋 (日本を含む) を中心に検討を進めますが、西洋と東洋との異同を探ることを通して、各自の身体感 (観) を浮き彫りにできると良いと思います。

<活動内容>

中谷ゼミでは、湯浅泰雄の著作『身体論 東洋的心身論と現代』(講談社学術文庫) をもとに、各テーマについて探索し、各回、プレゼンテーションを行うとともに討論を重ねてきた。まず、近代日本を代表する哲学者である和辻哲郎、西田幾多郎の身体観について、洋の東西における考え方の違いに注目しながら理解を進め、次に、修行と身体はどのような関係にあるのか、インド、中国、日本の主に仏教の修行観を追い、また芸道 (世阿弥など)、道元、空海の修行についての考え方を探ることで、修行・身体、そしてその先にある精神あるいはこころのありように対する影響について洞察した。さらに、現代の哲学的な心身論を理解するために、ベルグソン、メルロ＝ポンティを扱い、そこに見られる心身関係の妥当性について神経生理学的知見を踏まえながら検討した。これらの検討に先立ち、教員による神経生理学についての集中講義も実施された。学習成果によって得られた概念的理解は、図式化を試行し、スポーツ・健康科学プログラムの期末成果報告会において発表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習: A

実施日: 2017 年 10 月 21 日 (土)

実施都市: 東京都千代田区

実施場所: 上智大学 四谷キャンパス

実施内容: 人体科学会第 27 回大会に参加し、以下のプログラムを聴講した。

●基調講演

演 題: 武術の心身論: 伝書の記述を手がかりに

講演者: 寒川 恒夫 氏 (早稲田大学教授)

●シンポジウム

テーマ：身体と教育—大学教育における“身体性”を問う—

司会：鈴木 守 氏（上智大学教授・スポーツ社会学）

パネリスト：大橋 容一郎 氏（上智大学教授・近世現代哲学）

佐々木 究 氏（山形大学・体育思想史）

村川 治彦 氏（関西大学教授・身体教育学、応用健康科学）

山本 敦久 氏（成城大学准教授・スポーツ社会学、カルチュラル・スタディーズ）

成果：文献を通して学んできた内容を、第一線で活躍する研究者から最近の研究の潮流も踏まえながら生の声で聞くことによって、検討対象に対する理解を深めるのみならず、今後の探究活動に向けて大きな刺激となった。

(4) 市場 俊之 (商学部・教授)

FLP 演習 B・C

<テーマ>

- ①ドイツ体操祭と日本のスポーツ ②スポーツ運動の機能

<授業の概要>

①160 年以上継続している「ドイツ体操祭」の実態調査に備えて、これまでの歴史を予習する。ドイツでの実態調査とそのまとめをする。

②「人間と運動」、「スポーツ運動の成り立ち」などを分担調査し、その内容を報告・討議する。(※テーマは変更されることがある。)

上記①②と並行し、それぞれの個別テーマを調査する。

<活動内容>

市場ゼミは、特に前期は①を行った。ドイツ・ベルリンでの海外実態調査の準備・実施・まとめに充てた。後期は②に関連して、ゼミ学生の個別テーマ例：日本人と外国人の差異、サッカーにおけるスポーツビジネスなどをまとめた。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017 年 6 月 2 日(金)～2017 年 6 月 11 日(日)

実施都市：ベルリン (ドイツ)

実施場所：体操祭会場・TiB・連邦トレーニングセンター

実施内容：1860 年に始まり 2017 年 43 回目のドイツ体操祭を実態調査した。1 週間に渡る日程の中から、シニアの試合を中心に見学した。また、1848 年創設の TiB (Turngemeinde in Berlin 1848) やベルリン郊外の Kienbaum にある連邦トレーニングセンターを訪問した。さらに、1936 年ベルリンオリンピック大会の選手村跡も見ることができた。

成果：上記の見学訪問活動を通じ、かつまた事前準備で得た知見と相まって、200 年以上続く地域密着型スポーツクラブの幅広さかつ奥深さを肌で感じる事ができた。

対象演習：B・C

実施日：2017 年 9 月 20 日(水)

実施都市：東京都北区

実施場所：国立スポーツ科学センター

実施内容：国立スポーツ科学センターの見学

成果：ドイツ・ベルリンにおいて管見した連邦トレーニングセンターと日本国立の研究センターを比較できた。「トレーニング」センターと「研究」センターの違い

はあれど、「国を挙げてスポーツに力を入れる」ことのメリット（競技力向上）とデメリット（政治・経済とスポーツの密着）を認識できた。



2017年6月：Turngemeinde in Berlin 1848にて



2017年9月：JISSにて（市場担当のベーシック演習（商学部）ゼミ学生と共に）

(5) 小峯 力 (理工学部・教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」（通称：めでプロ）に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生（AED 含む）講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近な人を救い守る（守れる）意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝えた。また、対象者に対してアンケート調査を行い、実践を通して意識がどのように変化したのか検討した。回答をまとめた結果、講習に参加した者のほとんどが、救急蘇生に関して自信がついたと回答しており、実践を通じて、自他の生命、身近な人を救い守る意識を深めることができたと考えられる。

スポーツ振興に於いては、昨年度設立・展開した「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を深めるため、日本フィットネス産業協会事務局長の松村剛氏を招き、「若者のスポーツ離れについて」講義していただいた。講義でのディスカッションも踏まえ、大学生を含めた若者にとってスポーツは身近なものであり、ウェルネスの向上につながることを示す必要があると感じ、実験をすることとした。実験は理工学部の学生と連携し、大学サッカーの試合観戦時における生理的指標（唾液アミラーゼ活性度、心拍数）、心理的指標（二次元気分尺度）を計測し、評価した。分析の結果、唾液アミラーゼに大きな変化は見られなかったが、試合の展開と相まって後半に心拍数が有意に上昇していた。心理指標である二次元気分尺度は、下位因子である活性度と覚醒度が有意に上昇していた。したがって、スポーツ観戦により、興奮して活発かつイキイキとした状態になっており、ウェルネスの向上に寄与していることが明らかとなった。

さらに、担当教授が議長を務める「東京オリンピック・パラリンピックメディカルサポートボランティアコンソーシアム」のキックオフミーティングを 2018 年 2 月 17 日（土）に開催した。ミーティングにより、小峯ゼミを中心とした学生部会を設立し、コンソーシアムの運営に積極的に関わっていく運びとなった。来年度は、これまで以上に東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）を普及・啓発していく所存にある。

F L P 演習 B

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」（通称：めでプロ）に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生（AED 含む）講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近な人を救い守る（守れる）意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝えた。また、対象者に対してアンケート調査を行い、実践を通して意識がどのように変化したのか検討した。回答をまとめた結果、講習に参加した者のほとんどが、救急蘇生に関して自信がついたと回答しており、実践を通じて、自他の生命、身近な人を救い守る意識を深めることができたと考えられる。

スポーツ振興に於いては、昨年度設立・展開した「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を深めるため、日本フィットネス産業協会事務局長の松村剛氏を招き、「若者のスポーツ離れについて」講義していただいた。講義でのディスカッションも踏まえ、大学生を含めた若者にとってスポーツは身近なものであり、ウェルネスの向上につながることを示す必要があると感じ、実験をすることとした。実験は理工学部の学生と連携し、大学サッカーの試合観戦時における生理的指標（唾液アミラーゼ活性度、心拍数）、心理的指標（二次元気分尺度）を計測し、評価した。分析の結果、唾液アミラーゼに大きな変化は見られなかったが、試合の展開と相まって後半に心拍数が有意に上昇していた。心理指標である二次元気分尺度は、下位因子である活性度と覚醒度が有意に上昇していた。したがって、スポーツ観戦により、興奮して活発かつイキイキとした状態になっており、ウェルネスの向上に寄与していることが明らかとなった。

さらに、担当教授が議長を務める「東京オリンピック・パラリンピックメディカルサポートボランティアコンソーシアム」のキックオフミーティングを 2018 年 2 月 17 日（土）に開催した。ミーティングにより、小峯ゼミを中心とした学生部会を設立し、コンソーシアムの運営に積極的に関わっていく運びとなった。来年度は、これまで以上に東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）を普及・啓発していく所存にある。

F L P 演習 C

<テーマ>

- 1) 大学スポーツ振興 (Sport for All)
- 2) スポーツと生命教育 (Lifesaving)

<授業の概要>

東京オリンピック・パラリンピックに向け、大学スポーツ振興（戦略）について、その可能性を学際的に希究し、発表していく。

また、救急救命の視点から傷害や事故を分析し、その救急対応と危機管理の在り方を検討し、スポーツに於ける安全（リスクマネジメント）を研究する。

<活動内容>

小峯ゼミは、ヒューマン・ウェルネスを骨子とした実践を展開した。例えば「めでるくんプロジェクト」（通称：めでプロ）に於いては、小中学生とその保護者を対象とした救急蘇生（AED 含む）講習会を実施した。その実践を通じて自他の生命を意識し、身近な人を救い守る（守れる）意識を深め、しかしその技術を活かすことがない予防の観点こそ重要であることを伝えた。また、対象者に対してアンケート調査を行い、実践を通して意識がどのように変化したのか検討した。回答をまとめた結果、講習に参加した者のほとんどが、救急蘇生に関して自信がついたと回答しており、実践を通じて、自他の生命、身近な人を救い守る意識を深めることができたと考えられる。

スポーツ振興に於いては、昨年度設立・展開した「中央大学体育連盟部会・集中応援プログラム (Chuo Sports Club Support Program ; CSCS プログラム)」及び「Chuo Sports Fun Club (CSF)」を深めるため、日本フィットネス産業協会事務局長の松村剛氏を招き、「若者のスポーツ離れについて」講義していただいた。講義でのディスカッションも踏まえ、大学生を含めた若者にとってスポーツは身近なものであり、ウェルネスの向上につながることを示す必要があると感じ、実験をすることとした。実験は理工学部の学生と連携し、大学サッカーの試合観戦時における生理的指標（唾液アミラーゼ活性度、心拍数）、心理的指標（二次元気分尺度）を計測し、評価した。分析の結果、唾液アミラーゼに大きな変化は見られなかったが、試合の展開と相まって後半に心拍数が有意に上昇していた。心理指標である二次元気分尺度は、下位因子である活性度と覚醒度が有意に上昇していた。したがって、スポーツ観戦により、興奮して活発かつイキイキとした状態になっており、ウェルネスの向上に寄与していることが明らかとなった。

さらに、担当教授が議長を務める「東京オリンピック・パラリンピックメディカルサポートボランティアコンソーシアム」のキックオフミーティングを 2018 年 2 月 17 日（土）に開催した。ミーティングにより、小峯ゼミを中心とした学生部会を設立し、コンソーシアムの運営に積極的に関わっていく運びとなった。来年度は、これまで以上に東京オリンピック・パラリンピックの準備を通じて、救急救命（生命尊厳）を普及・啓発していく所存にある。

(6) 加納 樹里 (文学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

運動生理の基本を理解し、健康・スポーツ関連情報のリテラシーを身につける

<授業の概要>

教室授業は、履修を必須としている文学部半期講義科目「運動の生理と医科学」の進行状況にもあわせて、適切な課題（文献）を教員が示して、履修生が内容をまとめ、発表・討論を行う形で展開した。後期からは、数回 B/C ゼミと合流し、C 生の期末交流会発表準備作業を確認したり、協力したりした。

<活動内容>

本年度は、以下参考書を中心に、教室での授業を実施した（内容の詳細は、ゼミ論集を参照）。

- ・ 「スポーツ・健康医科学」放送大学大学院教材 河合祥雄他著
- ・ 「これからの健康とスポーツの科学」 安部孝他著 講談社

なお、平行して、文学部前期開設科目でゼミ生の履修を原則「必須」としている「トレーニングの科学」の授業進行にあわせて、身体と運動に関する基礎的な運動生理の内容の補充学習も行った。

下記の補助費を受けた実態調査の他にも、ゼミ生数名が主体的に学外で取り組んだ活動もあった（多摩市クリスマス・チャリティーイベントのボランティアなど）。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年7月25日(火)～2017年7月27日(木)

実施都市：東京都江東区

実施場所：東京ビッグサイト（第26回ヘルス&フィットネスジャパン）

実施内容：健康、スポーツ産業に関わる業界各社の合同見本市を見学、調査した（学生は各々の授業の都合で参加できる日時で小グループ毎に参加した）。

成果：最新の機器に実際に触れてみたり、業者からの説明を聞くことができた。また、並行して開催されていた各種のレクチャーにも随意参加して、情報収集に努めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年8月28日(月)～2017年8月30日(水)

実施都市：長野県小谷村

実施内容：夏合宿をA・B・Cゼミ合同で実施した。梅池高原での散策やシャワークライミング等、アウトドア・スポーツを実体験し、夜間及び午前中は大学で不足した

ゼミの個別発表を補完的に実施した。また、初日の夜間には、地域振興に取り組む現地オーナーから、特別講義（下記に記載）を受講した。

成 果：ゼミ生間の交流を深め、地域振興やアウトドアスポーツについての学生の体験知を高めることができた。さらに、学内ゼミではなかなか時間が取れない問題について、じっくりと全員で話し合い、発言する機会を多く確保できた。

講 演 者：水谷 雅三 氏

演 題：若者の自然体験の重要性・スポーツ事業での地域活性化

実 施 日：2017 年 8 月 28 日(月)

実施場所：ロッジしろがね



写真：「クリスマス・チャリティーイベント；サッカー教室 2017 in 多摩市」

F L P 演習 B・C

<テーマ>

スポーツ・コンディショニングについて学習し、実践（実測）する

<授業の概要>

各自のテーマについて文献を検索し、抄読、発表の形式で教室授業を実施した。

下記の実態調査を行った他、C 生は後期、学生部主催のイベントに協力した。

他、ゼミ生数名が個別に学外で取り組んだ活動もあり、最終学年時にゼミ論としてまとめることを課題とした。

<活動内容>

本年度 C 生 4 名の最終発表課題は以下の通りであった（ゼミ論集参照）。

「試合前のウエイト・コントロール」

「ストレッチ講座報告と効果検証」

「ウェアラブルデバイス」

「フルマラソンを走る（実践報告調査）」

また、一部ゼミ生が以下の企画に参加、協力した。

・実施日：2017 年 7 月 8 日（土）

東京 2020 組織委員会主催「学生が考えるアスリート飯（めし）」への参加

・実施日：2017 年 11 月 9 日（木）

学生部主催「学生の、学生による、学生のためのストレッチ」学生講師協力

・実施日：2017 年 12 月 23 日（土）

「クリスマス・チャリティーイベント；サッカー教室 2017 in 多摩市

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 7 月 25 日（火）～2017 年 7 月 27 日（木）

実施都市：東京都江東区

実施場所：東京ビッグサイト（第 26 回ヘルス&フィットネスジャパン）

実施内容：健康、スポーツ産業に関わる業界各社の合同見本市を見学、調査した（学生は各々の授業の都合で参加できる日時で小グループ毎に参加した）。

成 果：最新の機器に実際に触れてみたり、業者からの説明を聞くことができた。また、並行して開催されていた各種のレクチャーにも随意参加して、情報収集に努めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 8 月 28 日（月）～2017 年 8 月 30 日（水）

実施都市：長野県小谷村

実施内容：夏合宿をA・B・Cゼミ合同で実施した。梅池高原での散策やシャワークライミング等、アウトドア・スポーツを実体験し、夜間及び午前中は大学で不足したゼミの個別発表を補完的に実施した。また、初日の夜間には、地域振興に取り組む現地オーナーから、特別講義（下記に記載）を受講した。

成 果：ゼミ生間の交流を深め、地域振興やアウトドアスポーツについての学生の体験知を高めることができた。さらに、学内ゼミではなかなか時間が取れない問題について、じっくりと全員で話し合い、発言する機会を多く確保できた。

講 演 者：水谷 雅三 氏

演 題：若者の自然体験の重要性・スポーツ事業での地域活性化

実 施 日：2017年8月28日(月)

実施場所：ロッジしろがね



写真：小谷村ゼミ合宿「シャワークライミング」

(7) 布目 靖則 (文学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。関連領域の資格取得に挑戦する。

<授業の概要>

自然レクリエーションの中から「登山（無雪期）」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、内外の動向等について学習する。また、野外における活動主体の立場から環境問題に関する理解も深める。

<活動内容>

- ・基本3装備（登山靴、雨具、リュックサック）
- ・地図の読み方
- ・コンパスの使用方法
- ・PLP法
- ・野外活動の判例
- ・事故の法的責任
- ・ロープワーク
- ・脱水量とカロリー消費量の計算方法
- ・ガス・コンロの使用方法
- ・野外調理での注意点
- ・ツェルトの使用方法
- ・山の気象
- ・危険な動植物
- ・野外教育の定義
- ・安全教材「スキー場安全マニュアル」
- ・日本スキー教程安全編の講読
- ・期末成果報告会にむけて
- ・スポーツ関連の講演会に参加

F L P 演習 C

<テーマ>

野外教育および自然体験学習の理論と実践について学習する。また、野外活動の安全管理、野外活動を通じた安全教育の可能性について探る。ゼミ論文の完成、関連領域の資格を取得する。

<授業の概要>

自然レクリエーションの中から「登山」や「スキー」を取り上げ、その運動特性や心理的効果、プログラム展開の手法、安全管理、内外の動向等について学習する。また、冒険教育の理念や実践についても学習する。

<活動内容>

ゼミ最終年度にあたり、その総まとめとして、ゼミ論文を完成させた。

＝研究課題＝

- ・ 高尾山登山者の環境配慮意識と環境配慮行動の特徴に関する研究
- ・ 大学生におけるスノースポーツのイメージとその選択

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年12月6日(水)～2017年12月9日(土)

実施都市：北海道留寿都村

実施場所：ルスツリゾートスキー場

実施内容：ルスツリゾートスキー場において、「スノースポーツ安全基準」がどのようにして利用者に周知されているか、スキー場管理者から聞き取りを行う。また、スキーの安全教育が、実際の講習場面においてどうのようになされているか視察する。

成 果：自然レクリエーション(野外活動)に必要な安全管理のあり方について、実際にスキー場を訪問し、調査や見分を行うことによって、授業テーマについてより深く理解することができた。

(8) 森 正明 (文学部・教授)

FLP演習B・C

<テーマ>

大学スポーツ、中大スポーツ振興

<授業の概要>

大学運動部やスポーツ同好会の組織、大学スポーツのマネジメント（競技力向上や地域スポーツクラブ育成のための事例-早稲田方式、立命館方式、関大方式等）、大学スポーツ応援文化の醸成とクラブ文化の醸成など。

<活動内容>

森ゼミでは、大学スポーツ（特に中大スポーツ振興）の実践につながる取り組みをメインにしたゼミ活動を実施。

前期は、継続テーマ「モノレール・クラシコ」中大野球部と明星大学野球部の試合実現と集客（選手、コーチ以外の関係者を含む約 50 名）。

後期は、文学部授業「現代社会とスポーツ」時に、上記テーマのプレゼンと講演会等（下記）を行い、期末交流会で報告した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017 年 12 月 4 日（月）

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 3206 教室

実施内容：日本版 NCAA 創設に向けた学生（NPO ユニサカ）メンバーによる、日本の大学スポーツの現状と今後について。

成 果：同世代学生によるプレゼンと受講学生を 4 グループに分けてワークショップ形態で意見交換ができたので、多様な意見を聞き、考えるという振り返りの成果につながった。

(9) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミは「スポーツによる地域活性化」の可能性について研究を行っているゼミである。A生の活動は大きく分けて2つあり、1つ目が、B生が主となり企画・運営をした、Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトである「福+ (ふくたす) プロジェクト」のサポート。2つ目が長野県須坂市で行われたサマースクールへの参加である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017年9月2日(土)～2017年9月5日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市八橋運動公園陸上競技場

実施内容：9月3日にあきぎんスタジアムで行われたブラウブリッツ秋田のホームゲームの会場設営を行い、さらに、スタジアムの周辺施設でゼミ生が企画した各種スポーツイベントを実施した。

成果：ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトも4年目となり、多くの人に活動を認知していただけるようになった。プロジェクトの参加者数もこの3年間で3.2倍に増加している。

対象演習：A・B

実施日：2017年10月13日(金)

講演者：今村 貴幸氏 (常葉大学)

演題：POMS(気分プロフィール調査)の統計処理について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11560 教室

実施内容：プロジェクト当日に実施した POMS 調査の統計方法に関して、統計ソフトを用いた処理方法をご教授いただいた。

成 果：POMS 調査を始めとした研究を進めていく際に大変重要となる統計処理方法をご教授いただき、学生自らが統計処理を行えるようになった。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミは、「スポーツによる地域活性化」をテーマとし、秋田県秋田市をホームタウンとする J3 リーグ「ブラウブリッツ秋田」との共同プロジェクトを実施しています。今年で4年目となるプロジェクトは「福+（ふくたす）プロジェクト」と題し実施致しました。本プロジェクトは「普段はあまりスポーツに馴染みのない高齢者」を対象に様々なスポーツイベントを企画、運営することにより、健康な身体を作っていただくと共に、新たな人との繋がりを構築していただくことを目的としています。また、今年度は「POMS（気分プロフィール調査）」と呼ばれる心理テストを用いて「みるスポーツ」の効果についての研究を行い、近年注目されている「高齢者フレイル」への対策モデルの検討を行いました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017年5月5日(金)

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学）

演 題：高齢者における寿命延伸方法について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11560 教室

実施内容：近年注目を集める「高齢者フレイル」とはどのようなものか、医学博士である今村貴幸氏をお呼びし、学生に向けて講演会を実施していただいた。

成 果：「高齢者フレイル」に関する知識を深めると共に、現在多くの高齢者が抱える健康問題に関する知識を得ることができた。また、今年度のプロジェクト実施に際し、貴重な意見を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2017年6月30日(金)

講演者：外山 新平 氏（株式会社ブラウブリッツ秋田）

演 題：プロジェクト実施に際して指導と展望

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11220 教室

実施内容：今年で4年目を迎えるブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトに向け、ブラウブリッツ秋田常務外山新平氏をお呼びし、プロジェクトの目的や展望を共有すると共に、実施に向けた具体的な取り組みや内容等をご指導いただいた。

成 果：プロジェクト実施に向けた意思決定及び目標の共有を行うと共に、プロジェクト実施への留意点や具体的な実施内容に関して議論を行い、内容を深めることが可能となった。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 7 月 1 日(土)

実施都市：東京都北区

実施場所：味の素フィールド西が丘

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「サポーター体験」の協力団体である「BLUE+AKITA (ブルータスアキタ)」のコールリーダーへのご挨拶と共に、今年度のプロジェクト協力の承諾を得るため、直接お会いしプロジェクト内容に関してお話させていただいた。

成 果：今年度のプロジェクトにて実施された「サポーター体験」への協力の承諾を得ることができた。また、学生と協力団体とのネットワークを構築することができた。

対象演習：B・C

実 施 日：2017 年 7 月 10 日(月)～2017 年 7 月 12 日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田県スポーツ科学センター

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「いきいき体操教室」の協力者である秋田県スポーツ科学センター職員の方へのご挨拶及びプロジェクト実施における協力依頼を行った。

成 果：学生自ら現地に足を運び、直接ご挨拶をすることにより、協力者とのネットワークを構築することが可能となった。また、今年度のプロジェクト実施に関し、ご協力の承諾を得ることができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 7 月 11 日(火)～2017 年 7 月 13 日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：太平山リゾート公園 グラウンドゴルフ場

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「グラウンドゴルフ大会」の協力者である秋田市グラウンドゴルフ協会会長へのご挨拶及びプロジェクト実施における協力依頼を行った。

成 果：今年度のプロジェクトへの協力の承諾を得ると共に、今プロジェクトの目的と展望を先方に伝えることができた。また、直接ご挨拶させていただくことにより、ネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 7 月 25 日(火)～2017 年 7 月 27 日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：太平山リゾート公園

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「グラウンドゴルフ大会」の実施に向け、学生自らがグラウンドゴルフへの知識を得るため、秋田県で実施されるグラウンドゴルフ大会へ足を運び、大会の見学をさせていただいた。

成 果：グラウンドゴルフの実施方法や大会運営に関する知識を得ると共に、現地での広報活動を行うことができた。また、大会参加者との交流を行うことができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 8 月 2 日(水)～2017 年 8 月 5 日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：今年度のプロジェクト実施に向け、ブラウブリッツ秋田の社員の方へのご挨拶を行うと共に、プロジェクトの実施内容や目的、展望等を共有した。また、プロジェクトにご協力いただく中央大学 OB の方々へご挨拶にお伺いした。

成 果：ブラウブリッツ秋田の社員の方とプロジェクト実施内容を共有することができた。また、ご協力いただく中央大学 OB の方へご挨拶を行うと共に、今年度の実施内容に関してお話させていただき、協力の承諾を得ることができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 8 月 8 日(火)～2017 年 8 月 11 日(金)

実施都市：秋田県潟上市

実施場所：天王多目的健康広場

実施内容：秋田県大仙市と潟上市で行われるグラウンドゴルフ大会に足を運び、今年度のプロジェクトの広報活動を行った。また、プロジェクトにご協力いただく関係者の方へご挨拶にお伺いすると共に、実施内容に関してお話させていただいた。

成 果：プロジェクト参加者を得ることができたと共に、プロジェクトにご協力いただく関係者の方にご協力の承認を得ることができた。また、様々な場所で広報活動を行うことができた。

対象演習：B

実施日：2017年8月15日(火)～2017年8月17日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「グラウンドゴルフ大会」や「ふらっと講演会」の広報活動を行うと共に、秋田県内のメディアへご挨拶にお伺いし、テレビや新聞、広報誌等の記載に関して打ち合わせを行った。

成果：広報活動の実施により、プロジェクトへの参加者を増やすことができた。また、秋田県内のメディアへの出演やプロジェクト紹介を行うことができた。

対象演習：B

実施日：2017年8月19日(土)～2017年8月24日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市中心市民サービスセンター

実施内容：今年度のプロジェクトの一環である「ふらっと講演会」を県内のサービスセンター3箇所にて実施した。講演会は現地の高齢者や中央大学の学生を対象とし、「高齢者フレイル」の危険性や対策、「みるスポーツ」の効果等を医学博士の先生にお話していただいた。

成果：現地の高齢者の方々に「高齢者フレイル」を知っていただくと共に、その対策やご自身の「健康」について改めて考えていただくきっかけとなったのではないかと。また、学生自身も研究内容に関して知識を深めることができた。

対象演習：B

実施日：2017年8月23日(水)～2017年8月25日(金)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「いきいき体操教室」の協力者である株式会社 e-MOTION's の代表取締役である渡部真吉氏とプロジェクトの最終打ち合わせを行った。

成果：「転倒に負けない身体作り」というテーマの共有や、当日の実施におけるタイムテーブルや内容に関するお話をさせていただいた。この打ち合わせにより、当日のスムーズな運営が行えるようになった。

対象演習：B

実施日：2017年8月26日(土)～2017年9月5日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：9月3日のブラウブリッツ秋田ホームゲームにて行われる「福+（ふくたす）プロジェクト」実施に向け、最終準備と事前打ち合わせ等を行った。また、プロジェクト参加者を集う広報活動も実施した。

成 果：今年で4年目となるブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトを無事に実施することができた。学内のみでは経験することのできない「現場」での雰囲気や立ち居振る舞いを実践的に学ぶことができ、学生個人が成長することができた。

対象演習：B

実 施 日：2017年9月3日(日)

講 演 者：渡部 真吉 氏（株式会社 e-MOTION's）

演 題：フレイル対策用の体操

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：スポーツ科学センター

実施内容：フレイル対策へ向けた簡単な体操や転倒に負けない身体作りに向けた筋力トレーニング等をご教授いただいた。

成 果：フレイルに関しての知識を深めると共に、高齢者における筋力の重要性というものを実践的に学ぶことができた。

対象演習：B

実 施 日：2017年9月3日(日)

講 演 者：今村 貴幸 氏（常葉大学）

演 題：POMS 調査のやり方～体操を用いて～

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：スポーツ科学センター

実施内容：今回のプロジェクトの主軸ともなる「POMS（気分プロフィール調査）」という心理調査の実施に向け、実施方法等をご指導いただいた。

成 果：実際に POMS 調査を行う際の注意点や実施方法に関するお話をお伺いすると共に、実際に実施する際の留意点等をご教授いただくことができ、実際に実施することができた。

対象演習：A・B

実 施 日：2017年10月13日(金)

講 演 者：今村 貴幸 氏（常葉大学）

演 題：POMS(気分プロフィール調査)の統計処理について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11560 教室

実施内容：「福+（ふくたす）プロジェクト」の当日に実施した POMS 調査の統計方法に関して処理方法をご教授いただいた。

成 果：今後分析、研究する際に大変重要となる統計処理についてご教授いただき、学生自ら統計処理が行えるようになった。

対象演習：B

実施日：2017年10月20日(金)～2017年10月24日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：プロジェクト当日のみならず、「試合内容によって心理的効果が異なるのではないか」という仮説のもと、継続的に調査を実施するため、ホームゲームに足を運び POMS 調査を実施した。

成果：プロジェクトの際と比較調査が行えるよう、一定数のサンプルを採集することができた。また、試合内容に関しても異なる結果を得ることができ、分析・研究に役立つ結果を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2017年11月17日(金)～2017年11月20日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：「試合内容によって心理的効果が異なるのではないか」という仮説のもと、継続的に調査・研究を行うため、ホームゲームに足を運び POMS 調査を実施した。

成果：様々な内容の試合にて調査を行うことにより、より信憑性のある研究を行うことが可能となった。結果のみならず、試合内容によっても異なる結果が得ることができた。

FLP 演習 C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

今年度、小林ゼミ FLP 演習 C では、協働で活動を行っている地域・公共マネジメントプログラムの学生とともに以下の 2 つの活動を行った。

1. 「ブラウブリッツ秋田福+プロジェクト」での事業推進・研究のサポート

本ゼミの演習 B の学生が取り組んだ、「ブラウブリッツ福+プロジェクト」において、プロジェクト推進及び、研究のサポートを行った。前年の 2016 年に取り組んだ同プロジェクトでの活動経験を活かし、本年度プロジェクトの事業・調査研究としての前進に寄与した。

2. 「長野県須坂市における地域活性化へのスポーツ・健康イベントの活用可能性」の検討と同市への政策提言

本ゼミの演習 A の学生と共に、長野県須坂市を対象にフィールドワーク及び同市への政策提言を行った。近年地域活性化の文脈において注目されている観光と、健康都市として注目されている須坂市の健康という強みを結び付け、「スポーツ・健康イベント開催が地域活性化に寄与するのか？」という点について、現地で関係各所へのヒアリング調査・研究を通して検討した。最終的な調査結果を同市へ政策提言として提出した。

3. 「ジュニア・スポーツの課題の検討」というテーマでの報告書作成

ジュニア・スポーツについて文献を基に、現状の課題整理・検討を目的とした報告書の作成を行った。国の政策に掲げられるほどに子供がスポーツを行うことによる効果が注目されてきている。しかし、一方で勝利至上主義や部活動における行き過ぎた指導などのスポーツのもたらす負の影響もある。本報告書では現代スポーツにおける課題を明示しながら、今後のジュニア・スポーツの展望についての検討を行った。

以上 3 点の活動を通して、体系的に理論を学ぶだけでなく、「地域社会とスポーツの関係性」について、実際の現場の視点も踏まえた検討を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017 年 7 月 10 日(月)～2017 年 7 月 12 日(水)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田県スポーツ科学センター

実施内容：「福+プロジェクト」内で実施したイベントの 1 つであり、今年度で三回目となる「体操教室」の宣伝活動のサポート。

成 果：昨年度にご協力いただいた秋田県スポーツ科学センター副主幹の伊藤淳先生をはじめとする施設職員の方々の協力もあり、施設内での宣伝活動が円滑に行えた。参加者も多数獲得でき、有益な活動ができた。

対象演習：C

実施日：2017 年 9 月 2 日(土)～2017 年 9 月 4 日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：「福+プロジェクト」でのイベント実施における事前準備・当日マネジメント及び事後処理のサポート。

成 果：昨年度の経験を活かし、円滑にプロジェクトが推進していくようにサポートしたことにより、イベントの成功と調査研究における前進に貢献した。

V. 地域・公共マネジメントプログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

2000 年 4 月に地方分権一括法が施行され、地方自治体は国から権限を委譲されるとともに自己管理・自己責任のもとに政策の立案・運営を求められることになりました。

また、東日本大震災や福島原発事故など複合的な災害や熊本大地震などの大災害に見舞われ、被災地を中心として多くの地域の人々の生活が脅かされている現状があります。

このような状況の中で、それぞれの地域は、非常に複雑かつ多様化した様々な問題を抱えています。少子高齢化の進行と福祉、地場産業や商店街の衰退、地域の環境、治安、教育に関する問題、市町村合併や財政赤字の拡大、そして安全・安心な生活の場の喪失など公共的な重要課題が山積し、住民の不安・不満が高まっています。このような状況に対処するには、行政だけでなく、地域の人々も、「新しい公共」という考え方で、独自に創造的な戦略をもって取り組む素地ができつつあります。様々な複合する課題を抱えた地域を目の当たりにして、市民による健全なまちづくり・コミュニティづくりへの参画がますます高まっているのです。

このような状況のなか、地域社会において学際的かつ総合的な取り組みにより、多様な社会的課題の解決策を策定するなど、公共マネジメントの政策形成を担える有能な人材の養成が強く求められています。

これらの社会的要請を鑑み、それぞれの地域における諸問題に対して、学際的総合的にアプローチを進め、これを解決する高度な専門的解決能力を有する人材の養成を目的とした教育演習活動の本プログラムでは展開しております。2017 年度は、プログラム全体イベントとして、長野県須坂市をケーススタディとし当地にてフィールドワークを実施の上、須坂市長をはじめ、市の関係者との間で実地見聞と調査を元に中間報告を行い、多摩校舎に長野県須坂市関係者をお招きして最終報告発表を行いました。

本プログラムでは、公務員志望の学生だけでなく、政界や NPO での活動を通じて地域の社会問題に積極的に関与し、問題解決に取り組んでいきたいという志の高い学生、商店街や都市の建設・インフラ整備など民間企業においても都市計画・都市運営に積極的に関与したいなど地域問題に対して高い学習意識を持っている学生のニーズにも積極的に応えていきます。

2. 2017 年度演習科目担当者および履修者数

氏名	所属学部	FLP演習A（2年次）	FLP演習B（3年次）	FLP演習C（4年次）	実施形態
牛嶋 仁	法学部	-	-	3	単独（C）
工藤 裕子	法学部	10	6	-	合併（A・B）
山崎 朗	経済学部	6	2	-	単独（A・B）
斯波 照雄	商学部	12	8	7	単独（A） / 合併（B・C）
根本 忠宣	商学部	10	7	7	合併（A・B） / 単独（C）
御船 洋	商学部	14	15	10	単独（A・B・C）
植野 妙実子	理工学部	4	5	-	合併（A・B）
天田 城介	文学部	7	-	-	単独（A）
新原 道信	文学部	12	3	6	単独（A・B・C）
黒田 絵美子	総合政策学部	11	7	16	単独（A・B・C）
小林 勉	総合政策学部	5	4	3	単独（A・B・C）
堤 和通	総合政策学部	7	2	1	合併（A・B・C）
細野 助博	総合政策学部	7	8	11	合併（A・B・C）
合計		105	67	64	

3. プログラムスケジュール

4 月	履修ガイダンス 第一回部門授業担当者委員会
6 月	2018 年度募集に伴う総合ガイダンス
7 月	第二回部門授業担当者委員会
9 月	2018 年度募集に伴うプログラム別ガイダンス 学外活動（サマースクール・須坂市）
11 月	2018 年度募集に伴う選考試験
12 月	第三回部門授業担当者委員会（持ち回り開催） 学内活動（サマースクール成果報告会・期末成果報告会）
1 月	第四回部門授業担当者委員会
3 月	FLP 修了発表 FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

①サマースクール

実施日： 2017年9月12日(火)～2017年9月14日(木)

実施都市： 長野県須坂市

実施場所： 須坂市役所・他

実施内容： 須坂市の現地調査と政策提言（須坂市役所及び他企業へのヒアリング）

特別講演会（下記に記載）

講演者： 金井 辰巳 氏（株式会社仙仁温泉岩の湯）

実施日： 2017年9月13日(水)

実施場所： 古城荘

演 題： 地域活性化と観光

②サマースクール成果報告会・期末成果報告会

実施日： 2017年12月16日(土) 13:10～

実施場所： 中央大学 多摩キャンパス 8103 教室

実施内容： サマースクール参加ゼミによる成果報告
各ゼミによる年度活動報告

5. 2017年度までの地域・公共マネジメントプログラム修了生の主な就職・進学先

法務省、厚生労働省、国土交通省、特許庁、参議院事務局、東京国税局、裁判所事務官、東京都庁、京都府庁、千葉県庁、埼玉県庁、神奈川県庁、岐阜県庁、長野県庁、新潟県庁、山梨県庁、岩手県庁、板橋区役所、江東区役所、江戸川区役所、大田区役所、北区役所、渋谷区役所、千代田区役所、練馬区役所、港区役所、多摩市役所、昭島市役所、羽村市役所、町田市役所、三鷹市役所、武蔵野市役所、渋谷市役所、蕨市役所、川崎市役所、小田原市役所、相模原市役所、横浜市役所、宇都宮市役所、韮崎市役所、松本市役所、名古屋市役所、鈴鹿市役所、堺市役所、神戸市役所、福島県警察本部、都市再生機構、四国電力、沖縄電力、日本銀行、みずほフィナンシャルグループ、岩手銀行、北越銀行、山梨中央銀行、多摩信用金庫、横浜信用金庫、明治安田生命、SMBC 日興証券、日本総合研究所、ベネッセコーポレーション、マイナビ、明治乳業、鈴与、日立パワーソリューションズ、伊藤忠丸紅鉄鋼、本田技研工業、ヤンマー、ダイキン工業、NEC ソリューションイノベータ、インテリジェンス、電通九州、東急コミュニティー、京成電鉄、西日本鉄道、舞浜リゾートライン、イトーヨーカ堂、セブン・イレブン・ジャパン、東京大学大学院法学政治学研究科、早稲田大学大学院法務研究科、中央大学大学院（法学研究科、文学研究科、公共政策研究科）など

6. 演習教育活動

(1) 牛嶋 仁 (法学部・教授)

F L P 演習 C

<テーマ>

地域・公共の諸問題

<授業の概要>

1. 社会における法の機能や公共政策の形成・実施等を事例研究（実態調査）により主体的に学びます。
2. 対象テーマは、担当教員と相談した上で、受講者が決定します。
3. 方法として、受講生による調査・報告、実態調査、調査報告書作成の三つの柱があります。

(1) 受講生による調査・報告は、テキストなど地域・公共に関する基礎的文献（法学、政治学、公共政策等）や新聞記事等最新情報（以上、外国語を含む）の検討を受講者の報告と討論により行います。

(2) 実態調査は、訪問見学・インタビュー・インターン等をゼミ、グループ、または個人単位で行います。実態調査の対象は、国・自治体はもとより、国際機関、法律事務所、民間企業（シンクタンクを含む）、NGO、地域のNPO などです。特に、新しい公共の担い手における経験や調査を応援・援助したいと考えています。

<活動内容>

牛嶋ゼミは、官民協働ないしは官民の相互補完によって成立する事業をテーマに、各自がテーマ設定と調査を行い、その成果をゼミ論文（集）にまとめた。

ゼミ論文のテーマは、居場所事業、保育所、介護施設であった。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2017年12月11日(月)

実施都市：東京都江戸川区

実施場所：江戸川区役所

実施内容：居場所事業に関するヒアリング

成果：官民協働による居場所事業の実態を知ることができた。

対象演習：C

実施日：2017年12月21日(木)

実施都市：埼玉県さいたま市

実施場所：埼玉県庁

実施内容：複数の企業が共同で設置する保育所事業の取組みについてのヒアリング

成果：企業が共同で設置する保育所事業の現状と課題について知見を得た。

対象演習：C

実施日：2018年1月17日(水)

講演者：ルダシングワ 真美氏（ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト）

演題：市民による公益の実現－ルワンダの義足プロジェクト

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 6210 教室

実施内容：講演と質疑応答

成果：市民団体（外務省表彰を得ているとのこと）による公益の実現の実際と課題について、知見を得た。

<付記>

今年度演習は、3名のみの継続となったが、その3名は、共通テーマの下、互いの調査について検討継続的かつ自主的に議論し、演習の方法論としては、理想的な方法により、すばらしい成果を出すことができた。実態調査を積極的に行った（本報告記載事項はその一部。詳細は、ゼミ論文参照）ことも特筆に価する。3名のうち、2人は、地方公務員、1人は、介護事業に携わる予定であり、演習の成果をキャリア（地域・公共）に生かすことを大いに期待している。

(2) 工藤 裕子 (法学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

地域資源を活かした地域経営を考える：そのための地域資源の再発見・再評価、マネジメント

<授業の概要>

少子高齢化や地方分権化の中でさまざまな問題に直面している地域経営について、その地域に特有の資源（人材、財源、歴史文化、政治、地勢など）をいかに再発見し、再評価するか、さらにそれらをいかにマネジメントするか、を世界、特に大陸ヨーロッパ諸国の事例および日本の事例を通じて検討、考察する。地域経営の問題点について、文献およびフィールド調査で整理、理解したうえ、主に関係者へのヒアリングを通して日本のベストプラクティスを分析し、また海外事例の収集、調査を行う。過疎地域の再生事例として、中部イタリアの中山間都市にてワークショップ、研修を行うことを演習の一環とする他、日本の地方自治体でのフィールド調査も実施する。事例として扱うのは主に、諸資源が限定されている中小都市であり、大都市あるいは大都市圏における戦略等は対象としない。

<活動内容>

演習 A は、春学期冒頭に社会科学の調査方法、プレゼンテーションの仕方、レポートの書き方等を学んだ後、演習 B と一緒に国内実態調査（静岡県掛川市）を実施した。演習 A と演習 B は一緒に実態調査のための事前学習、調査テーマの決定、訪問先の選定、主要質問事項の確定などを行い、実態調査時にはヒアリング・インタビューを実施し、調査後の追加質問などを実施したうえ、春学期末に大学に掛川市議を招いて政策提言のプレゼンテーションを行い、また夏休みには個人レポートを作成した。春学期の後半はまた、サマースクールの準備をも実施した。秋学期は、国外実態調査の準備作業を進めつつ、サマースクールの中間報告、最終報告、報告書作成などの日程に合わせ、サマースクールのまとめの作業も進めた。サマースクールについては、観光政策に関する政策提言を行ったうえ、報告書を作成した。秋学期後半は国外実態調査の準備を中心に実施し、春休みに国外実態調査（イタリア、エミリア＝ロマーニャ州）を実施する。

演習 B については、春学期は演習 A と一緒に実態調査のための事前学習、調査テーマの決定、訪問先の選定、主要質問事項の確定などを行い、実態調査時にはヒアリング・インタビューを実施し、調査後の追加質問などを実施したうえ、春学期末に大学に掛川市議を招いて政策提言のプレゼンテーションを行い、また夏休みには個人レポートを作成した。春学期の後半はまた、夏休みに実施する演習 B のみの国内実態調査の準備を行った。演習 A 時に実施した国外実態調査を踏まえ、それぞれが関心を持つテーマを持ち寄り、演習 B 全体として調査するテーマの決定、訪問先の選定、訪問先機関との調整などを行い、夏休みに演習 B としての国内実態調査（三重県伊賀市）を実施した。秋学期にはこの研究成果をゼミで発表したうえ、報告書を作成した。秋学期はまた、卒論のテーマを決定し、個人による研究発表を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2017年6月10日(土)～2017年6月11日(日)

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所

実施内容：掛川市の生涯学習活動、市民と行政の協働、企業の役割、農業振興、中心市街地の活性化についてなどヒアリングおよび調査

成果：掛川市の生涯学習活動の成果、行政と市民との協働のあり方などを学んだ他、世界農業遺産の茶草場農法の地を訪問、また中心市街地におけるまち歩きを通して、商店街の活性化等について調査した。市役所の関係者、コミュニティ活動に従事している人々、企業経営者等へのヒアリングを通して、現地調査、ヒアリングを中心とする社会調査の方法を学んだ。また、事前調査、事後のフォローアップの方法、そしてそれらを政策提言としてまとめ、プレゼンテーションおよびレポートにまとめる、という一連の作業の進め方についてマスターした。

対象演習：A・B

実施日：2017年6月10日(土)

講演者：中山 礼行 氏（元掛川市理事）

演題：掛川市の生涯学習運動とまちづくり

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所

実施内容：当該テーマについての講演と質疑応答

成果：掛川市のまちづくりにおいて重要な市民と行政との協働が全国に先駆けて始まった同市の生涯学習運動を基礎に発展してきたことを学んだ。

対象演習：A・B

実施日：2017年6月10日(土)

講演者：井村 征司 氏（ローカルライフスタイル研究会）

演題：行政と市民の関係ーまちづくりに関わって

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市役所

実施内容：当該テーマについての講演と質疑応答

成果：生涯学習、ボランティア、NPOなどの活動を通して掛川市のまちづくりに市民として関わってきた同氏の経験から、行政と市民の協働によるまちづくりの可能性と課題を学んだ。

対象演習：A・B

実施日：2017年6月11日(日)

講演者：長谷川 八重 氏 (NPO スローライフジャパン・ローカルライフスタイル研究会)

演 題：地域活動の実際と事例報告

実施都市：静岡県掛川市

実施場所：掛川市中央図書館

実施内容：当該テーマについての講演と質疑応答

成 果：今年度からの新しい試みである「茶エンナーレ」などについてのお話を伺い、さまざまな地域活動の事例について学んだ。

対象演習：A

実施日：2017年9月12日(火)～2017年9月14日(木)

実施都市：長野県須坂市

実施場所：須坂市役所・他

実施内容：須坂市訪問

成 果：サマースクールへの参加は、演習 A としては二回目の社会調査であったため、ヒアリングの手法がかなり身に付き、そのため、事後のフォローアップについても自主的に実施した。政策提言のために必要な事項および資料を追加調査することができた。テーマとしては観光政策について研究、発表した。

対象演習：B

実施日：2017年9月15日(金)

実施都市：三重県伊賀市

実施場所：伊賀市役所

実施内容：ヒアリング

成 果：演習 A 時に実施したイタリア研修を受けて、公私協働、コミュニティづくり、歴史資源を活かしたまちづくり、農業の六次産業化とブランド化、食とまちづくり、などが研究のテーマとして選択され、これらすべてについて調査が可能な都市を探した結果、最終的に三重県伊賀市が調査対象に選ばれた。この実態調査においては、調査対象へのコンタクトからはじまり、調査の設計、ヒアリングの実施、事後のフォローアップ、政策提言のまとめ、報告書の作成までに一連の作業を自分たちだけで行うことができた。

対象演習：B

実施日：2017年9月16日(土)

実施都市：三重県伊賀市

実施場所：伊賀の里モクモク手作りファーム

実施内容：訪問およびヒアリング

成 果：農業の六次産業化とブランド化、食による観光とまちづくりについて学んだ。

対象演習：A

実施日：2018年2月25日(日)～2018年3月8日(木)

実施都市：チヴィテッラ・ディ・ロマーニャ・他（イタリア）

実施場所：ファッジョーリ農場・他

実施内容：EUのプロジェクト等でもよく知られるアグリツーリズム農場であるファッジョーリ農場を拠点とし、小規模自治体および私企業、大学、組合等の活動が活発なエミリア＝ロマーニャ地域の地域振興政策について、地方自治体、地域振興に関係する組合や公社、および企業家へのヒアリングおよび体験学習を通じて、調査した。

成果：海外においてもヒアリング、インタビューを行い、本格的な調査が実施できた。特に、日本では限界集落と呼ばれるような地域においても、地産地消、観光、アグリツーリズム、スローフードなどによって活性化することが可能であることを知ることができた。地域振興政策に関連し、イタリアの商業活動について複数の市役所に対してヒアリングを行ったほか、諸政策による地域振興およびコミュニティの活性化について、複数の市役所等に対してヒアリングを行った。地元企業、組合組織、団体などを訪れヒアリングを行った他、伝統産業や農業のブランド化などを実施している企業や個人のもとで体験学習を行った。

(3) 山崎 朗 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

地域のグローバル化、プレミアム化による地域創生

<授業の概要>

インバウンド、輸出、輸入代替、高度外国人人材の活用および地域資源による地域創生

<活動内容>

山崎ゼミは、山崎朗編著『地域創生のデザイン』中央経済社、2015年の輪読を行い、そのなかで、政策研究のテーマを図書館に絞った。図書館については、『地域創生のデザイン』の第3章に武雄市長による武雄図書館の改革の事例があり、武雄市の図書館についての文献検索とともに、全国で行われている図書館の新設や業務委託について、図書館流通センターへのヒアリング、大和市図書館の見学および新聞や雑誌、著書の収集と読解によって、新しい図書館の機能について理解を深め、須坂市においては政策提言を行った。

後期には、政策提言のまとめとともに、プレミアム地域創生についての学習も行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017年7月3日(月)

実施都市：東京都文京区

実施場所：図書館流通センター

実施内容：図書館の受託運営についてのヒアリング

成果：長野県須坂市における政策提言の基礎研究となった。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域創生の新しいデザイン

<授業の概要>

新しい地域間格差についての認識を深め、その格差是正に向けての新しい地域創生政策や「非空間的政策」の活用策について学習する。

<活動内容>

山崎ゼミのB生は、履修者数が3名と少ないこともあり、今年度は2つの共同論文を作成することに専念した。

ひとつは、学生観光論文コンテスト「自然や文化を活かした魅力ある地域づくり～ナショナル・トラスト活動でできること、私の提案」(11月28日必着)に向けた論文であり、昨年度実施した政策提言の調査研究の成果を活用しつつ、世界のナショナル・トラスト運動と日本のナショナル・トラスト運動の差異を明らかにし、日本の地域特性を踏まえた街づくりを促進するための日本型ナショナル・トラスト運動について提案した(12,000字)。2018年2月20日に結果公表があった。その結果をみると76篇の応募作品中2編のみが入賞となる高い倍率(38倍)となり、山崎ゼミの作成した論文は残念ながら選にもれた。選にはもれたが、論文作成のために、情報の収集と統計の整理、分析視角や論文の構成を行ったという経験は得難いものであったと思われる。

もうひとつは、みずほ学術振興財団の第59回懸賞論文の経済部「地域金融のあり方を考える」(2018年1月9日必着)というテーマに即した論文(36字×30行×12枚)を共同で作成した。履修者は、金融の知識に乏しかったため、基本的な知識を短期間で習得し、その知識をもとに人口減少・グローバル化時代における「地域金融のあり方」について学術論文を執筆し、応募した。締め切り日の関係で、冬休み期間中は、メール等で何度も文章と論理の擦り合わせや論文の推敲を行った。

(4) 斯波 照雄 (商学部・教授)

FLP 演習 A

<テーマ>

比較都市史研究

<演習のスケジュール>

まず4月より E.H. カー『歴史とは何か』岩波新書、を輪読し、夏休みの須坂市におけるサマースクールに向けて、テーマを「観光戦略」と設定し、資料を集め、議論し、9月12日～14日には須坂市での現地調査、ヒアリングを行った。続いて9月より『比較都市史の旅』から、西洋の都市を選び、その都市について他の参考文献を参照して、その特徴、日本の都市との相違点について比較検討し、発表し、議論した。また、FLP ゼミ3、4年生から助言、協力、指導を受けて沼田市の農業と連携した観光戦略について提言をまとめた。その内容は『FLP 地域・公共マネジメントプログラム「Summer School in 須坂市」』報告書』に掲載された。併せて、研究対象とする日本の都市について姫路市を選び、資料収集を行い、2月7日～9日に現地姫路市において調査合宿を行った。

<活動内容 (学内・学外・講演会等) >

FLP 演習 A ゼミでは、文献講読を通じて、歴史的な見方について学んだ上で西洋の個別都市の特徴ならびに日本の都市との相違点について比較検討を行った。それは同時に、文献を正確に読み、その内容を報告するプレゼンの力の向上を目指すものであった。さらに、須坂市におけるサマースクールに向けて資料を集め、内容について議論し、調査結果についてパワーポイントを利用して口頭発表し、文章にして提言をまとめるという実践的な学習につながった。また、姫路市を調査都市に定め、中心市街地活性化をテーマに設定し、事前に各自の視点から資料を集め、データを分析した後、姫路市で合宿を行い、市役所シティプロモーション課、産業振興課におけるヒアリングのほか、市内の中心商店街を実際に見学し、市立城内図書館にて資料を収集した。次年度 FLP 演習 B において報告書がまとめられる予定である。

・国内実態調査 A 演習

実施日：2018年2月7日(水)～2018年2月9日(金)

実施都市：兵庫県姫路市

実施場所：姫路市役所

実施内容：姫路市の観光振興ならびに中心市街地活性化に関する実態調査

成果：次年度演習 B において報告書を作成

FLP演習B・C

<テーマ>

比較都市史研究

<演習のスケジュール>

2017年度前期には、3年生(FLP演習B)は2年次春休みの和歌山市合宿において行った市役所、県庁でのヒアリング内容、収集したデータ、資料の整理を行い、それらを分析して、和歌山市の農業、工業、商業、雇用、観光についての各レポートをまとめた。レポートを仕上げていく過程では、各自のまとめている内容についての口頭発表を行い、各自修正を繰り返しながら、12月に全体報告書を作成し、2月には和歌山市についての冊子『共同研究報告書』を完成させた。

4年生(FLP演習C)は、前期には3年生が春休みに調査合宿を行った和歌山市に関するテーマ別レポート作成に助言し、協力するとともに、各ゼミ生はそれぞれが研究対象とする都市ならびにテーマを決定した。各自が設定したテーマに基づいて、資料収集、データを分析し、口頭発表を行い、2月にFLPゼミの卒業論文集を完成させた。また、4年生は、姫路市における実態調査に向けての準備過程から助言、協力し、2月の現地調査合宿にも参加して、2年生(FLP演習A)のヒアリングや資料調査等に協力した。

<活動内容(学内・学外・講演会等)>

演習B、Cともに個人指導を基本として、作成過程において随時口頭発表を行いながら文章にまとめ、添削、修正を繰り返しながらそれぞれレポート、論文をまとめた。

2017年度FLP演習Bゼミ生は、須崎市で行われたサマースクールにおいて演習Aゼミ生を助言、協力、指導するとともに、国内実態調査を行った和歌山市についての報告書冊子『中央大学FLPス波ゼミ共同研究報告書—和歌山市について—』を作成した。

2017年度FLP演習Cゼミ生は、姫路市における産業構造、観光ならびに中心市街地活性化に関する実態調査に向けての準備過程、調査合宿に際し、2年生(FLP演習A)ゼミ生に助言、協力し、実際に合宿にも参加した。それとともにゼミ生それぞれが研究対象に決定した都市についてテーマを設定して各自卒論を完成させ、『2017年度FLPス波ゼミ卒業論文集』を作成した。

・国内実態調査 C演習

実施日：2018年2月7日(水)～2018年2月9日(金)

実施都市：兵庫県姫路市

実施場所：姫路市役所

実施内容：姫路市の観光と中心市街地活性化に関する実態調査

成果：次年度演習において各自選択した個別都市対象の卒業論文を作成

(5) 根本 忠宣 (商学部・教授)

F L P 演習 A・B

<テーマ>

地域における雇用創出について考える

<授業の概要>

地域における雇用の場に着目して、地域発展を支えるための雇用創出の可能性について徹底的に考える。具体的には、以下の点に着目して学習を深めていく。

【共通】

- 自己雇用の場としての商店
- 地域経済における中小企業の役割
- 創業の場としての地域
- 地域経済発展におけるイノベーションの役割
- 地域コミュニティとソーシャルビジネス
- 地域経済の発展を支えるインフラとしての金融、行政

【A 生】

サマースクールへの参加と報告書の作成

【B 生】

- ・伊東市並びに橋本商店街活性化プロジェクトへの参加と提案企画書の作成
- ・ゼミ交流会への参加と報告書の作成

<活動内容>

根本ゼミは、毎回の授業において A・B 生合同形式での輪読を行う。これにより都市地域経済学や都市建築学、地域統計学など都市や地域に関する学問を幅広く研究し、地域を語る上での最低限の知識をインプットするとともに、その後のディスカッションによってアウトプットの練習も行う。なお、C 生はこの通常授業への参加は自由で、これまでに培ってきた知識や経験をもとに卒論研究に取り組むのが根本ゼミの通例である。

他に、この授業活動を基礎とした学外活動も行う。今年度、A 生は須坂市でのサマースクール及び橋本商店街活性化プロジェクトに参加し、地域の実態把握や政策立案プロセスを経験した。B 生は、静岡県伊東市の伊東湯のまちバルと称するまちおこしイベントに参画し、地域の担い手の方々とともに本格的なまちづくり活動へと身を投じた。(なお、主催団体である伊東湯のまちバル実行委員会の皆様とはゼミ創設以来の付き合いがあり、2018 年度も引き続きバルイベントに参画させていただくことが決まっている。)

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017 年 5 月 5 日(金)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市役所

実施内容：まちバルクイズラリーのパネルに使用する写真の収集及び設置予定場所の視察
成 果：クイズラリーの問題にマッチした写真を撮ることができた。また、設置場所の視察も行い、日が落ちてからも見えやすい場所を探すなど設置場所の微修正にもつながった。

対象演習：B・C

実 施 日：2017 年 6 月 3 日(土)～2017 年 6 月 4 日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市市街地

実施内容：まちバルイベントの運営及びアンケート調査

成 果：およそ半年にわたる取り組みの成果が出た。市内外からたくさんの方にご参加いただき、根本ゼミが中心的に関わったクイズラリーも好評をおさめ、バルの成功に寄与することができた。アンケート調査では周辺市のイベントと今回のバルイベントの日程がバッティングしていることが判明し、次回のバルイベントにつながる情報を残すことができた。私たち根本ゼミが微力ながらもまちづくり活動に貢献できたということは、ゼミ生一同とも貴重な経験になったと感じている。

対象演習：A

実 施 日：2017 年 6 月 4 日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市役所

実施内容：同上

成 果：まちバルの運営補助という立場で参加した。バル実行委員会の方々だけでなく、アンケート調査を通じてバル参加者と直接お話をする機会もあり、地域に根ざしたまちづくりイベントの効果・影響について学びを得られた。この経験は、今後のゼミ学習や学外活動に活かすことができると感じている。

対象演習：B・C

実 施 日：2017 年 6 月 20 日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東商工会議所

実施内容：第七回伊東湯のまちバル反省会への参加

成 果：第七回まちバルの反省点などについて意見交換を行った。根本ゼミの提案で今回初めて導入した 3 枚綴りのチケットは好評を受けた一方で、アンケートの回答者に偏りがあるとの指摘もいただいた。今後の調査活動へと活かしていきたいと思う。ほか、参加者からの意見の共有、検討や役員人事、次回開催日程の検討などを行った。

対象演習：B・C

実施日：2017年7月11日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市役所

実施内容：まちバル運営とバル参加店舗との懇親会・交流会

成果：バル参加店舗の皆様と直接お話する機会はこれまで少なかったが、参加店舗の皆様もバルの盛り上がりや伊東のまちの盛り上がりを願っていることを知った。また、参加店舗側からみたバルへの意見や評価は運営側からみたそれと異なり、新鮮さを感じた。とても有意義な交流会になったと思う。

対象演習：A・C

実施日：2017年8月6日(日)～2017年8月7日(月)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本商店街協同組合

実施内容：橋本七夕祭りの実行委員として祭りの運営や祭りに来た人への対応

成果：地域での祭りが地域住民の団結に効果的であり、他の地域からの集客に効果的である事が分かった。また、運営に携わる中で合意形成の困難さを学んだ。

対象演習：A

実施日：2017年8月12日(土)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：熱海市役所マリンホール

実施内容：網代駅周辺の現状の視察と周辺の発展に向けた会議

成果：有名な温泉地でありながら街に活気がないこの地区の問題点を視察によって見つけ、同様の地域においてどのようにして活性化を図るか、地域住民の生活と観光のバランスはどうあるべきかを学ぶことができた。

対象演習：A

実施日：2017年9月6日(水)

実施都市：神奈川県小田原市

実施場所：小田原市役所

実施内容：市役所周辺の現状の視察とインタビュー調査

成果：小田原城など有名観光地のある駅東側とは反対の西側において、街全体の活性化という点で学生である私たちは何ができるのかを考え、議論することができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年10月4日(水)～2017年10月10日(火)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁

実施内容：PR ブースにおいて相模原市の名産品販売の手伝い、相模原市についての説明

成 果：1 都市を PR する困難さ、まちを紹介する魅力を学んだ。特に相模原市は政令指定都市でありながら名産品や観光地が知られておらず、どうすれば相模原市について知らない人に魅力を知ってもらうか試行錯誤する中で学んでいった。

対象演習：A・C

実 施 日：2017 年 10 月 13 日(金)

実施都市：東京都府中市

実施場所：東京自治会館

実施内容：公益社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩主催の政策スクールへの参加

成 果：多摩地域の問題について自治体職員の方々と直接話し合うことによって地域への理解を深めると共に、現場目線での問題の捉え方や問題解決に必要な姿勢、スキルを学んだ。

対象演習：A・B

実 施 日：2018 年 1 月 18 日(木)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：カフェダイニングナナバル

実施内容：第八回伊東湯のまちバルに向けた総会兼新年会

成 果：役員人事や次回開催日程の正式決定ののち、新年会が開催された。根本ゼミも B 生から A 生へとバトンが渡り、A 生は実行委員会の皆様と交流を深めることができた。なお、副委員長に穴があいたことから第八回まちバルでは根本ゼミ生が副委員長を務めることになった。ほか、次回の会議に向けた検討事項の共有など。

F L P 演習 C

<テーマ>

地域に関する研究論文の作成

<授業の概要>

卒業論文の作成

<活動内容>

A・B 生時に培った知識や経験を活かして卒業論文の作成を行う。テーマは各ゼミ生が責任を持って選び、根本教授のサポートのもと書き進めていく。通常授業の輪読は自由参加を原則とし、参加時には議論が円滑に進むようサポートする。そのほかにも A・B 生が主体となつて行う学外活動にも参加し、ともに考えサポートするなど、ゼミ活動全体のサポート役を務める。

なお、卒論に関し、授業最終日にゼミ全体で卒論発表会を執り行うのが通例である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017 年 6 月 3 日(土)～2017 年 6 月 4 日(日)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市市街地

実施内容：まちバルへの参加と運営サポート

成 果：B 生が中心となって活動しているパルイベントに参加し、B 生のサポートを行う。昨年既にバルを経験しているため、お客様対応やアンケート調査のコツを B 生に教えることができた。

対象演習：B・C

実施日：2017 年 6 月 20 日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東商工会議所

実施内容：第七回伊東湯のまちバル反省会への参加

成 果：第七回まちバルの反省点などについて意見交換を行った。根本ゼミの提案で今回初めて導入した 3 枚綴りのチケットは好評を受けた一方で、アンケートの回答者に偏りがあるとの指摘もいただいた。今後の調査活動へと活かしていきたいと思う。ほか、参加者からの意見の共有、検討や役員人事、次回開催日程の検討などを行った。

対象演習：B・C

実施日：2017 年 7 月 11 日(火)

実施都市：静岡県伊東市

実施場所：伊東市役所

実施内容：まちバル運営とバル参加店舗との懇親会・交流会

成 果：バル参加店舗の皆様と直接お話する機会はこれまで少なかったが、参加店舗の皆様もバルの盛り上がりや伊東のまちの盛り上がりを願っていることを知った。また、参加店舗側からみたバルへの意見や評価は運営側からみたそれと異なり、新鮮さを感じた。とても有意義な交流会になったと思う。

対象演習：C

実 施 日：2017 年 7 月 23 日(日)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：阿治古神社

実施内容：阿治古神社例大祭への参加

成 果：根本教授の勧誘によりボランティアとして例大祭に参加した。海の男たちに混ざりご神船を曳く経験は、大変疲れたものの二度と得られないもののように思う。その後は例大祭を堪能し、網代の伝統を肌で感じることができた。このような伝統芸能は昨今枯れつつあるが、地域のアイデンティティ確立やコミュニティ形成という観点から、維持発展されていくべきものであると改めて実感した。

対象演習：A・C

実 施 日：2017 年 8 月 6 日(日)～2017 年 8 月 7 日(月)

実施都市：神奈川県相模原市

実施場所：橋本商店街協同組合

実施内容：橋本七夕祭りの実行委員として祭りの運営や祭りに来た人への対応

成 果：地域での祭りが地域住民の団結に効果的であり、他の地域からの集客に効果的である事が分かった。また、運営に携わる中で合意形成の困難さを学んだ。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2017 年 10 月 4 日(水)～2017 年 10 月 10 日(火)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁

実施内容：PR ブースにおいて相模原市の名産品販売の手伝い、相模原市についての説明

成 果：1 都市を PR する困難さ、まちを紹介する魅力を学んだ。特に相模原市は政令指定都市でありながら名産品や観光地が知られておらず、どうすれば相模原市について知らない人に魅力を知ってもらうか試行錯誤する中で学んでいった。

対象演習：A・C

実 施 日：2017 年 10 月 13 日(金)

実施都市：東京都府中市

実施場所：東京自治会館

実施内容：公益社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩主催の政策スクールへの参加
成 果：多摩地域の問題について自治体職員の方々と直接話し合うことによって地域への理解を深めると共に、現場目線での問題の捉え方や問題解決に必要な姿勢、スキルを学んだ。

（６）御船 洋（商学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

地方財政や地方分権の意義を理解するには理論と制度の両方を学ぶ必要がある。現代の地方財政論は応用経済学（公共経済学）としての性格が強まっており、したがって地方財政論の分析ツールは経済学（とくにミクロ経済学）である。経済学には、事実や論理的帰結を追究する実証的（事実発見的）経済学と、価値判断を導入して経済現象や政策・制度を評価する規範的経済学があるが、地方財政理論においても、この両者のアプローチが用いられる。とくに地方財政の評価をする際の基準として重要なのが「効率性」と「公平性」である。地方財政における「効率性」基準とは、ある事業を実施する際の「便益」と「費用」を比較し、「純便益」（＝便益－費用）がプラスにならないものはどんなに事業内容が素晴らしいものであっても採用せず、「純便益」の大きい方から実施するべしと判断する基準である。また、地方財政における「公平性」基準とは、事業コストの負担をできるだけ公平に求めるべきだとする基準である。

本演習では、地方財政の理論や制度を学んだ後に、具体的な地方自治体の財政運営の評価を行うことを研究の中心に据えるが、その際、上記２つの基準に基づく考え方が徹底的に身に着くような学習方法を取る。

<活動内容>

事実上の活動開始時期は（前年度末の）2017年3月であった。新A生（当時1年生）はFLP御船ゼミの春合宿（2017年3月15日～3月17日）に参加し、福島県いわき市役所におけるヒアリングに同席した。

演習Aでは、年間を通じて地方財政論の基礎を学ぶという方針の下、基本テキストの輪読を行った。テキスト輪読の際は、履修者が全員初学者であることを考慮して、基本的な概念、用語、理論等については、教員ができる限り丁寧に解説をし、全員がきちんと理解したうえで次に進むという方針を貫いた。テキストは、兼村高文・星野泉著『自治体財政がよくわかる本』（イマジン出版、2014年刊）を使用した。

前期途中からはサマースクールの準備に取り掛かり、B生の指導を仰ぎながら、須坂市の財政に関する調査研究を行い、事前質問表を作成した。

後期には、はじめに、サマースクールの成果報告会に向けて、ヒアリング内容のまとめ、報告用原稿の準備、パワーポイント用スライドの作成、プレゼンテーションの練習等を行った。成果報告会終了後は、最終報告書のための原稿作成、相互チェック等を行い、さらには、期末報告会に向けた準備を行った。

演習Aでは、地方財政や地方分権、さらには安倍政権による「地方創生」の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するため

に、毎月1回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、ホットな話題について全員で議論する機会を設けた。

<実態調査>

対象演習：A

実施日：2017年9月12日(火)～2017年9月14日(木)（サマースクール）

実施都市：長野県須坂市

実施場所：須坂市役所

実施内容：「須坂市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：須坂市の「決算カード」等を利用して、須坂市の財政運営の問題点をあらかじめ把握し、それをゼミ生同士で共有したうえでヒアリングに臨んだ。須坂市の場合、県内全市町村の中で最も経常収支比率が高い点が課題であったが、ヒアリングの結果、その対策として、①大型商業施設を積極的に誘致すること、②在宅福祉介護者慰労金支援事業の見直しを行うこと、の2点に絞って詳細に分析し、市に対して政策提言を行った。

対象演習：A

実施日：2018年3月12日(月)～2018年3月14日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：湯沢町役場

実施内容：「湯沢町の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成果：湯沢町財政課を訪れ、ヒアリングを行った。「財政」「観光」「ふるさと納税」「移住政策」「リゾートマンション」「その他」の6分野に関する40項目の質問事項を事前に送り、当日のヒアリングは、それへの回答および補足説明という形で進められた。とくに移住政策とリゾートマンションの現状について詳しく聞くことができたので、大変勉強になった。

<講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月29日(水) 6時限目（18：15～19：45）

講演者：黒田 武一郎 氏（総務省自治財政局長）

演題：地方財政の諸問題について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 5403 教室

成果：地方財政政策を統括する部署のトップの方から、地方財政の仕組み、歴史、現状、課題について直接お話を伺うことができた。地方財政の役割、地方財政計画、国と地方の財政関係、地方の債務残高の推移、平成30年度予算における地方財政の位置づけ、地方創生政策、地方公営企業、地方基金残高等々、内容は

多岐に渡った。事前にゼミ生の質問をまとめてお送りしておいたことを踏まえ、講演の中で、質問に答えてくださる場面も数多くあった。ときおりエピソード等を交えてわかりやすく説明してくださったので、大変興味深く聞くことができた。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

地方財政や地方分権の現状はどうなっているのか、現段階における課題は何か、課題解決に向けた方策にはどのようなものが考えられるか、といった点を問題意識として共有し、地方財政や地方分権の今後のあり方について検討した。また、地方財政の再建や地方分権の一層の推進は、地域経済の活性化と不可分の関係にあるので、地域の経済発展を促すにはどのような方法があるかについても分析視野に入れて議論した。

加えて、昨今の少子高齢化、グローバル化、地域間格差、貧困、雇用の悪化、都心部の衰退、山間部の限界集落の増大等々の変化は、地方財政運営の根底を揺るがす重要な要因になっている。この授業では、このような問題をひとつひとつ取り上げながら、地方財政のあり方、国と地方の役割分担、公と民の役割分担等について考察した。

<活動内容>

演習 B では、演習 A で学んだ地方財政に関する基本的な概念、用語、理論を実際の分析に生かすべく、地方自治体の行財政運営に関する実態調査を踏まえた財政分析を積極的に行った。

前期の前半には、2016 年度末（2017 年 3 月 15 日～17 日）に福島県いわき市役所で実施したヒアリング調査をもとに、報告書の作成を行い、いわき市に送付した。前期の後半には、夏休み期間中（9 月 3 日～5 日）に行う宮城県仙台市役所のヒアリング調査に関する事前調査および質問表の作成を行った。併せて、サマースクール（長野県須坂市、9 月 12 日～14 日）に向けて A 生に対する助言や指導を行った。

後期の前半には、上記仙台市で行ったヒアリング調査をもとに、報告書を作成し、仙台市に送付した。加えて、後期の後半の 11 月 29 日に、総務省自治財政局長の方を講師に招いて講演会を行ったが、それに向けて地方財政に関する質問表の作成を行い、講演者に送付した。さらに、12 月 8 日には、神奈川県横浜市役所においてヒアリング調査を行ったが、これについても、事前調査、質問表の作成・送付を行い、ヒアリング調査後には政策提言を含む調査報告書を作成し、横浜市に送付した。

以上の活動に加え、演習 B では、地方財政や地方分権の実際の動きを常にフォローし、現在どういう問題が起きているかということをゼミ生全員で共有するために、毎月 1 回、担当者を決めて「ニュース報告」を行ってもらい、それについて全員で議論する機会を設けた。

<実態調査>

対象演習：B

実施日：2017 年 9 月 3 日（日）～2017 年 9 月 5 日（火）

実施都市：宮城県仙台市

実施場所：仙台市役所

実施内容：「仙台市の財政分析」というテーマの下、市役所所管課のヒアリングおよび市内の視察を行った。

成 果：仙台市の「決算カード」等を利用して、仙台市の財政運営の問題点をあらかじめ把握し、それをゼミ生同士で共有したうえでヒアリングに臨んだ。仙台市には、事前に質問表を送付して回答を求めた。とくに①公共施設の老朽化、②市営地下鉄東西線の厳しい経営状態、③市の外郭団体の数の多さと経営不振、の3つの問題を重点的に取り上げてヒアリングを行った。ヒアリングの場では必ずしも十分な説明が得られなかったため、帰京後も再質問と再回答のやり取りを続けた。それらを踏まえて、公共施設運営のコスト削減、地下鉄事業の経営改善、外郭団体の財政再建等に関する政策提言を盛り込んだ報告書を作成し、仙台市に送付した。

対象演習：B

実施日：2017年12月8日(金)

実施都市：神奈川県横浜市

実施場所：横浜市役所

実施内容：「横浜市の財政分析」というテーマの下、横浜市財政局財政課においてヒアリングを行った。

成 果：「財政」「交通・観光」「特別自治市構想」の3分野に関する質問事項を事前に財政課に送り、当日のヒアリングは、ゼミ生の事前質問への回答および補足説明という形で進められた。わが国最大の政令指定都市の現状について詳しく話を聞くことができ、大変有意義であった。

<講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月29日(水) 6時限目(18:15~19:45)

講演者：黒田 武一郎 氏(総務省自治財政局長)

演 題：地方財政の諸問題について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 5403 教室

成 果：地方財政政策を統括する部署のトップの方から、地方財政の仕組み、歴史、現状、課題について直接お話を伺うことができた。地方財政の役割、地方財政計画、国と地方の財政関係、地方の債務残高の推移、平成30年度予算における地方財政の位置づけ、地方創生、地方公営企業、地方基金残高等々、内容は多岐に渡った。事前にお送りしておいたゼミ生の質問を踏まえ、講演の中で、質問への回答に言及してくださる場面も数多くあった。ときおりエピソード等を交えてわかりやすく説明して下さったので、大変興味深く聞くことができた。

F L P 演習 C

<テーマ>

地域経営と地方財政

<授業の概要>

各自、研究テーマを決め、研究内容および論文構成を検討し明確化したうえで、計画に沿って資料収集や分析等の準備を進めていき、4年修了時の卒業論文の完成を目指した。

<活動内容>

演習 C では、毎回、ゼミ生が卒業論文の中間報告を行い、その報告をめぐってゼミ生全員で議論し、質疑応答や意見交換を行うことを通じて、論文内容の改善や修正に役立てた。そして期末に卒業論文を完成させ、それらを編集して論文集を作成し、全員に配布した。

<講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年11月29日(水) 6時限目(18:15～19:45)

講演者：黒田 武一郎 氏(総務省自治財政局長)

演 題：地方財政の諸問題について

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 5403 教室

成 果：地方財政政策を統括する部署のトップの方から、地方財政の仕組み、歴史、現状、課題について直接お話を伺うことができた。地方財政の役割、地方財政計画、国と地方の財政関係、地方の債務残高の推移、平成30年度予算における地方財政の位置づけ、地方創生政策、地方公営企業、地方基金残高等々、内容は多岐に渡った。事前にゼミ生の質問をまとめてお送りしておいたことを踏まえ、講演の中で、質問に答えてくださる場面も数多くあった。ときおりエピソード等を交えてわかりやすく説明してくださったので、大変興味深く聞くことができた。

(7) 植野 妙実子 (理工学部・教授)

FLP 演習 A・B

<テーマ>

男女共同参画社会の推進-少子化克服とともに考える

<授業の概要>

2014 年の出生率は 1.42 となり前年より降下した。生まれる子どもの数も 1973 年に 209 万人、現在は 100 万人をきった。日本の人口は 2008 年の 1 億 2808 万人をピークに減少となっている。2060 年の人口は 8000 万人になると推計されている。少子化は先進国に共通の問題とされているが、フランスのように克服した国もある。しかもフランスやヨーロッパではジェンダーメインストリームという考え方をとりながら少子化を克服している。日本の場合は、結婚、出産に対する価値観の変化や養育コストの増大などが少子化の原因とされている。他方でいまだに男女の役割分担意識が強く、子育ては女性の仕事という考えも根強い。子どもの数や子育て世代の人口が減るとそれに伴って社会構造も変化する。小児科医のなり手が少なくなる、学校の統廃合が進むなど、子どもを育てることが困難な環境がますます進む。子どもを産み育てようという意欲自体もうすらぐ。少子高齢社会の最大の問題点は、労働力が少なくなる一方で、高齢者が増え、様々な対策（年金や医療費など）が必要になる事である。少子化の問題は、女性が働き続けて晩婚化が進むことが原因といわれることがある。しかし、女性も男性と同様に、もっている能力を生かして社会で活躍するのは当然である。フランスでは女性の社会進出を支える政策を次々と生み出しながら、同時に少子化も克服した。そうした例に学びながら、少子化を克服しつつ真の男女平等社会をどのように確立したらよいかを考える。なお、演習の柱は、基本事項に関する講義、実態調査の準備と実行、調査報告書の作成、プレゼンテーションである。

<活動内容>

植野ゼミは、まず、『論争日本のワーク・ライフ・バランス』（日本経済出版社 2008 年）を読み、ワーク・ライフ・バランスの意味を理解し、日本における浸透状況や課題を調べた。その上で、サマースクールに参加した。また、NPO 法人ファザーリング・ジャパン西村氏の講演会を企画し、杉並区での保育課へのインタビュー、保育園の状況の調査も行った。サマースクールにおいては、須坂市におけるワーク・ライフ・バランスの理解や実施状況を調べ、理念的には理解が進んでいても実際には一人も男性職員が育児休暇をとっていないことなどを知り、課題が多いことを知った。また企業においては、特に工場のような場合は、仕事が少ない時もあるので、繁忙期には目一杯働くという形になり、残業時間の規制や休暇取得の推進との調整が難しいこともわかった。A 生・B 生ともに報告書を作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2017 年 6 月 27 日(火)

講演者：西村 創一郎 氏 (NPO 法人ファザーリング・ジャパン)

演 題：働きながら子育てできる社会の実現

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 6704 教室

実施内容：西村氏の講演と A 生・B 生との討論

成 果：NPO 法人ファザーリング・ジャパンは男性の育児を推進している団体である。

女性差別撤廃条約は、男性も女性も同等に社会で活躍すると同時に、家事・育児・介護等を男性も女性も共に担うことを目標としており、男女の伝統的・固定的役割分担の廃止が男女平等に不可欠としている。その意味で、日本においても男性が育児や介護等家庭の中のことを女性と共にできる社会を構築していかなければならない。講演は西村氏自身の体験も交えながら、企業においてどのように男性の育児参加が推進されているか、課題は何かを語るものであった。まずイクメンとは、積極的に育児に関わっている男性のことを指し、ファザーリング・ジャパンでは「育児をする男性はカッコいい」というメッセージを発信し、男性の育児参加を積極的に推進している。管理職にも育児の大切さを知ってもらおうと「イクボスプロジェクト」という活動も行なっている。育児休暇をとりたいと思っている男性は多いのに、実際の取得率は 2.6%で、職場の雰囲気からとりづらいという。そこで上司から意識を変えてもらおうというのである。ようやく企業もワーク・ライフ・バランスのあり方に目を向け始めているという。どのようにして実現したらよいか、政治家に働きかける、企業に働きかける、また保育園自体のあり方も変えていく、そうしたことを議論し、意義深い講演であった。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 9 月 15 日(金)

実施都市：東京都杉並区

実施場所：杉並区役所

実施内容：杉並区保健福祉部保育課へのインタビュー、にじのいるか保育園の現地見学及びインタビュー

成 果：杉並区保健福祉部保育課へのインタビューにおいては、「すぎなみ保育緊急事態宣言」を行った経緯、杉並区への保育所入所申込み者が増えている理由、待機児童がなお存在する理由、保育園増設に伴う困難、保育士の確保、保育園の民営化などについてお話をうかがった。その結果、待機児童問題は保育園の偏在とも関わること、保育園増設には用地の地価高騰もあり、また近隣から反対の声もあがったりして簡単にはいかないこと、保育士確保には家賃補助もしていること、コスト削減のために区立認可保育所の民営化もやむを得ないことなどを知った。いろいろな問題点が実際にはあることを知り、大変勉強になった。にじのいるか保育園の訪問とインタビューにおいては、保育園の数々の設備を見させていただき、実際に子どものことを考えて保育環境を整備することの重要性を知った。近隣住民への配慮からガラスは防音ガラスを使うなどしている。子どもを、社会の子どもとしてあたたかく見守り、育てていく必要性を感じた。

（８）天田 城介（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

現代日本社会において人びとが生きていく場所としての地域を考える

<授業の概要>

現代日本社会においてどのように人びとは生きていくことが可能にする場所として、あるいはその逆に人びとが生きていく上での困難を生み出す場所として地域がある。その地域においてどのような仕組み（家族、福祉、医療、教育、労働、社会運動、産業など）によって人びとが生き延びていくことを可能にしたり、困難にしたりしているのかを探求する。

演習Aでは、ゼミ生のそれぞれの問題関心を大事にしつつもゼミで共通のテーマを見出しながら、サマースクールでのフィールドワークを実施すると同時に、一年間を通じて東京郊外（具体的には八王子・多摩・日野地域など）をフィールドにインテンシブなフィールドワークを実施し、それらをもとに徹底的に分析・考究していくことになる。演習は当該地域のテーマに関する基本文献の講読と同時に、受講生の研究発表を中心に進める。報告者・司会者・討論者といった役割を毎回決めて、受講生による主体的なゼミ運営を行う。

<活動内容>

2017年度は、前期では9月12日（火）～14日（木）に実施された「中央大学FLP 地域・公共マネジメントプログラム平成29年度サマースクール in 須坂」の準備もかねて、八王子市・多摩市・日野市などの都市郊外が戦後日本社会においてどのように形成されたのかを学習しながら、ジェンダー・貧困・格差・差別・労働・教育・福祉などを切り口に新聞記事やドキュメンタリーなどの具体的事例を読み解いた。当初、6月からは自分たちの足元である八王子市・多摩市・日野市を中心に貧困や困難を抱えている家庭を訪問したり、超高齢化する市営住宅を訪問したり、コンビニやファミレス等のオーナーがどのようなしんどさを抱えているのかインタビューしたり、市議会等のローカルな意思決定の場でどのような議論がなされ予算が執行されているか等々を調査する予定であったが、サマースクールにおける研究計画書の作成、質問項目の設定、インタビュー対象者の選定などに大きな時間を割かざるを得なかったため、今年度はサマースクールでの調査を重点的に実行することにした。同時並行して調査を進めてしまうと、いずれも中途半端になってしまうことを回避するために優先課題を選択したのではあるが、演習A単独のゼミ運営は調整が必要であると判断した。

その後、サマースクール調査の主題を「須坂市における20～50代の子育て中の母親とその社会関係」とし、当該テーマを「ジェンダー」と「労働」の視点から解説するという形で調査を設計した。こうした調査設計のもとでより緻密かつダイナミックな調査を行うための準備を進めていった。こうしたインタビュー調査を実行し、その結果・考察・政策提言をサマースクール最終日の成果報告会で報告した。

後期は、サマースクールのインタビュー調査が主に須坂市役所や須坂市中央児童センター（子育て支援センター）等の公的機関であったため、当事者である母親への直接にインタビ

ユー調査ないしは質問票調査を調査する必要があるとの判断に達し、10月からは須坂市の保育園に調査協力をお願いして質問票調査を行った。

質問票調査は、行政の支援の網の目から零れ落ちている母親の不安や葛藤はいかなるものであるのか、母親たちの社会関係はいかなるものであるのか、どのようなサービスを期待しているのか等々を中心に構成した。須坂市日野保育園に全面的に調査協力をしていただき、2017年11月14日～24日の期間に当園を利用する母親60名から回答を得た（134名母親中60名／回収率45%）。なお、日野保育園を選定した理由は、当園は須坂市の中心地に近く、また長野市へのアクセスも良いため、長野市に通勤している母親や中心地から通っている母親、保育園近辺に住んでいる母親などの多様な利用者がいると考えたためである。

上記の質問票調査の結果として、子育て期にある母親の半数近くが孤独を感じており、また特に育休中などで社会から切り離された状況になるとその孤独は強まり、保育園や仕事をきっかけにその孤独は解消される傾向が読み取れることを明らかにした。この結果から、育休中の母親の孤独を緩和するために必要な社会サービスの一つは「ピアサポート」とであると判断し、政策提言として「ふらっとカフェ つながり構想」を提唱した。12月16日（土）の期末成果報告会でその結果をまとめ報告した。幸いにも須坂市役所の方々からも高い評価を得ることができ、大変実りある報告会となった。

年度末はFLP報告書の作成を行うと同時に、2018年度より本格的に実施する東京郊外調査プロジェクト（八王子市・多摩市・日野市）のフィールドワークを検討した。具体的には、東京郊外調査プロジェクトを当該自治体や支援団体と共同で進めながら、定期的に調査報告会を実施し、最終的には調査報告書として完成するための年間計画等を議論した。

FLP天田ゼミは2017年度が初年度であり、サマースクールをゼミの中にどのように組み込むかで判断が難しかったこともあって多少ゼミ運営で判断に迷うところがあったが、全体としては、学生たちは非常に熱心かつ緻密にインタビュー調査や質問票調査に取り組んでくれたため、きわめて実りのある一年になったと思う。2018年度に本格的な調査プロジェクト始動に向けた社会調査を行うことができたし、調査プロジェクト全体について学ぶこともできた。

（９）新原 道信（文学部・教授）

FLP演習A

<テーマ>

「3.11以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

<授業の概要>

地域に入っていく、“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加し学んでいきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、栃木県日光市と新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。さらに、ゼミ生各自は、様々なかたちのフィールドワーク——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、台湾調査にむけての準備を整え、台湾調査を実行しました。

普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2017年8月29日(火)～2017年8月31日(木)

実施都市：栃木県日光市

実施場所：鬼怒川温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

FLP演習B

<テーマ>

「3.11以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

<授業の概要>

地域に入っていく、“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加し学んでいきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえります。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創る

ことによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行いました。

成 果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

FLP演習C

<テーマ>

「3.11以降」のコミュニティ形成のための「フィールドワーク力」養成

<授業の概要>

地域に入っていく、“社会のオペレーター”として社会で活躍していく力を身につけるため、2年次には、前期から夏休みの合宿にかけてフィールドワークの「技法・作法と倫理」「理論と方法」——生身の現実への理解力、フィールドへの入り方、ひととの接し方、関係のつくり方、所作、マナー、エチケットなど——を学び、サマースクールに参加、低関与型フィールドワークを体験します。後期以降は、サマースクールの成果をとりまとめ、3年次からは、他の新原ゼミ（院・学部・FLP国際協力）の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」を中心に、関与型フィールドワーク（参与観察）を実践し、4年次には個人のプロジェクトを立ち上げ実践することをめざします。ゼミ生有志の合同プロジェクトである「立川プロジェクト」は、院・学部・FLP（国際協力と地域公共）ゼミ有志で立川や砂川地区、被災地での活動に参加し学んでいきます。

<活動内容>

「新原ゼミ」は、文学部の学部と大学院、FLP「地域・公共マネジメント」と「国際協力」という、多様なゼミの総称です。4つのゼミには、中央大学のすべての学部（法、経、商、文、総合政策、理工）から多才な学生が集まり、総勢60名以上で、社会学の理論やフィールドワークの方法を学んでいます。

フィールドワークは、文献から学ぶとともに、実際に身体をうごかし、生の声を聴くこと、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ともに考え・かく〉ことを大切にする学問です。大学の外に出て、あらゆることに耳をすまし、出来る限りそれらを記憶・記録し、その意味を考え、調べ、ふりかえます。一つ一つのことを慎重に行い、地域で暮らす人たちの想いや歴史を丁寧に理解し、信頼関係を築きあげていくことを心がけています。

新原ゼミの特徴は、一人一人が「自分で道を切り開く」こと、そういうひとたちが「ともに場を創る」ところです。年間のスケジュールから毎回のゼミ、司会進行、記録まで、誰が何をやるのか、フィールドワークの成果をどうまとめていくのか、合宿は何のために行き、何をするのか——〈教えられたり指示されたりする前にまず自分で始めてみる〉こと、〈チャレンジしたからこそ直面する「困難」や「危機」から学ぶこと〉を大切にして、毎年ゼロから、ゼミ生皆で話し合っ方針を決めてきました。

そうして、4ゼミ合同の夏合宿・フィールドワークを行い、夏・秋・冬の節目には、文学部・大学院・地域・国際・「立川プロジェクト」が合同で、報告会や懇親会を開催しました。普段は別々のゼミで活動する学生が、ゼミをこえた「場」をともに創ることによって、自分とは異なるものの見方や、自主的に何かを創ることの大変さ、大切さを学んだのではないかと思います。

こうした活動のなかで、栃木県日光市と新潟県湯沢町でフィールドワークを行い、世界における日本を見つめなおしました。またC生のなかには、様々なかたちのフィールドワーク

——一人で海外に出て行ったり、じっくりと一つの場所でボランティアをつづけたりして、国際協力ゼミの学生と協力して台湾調査にむけての準備を整え、台湾調査を実行した学生もいました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2017年8月29日(火)～2017年8月31日(木)

実施都市：栃木県日光市

実施場所：鬼怒川温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年9月4日(月)～2017年9月6日(水)

実施都市：新潟県湯沢町

実施場所：越後湯沢温泉街

実施内容：4つのゼミの学生をシャッフルして班を構成し、短期集中型フィールドワークのための事前調査、フィールドワーク、事後調査を行ないました。

成果：合宿成果合同報告会を4ゼミ合同で行い、観光開発の問題を中心とした調査の成果をとりまとめました。

対象演習：C

実施日：2017年11月2日(木)～2017年11月5日(日)

実施都市：台北市（台湾）

実施場所：台北市内・礁溪温泉

実施内容：事前調査に基づき、観光と開発、コロニアリズムの歴史などをテーマとして、国内調査との比較に基づき、台湾でのフィールドワークを実施しました。

成果：台湾側の調査協力者との連携により、台北および宜蘭での総合的なフィールドワークを実施できました。

(10) 黒田 絵美子 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

＜テーマ＞

地域文化振興の実践 (1)

＜授業の概要＞

フィールドワークとして中心となるのが、9月にパルテノン多摩で行われる「パル多摩フェス」です。具体的な内容としては、路上を使った野外イベントの企画・実施です。4年前のフェス立ち上げ時とその前身のイベントの時代から黒田ゼミが関わっており、4月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、出演者選考、実施に向けての各出演団体との打ち合わせ、企画立案と本番に向けた準備、リハーサル、本番、実施後の反省会と次年度へ向けての調整、といった流れで年間を通してゼミ活動を行います。

この他に、新ゼミ生の興味に応じて別企画に挑戦していただきます。過去の事例では、東大和市の公立中学校での落語会プロデュース、川越市施設での落語会プロデュース、六本木のストライプハウスギャラリーでの能楽教室及び能楽公演サポートなどがあります。

＜活動内容＞

前期は、サマースクール（須坂市）におけるフィールドワークのテーマ「SNS活用の活性化」について事前調査を行った。また、9月のパル多摩フェスに向けて企画・打ち合わせ・準備を行った。サマースクールでは、須坂市役所の関係部署および須坂市から委託を受けて市の広報サイトを作成している会社を訪問、聞き取り調査を行い、うまくいっている点と問題点を洗い出した。それを踏まえて、各世代層が興味を持って関われる参加型の地域活性化手法を模索した結果、フォトコンテストとSNSによる投稿を組み合わせたMAPづくりを提案することに決定。実施方法がわかりやすくなるよう、サンプルを作り、期末報告会にてプレゼンをした。

パル多摩フェスでは、活動の中心となるB生をサポートする形で、事前準備と当日の運営を行った。

＜実態調査・見学調査・講演会＞

対象演習：A・B・C

実施日：2017年8月28日(月)、9月4日(月)、9月11日(月)、9月14日(木)・15日(金)・16日(土)・17日(日)

実施都市：東京都多摩市

実施場所：パルテノン多摩

実施内容：パル多摩フェスの企画打ち合わせと準備

成果：ゼミの独自企画である「ペタンぷ」(2016年度より実施開始)について、前年度の成果を踏まえつつ、新年度のオリジナリティを出すべく打ち合わせと試行錯誤を重ねて本番に臨んだ。生憎、2日目は雨天中止となったが、かえって雨天

時の対応、野外イベントにおいて臨機応変に対処することを学ぶ良い機会となった。実施した1日目には来場者（おもに子供連れの家族）に人気を博し、自分たちが時間をかけて企画・準備してきたイベントが子供たちに喜んでもらえる達成感を十分に味わった。また、急遽中止となったことにともなって、主催者との対策会議や後片付け（用意した物品や借りた資材などの処理）など、イベントを無事に収束させるための対応を体験でき、大きな学びとなった。

F L P 演習 B

<テーマ>

地域文化振興の実践 (2)

<授業の概要>

フィールドワークとして中心となるのが、9月にパルテノン多摩で行われる「パル多摩フェス」です。具体的な内容としては、きらめきの池特設舞台や大階段、路上を使った野外イベントの企画・実施です。4年前のフェス立ち上げ時とその前身のイベントの時代から黒田ゼミが関わってきておりますので、4月の準備段階からパルテノン多摩のスタッフ（多摩市職員、パルテノン多摩事業部職員）との会議、実施に向けての企画・立案・準備、本番、実施後の反省会と次年度へ向けての調整、といった流れで年間を通してゼミ活動を行います。

<活動内容>

9月にパルテノン多摩主催により行われるパル多摩フェスで、スタンプラリーの企画を任されている。2016年度に前B生が発案したペタンぷという企画は、通常のスタンプラリーではなく、エコバッグにゼミ生手作りの様々な形と色のスタンプを押してもらい、参加者のオリジナルバッグを完成させてもらう企画である。今年度B生も基本的にはそのスタイルを踏襲しつつ、新たなコンセプトを加えた。4か所に設置するテーブルそれぞれに、海、山、空、宇宙というテーマを付与し、そのテーマに合ったスタンプを作成した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2017年8月25日(金)

実施都市：長野県須坂市

実施場所：須坂市役所

実施内容：聞き取り調査

成 果：須坂市役所の関係部署および須坂市から委託を受けて市の広報サイトを作成している会社を訪問、聞き取り調査を行い、うまくいっている点と問題点を洗い出した。それを踏まえて、各世代層が興味を持って関われる参加型の地域活性化手法を模索した結果、フォトコンテストとSNSによる投稿を組み合わせたMAPづくりを提案することに決定。実施方法がわかりやすくなるよう、サンプルを作り、期末報告会にてプレゼンをした。

対象演習：A・B・C

実施日：2017年8月28日(月)、9月4日(月)、9月11日(月)、9月14日(木)・15日(金)・16日(土)・17日(日)

実施都市：東京都多摩市

実施場所：パルテノン多摩

実施内容：野外フェスにおけるスタンプラリー

成 果：ゼミの独自企画である「ペタンぷ」（2016 年度より実施開始）について、前年度の成果を踏まえつつ、新年度のオリジナリティーを出すべく打ち合わせと試行錯誤を重ねて本番に臨んだ。生憎、2 日目は雨天中止となったが、かえって雨天時の対応、野外イベントにおいて臨機応変に対処することを学ぶ良い機会となった。実施した 1 日目には来場者（おもに子供連れの家族）に人気を博し、自分たちが時間をかけて企画・準備してきたイベントが子供たちに喜んでもらえる達成感を十分に味わった。また、急遽中止となったことにともなって、主催者との対策会議や後片付け（用意した物品や借りた資材などの処理）など、イベントを無事に収束させるための対応を体験でき、大きな学びとなった。

F L P 演習 C

<テーマ>

地域文化振興の実践 (3)

<授業の概要>

「パル多摩フェス」実施に際し、後輩への指導的立場で企画・実践に携わる。また、パルテノン多摩職員やフェス運営者たちとの良好な関係を後輩たちに繋いでいく役割も果たす。さらに、サマースクールにおける実地調査の仕方やテーマの見つけ方、プレゼンの仕方についても後輩たちに助言を行う。さらに、演劇や古典芸能を通じた地域文化振興というゼミのテーマに立ち返り、ゼミの時間に古典芸能の代表作の映像資料を鑑賞する。学びの仕上げとして、研修旅行を目指す。

<活動内容>

パル多摩フェスの準備に向けて、後輩たちへのアドバイスを行った。サマースクールのテーマ、調査手法の決定に際し、A 生によるプレゼンにコメントをした。また、期末報告会のプレゼンの練習にも複数回参加して、パワーポイントスライドの創り方や見せ方について助言を行った。C 生ゼミの時間には、落語、能、狂言の代表作の映像資料を観て、日本の伝統芸能に関して基本的な知識をプレゼンし合い情報共有した。それをもとに、これまで自分たちが体験してきた寺における落語会や能楽鑑賞会を振り返り、地域文化振興に古典芸能が果たす役割について、改めて考え、意見交換を行った。これらの学びの集大成として、1 月に 2 泊 3 日で兵庫、大阪へ出かけ、宝塚歌劇や吉本新喜劇といった、地域に根差す演劇や芸能の実態調査を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 8 月 28 日(月)、9 月 4 日(月)、9 月 11 日(月)、9 月 14 日(木)・15 日(金)・16 日(土)・17 日(日)

実施都市：東京都多摩市

実施場所：パルテノン多摩

実施内容：野外フェスにおけるスタンプラリー

成 果：ゼミの独自企画である「ペタンぷ」(2016 年度より実施開始)について、前年度の成果を踏まえつつ、新年度のオリジナリティーを出すべく打ち合わせと試行錯誤を重ねて本番に臨んだ。生憎、2 日目は雨天中止となったが、かえって雨天時の対応、野外イベントにおいて臨機応変に対処することを学ぶ良い機会となった。実施した 1 日目には来場者（おもに子供連れの家族）に人気を博し、自分たちが時間をかけて企画・準備してきたイベントが子供たちに喜んでもらえる達成感を十分に味わった。また、急遽中止となったことにもなって、主催者との対策会議や後片付け（用意した物品や借りた資材などの処理）など、イベントを無事に収束させるための対応を体験でき、大きな学びとなった。古典

芸能の映像資料鑑賞と研究発表、ディスカッション、そして、研修旅行を行うことにより、ゼミのテーマである「地域文化振興」について具体的な演目や演者、現地の劇場や周辺環境を踏まえて、学ぶことが出来た。

(11) 小林 勉 (総合政策学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミは「スポーツによる地域活性化」の可能性について研究を行っているゼミである。A生の活動は大きく分けて2つあり、1つ目が、B生が主となり企画・運営をした、Jリーグクラブのブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトである「福+ (ふくたす) プロジェクト」のサポート。2つ目が長野県須坂市で行われたサマースクールへの参加である。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2017年9月1日(金)～2017年9月5日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市八橋運動公園陸上競技場

実施内容：9月3日にあきぎんスタジアムで行われたブラウブリッツ秋田のホームゲームの会場設営を行い、さらに、スタジアムの周辺施設でゼミ生が企画した各種スポーツイベントを実施した。

成果：ブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトも4年目となり、多くの人に活動を認知していただけるようになった。プロジェクトの参加者数もこの3年間で3.2倍に増加している。

対象演習：A・B

実施日：2017年9月26日(火)～2017年9月28日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：CNA アリーナ★あきた

実施内容：今年度実施された「8 人制バレーボール大会」にご協力いただいた秋田県 8 人制バレーボール連盟の方々に、プロジェクトの御礼や来年度の協力依頼などを行った。

成 果：ご協力いただいた方々に直接お会いできたことにより、来年度のネットワークを構築することができた。

対象演習：A

実 施 日：2017 年 10 月 21 日(土)～2017 年 10 月 24 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：あきぎんスタジアムにて行われた明治安田生命 J3 リーグ第 28 節対ギラヴァンツ北九州戦にて、ブラウブリッツ秋田側の観客へ向けて、POMS 調査（アンケート形式）を実施した。

成 果：POMS 調査では、サッカーの試合を観戦することで、抑うつなど、気分において正の効果が相対的に多く表れたことがわかった。

F L P 演習 B

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

J リーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

小林ゼミは、「スポーツによる地域活性化」をテーマとし、秋田県秋田市をホームタウンとする J3 リーグ「ブラウブリッツ秋田」との共同プロジェクトを実施しています。今年で4年目となるプロジェクトは「福+（ふくたす）プロジェクト」と題し実施致しました。本プロジェクトは「普段はあまりスポーツに馴染みのない高齢者」を対象に様々なスポーツイベントを企画、運営することにより、健康な身体を作っていただくと共に、新たな人との繋がりを構築していただくことを目的としています。また、今年度は「POMS（気分プロフィール調査）」と呼ばれる心理テストを用いて「みるスポーツ」の効果についての研究を行い、近年注目されている「高齢者フレイル」への対策モデルの検討を行いました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017年7月1日（土）

実施都市：東京都北区

実施場所：味の素フィールド西が丘

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「サポーター体験」の協力団体である「BLUE+AKITA（ブルータスアキタ）」のコールリーダーへのご挨拶と共に、今年度のプロジェクト協力の承諾を得るため、直接お会いしプロジェクト内容に関してお話をいただいた。

成果：今年度のプロジェクトにて実施された「サポーター体験」への協力の承諾を得ることができた。また、学生と協力団体とのネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実施日：2017年7月11日(火)～2017年7月13日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：CNA アリーナ★あきた

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施された「8人制バレーボール大会」の実施に向け、ご協力いただく秋田県8人制バレーボール連盟会長へのご挨拶及び今年度の協力依頼を行った。

成果：今年度のプロジェクト内容にご理解いただくと共に、ご協力の承諾を得ることができた。また、先方とのネットワークを構築することができた。

対象演習：B

実施日：2017年7月21日(金)

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学）

演題：POMS 調査に関して

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11560 教室

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施する「POMS（気分プロフィール調査）」に関する知識を得るため、専門家である今村先生をお呼びし、実施方法や選考研究等をご教授いただいた。

成果：プロジェクト内での実施に対するイメージの構築や実際の実施イベントの選定等が可能となった。また、POMSに関する知識を深めることができた。

対象演習：B

実施日：2017年7月27日(木)～2017年7月30日(日)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市中心市民サービスセンター

実施内容：今年度のプロジェクト内で実施する「ふらっと講演会」の広報活動及び施設確認を行った。また、プロジェクト協力者へご挨拶にお伺いした。

成果：広報活動の実施により、参加者を得ることができた。また、プロジェクトにご協力いただける方に直接お会いしたことにより、ネットワークの構築が可能となった。

対象演習：B

実施日：2017年8月2日(水)～2017年8月5日(土)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：今年度のプロジェクト実施に向け、ブラウブリッツ秋田の社員の方へのご挨拶を行うと共に、プロジェクトの実施内容や目的、展望等を共有した。また、プロジェクトにご協力いただく中央大学OBの方々へご挨拶にお伺いした。

成 果：ブラウブリッツ秋田の社員の方とプロジェクト実施内容を共有することができた。また、ご協力いただく中央大学 OBの方へご挨拶を行うと共に、今年度の実施内容に関してお話させていただき、協力の承諾を得ることができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 8 月 8 日(火)～2017 年 8 月 11 日(金)

実施都市：秋田県潟上市

実施場所：天王多目的健康広場

実施内容：秋田県大仙市と潟上市で行われるグラウンドゴルフ大会に足を運び、今年度のプロジェクトの広報活動を行った。また、プロジェクトにご協力いただく関係者の方へご挨拶にお伺いすると共に、実施内容に関してお話させていただいた。

成 果：プロジェクト参加者を得ることができたと共に、プロジェクトにご協力いただく関係者の方にご協力の承認を得ることができた。また、様々な場所で広報活動を行うことができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 8 月 19 日(土)～2017 年 8 月 24 日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：秋田市中心市民サービスセンター

実施内容：今年度のプロジェクトの一環である「ふらっと講演会」を県内のサービスセンター3箇所にて実施した。講演会は現地の高齢者や中央大学の学生を対象とし、「高齢者フレイル」の危険性や対策、「みるスポーツ」の効果等を医学博士の先生にお話していただいた。

成 果：現地の高齢者の方々に「高齢者フレイル」を知っていただくと共に、その対策やご自身の「健康」について改めて考えていただくきっかけとなったのではないかと。また、学生自身も研究内容に関して知識を深めることができた。

対象演習：B

実 施 日：2017 年 8 月 25 日(金)～2017 年 9 月 5 日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：株式会社ブラウブリッツ秋田

実施内容：9 月 3 日のブラウブリッツ秋田ホームゲームにて行われる「福+（ふくたす）プロジェクト」実施に向け、最終準備と事前打ち合わせ等を行った。また、プロジェクト参加者を集う広報活動も実施した。

成 果：今年で 4 年目となるブラウブリッツ秋田との共同プロジェクトを無事に実施することができた。学内のみでは経験することのできない「現場」での雰囲気や立ち居振る舞いを実践的に学ぶことができ、学生個人が成長することができた。

対象演習：A・B

実施日：2017年9月26日(火)～2017年9月28日(木)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：CNA アリーナ★あきた

実施内容：今年度実施された「8人制バレーボール大会」にご協力いただいた8人制バレーボール連盟の方々にプロジェクト実施報告とご協力の御礼、来年度の協力依頼等を行った。

成果：今年度の実施に関してお礼をすると共に、実施報告を行うことができた。また、A生と共に伺ったことにより、来年度のネットワークの構築を行うことができた。

対象演習：B

実施日：2017年10月20日(金)～2017年10月24日(火)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：プロジェクト当日のみならず、「試合内容によって心理的効果が異なるのではないか」という仮説のもと、継続的に調査を実施するため、ホームゲームに足を運びPOMS調査を実施した。

成果：プロジェクトの際と比較調査が行えるよう、一定数のサンプルを採集することができた。また、試合内容に関しても異なる結果を得ることができ、分析・研究に役立つ結果を得ることができた。

対象演習：B

実施日：2017年11月18日(土)～2017年11月20日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：「試合内容によって心理的効果が異なるのではないかと」という仮説のもと、継続的に調査・研究を行うため、ホームゲームに足を運びPOMS調査を実施した。

成果：様々な内容の試合にて調査を行うことにより、より信憑性のある研究を行うことが可能となった。結果のみならず、試合内容によっても異なる結果が得ることができた。

対象演習：B

実施日：2017年11月24日(金)

講演者：今村 貴幸 氏（常葉大学）

演題：POMS調査におけるデータの有意性と活用方法

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 11560 教室

実施内容：プロジェクト及びその後の継続調査にて採集した POMS のサンプルを用いて統計処理を行った結果に関し、ご意見をいただくと共に、今後の研究に関してご助言をいただいた。

成 果：調査結果に関する理解を深めると共に、学生で統計を行った結果に関する考察をいただいた。また、今後報告書をまとめる際に活用できるご助言等をいただくことができた。

FLP演習C

<テーマ>

スポーツによる地域活性化の可能性に関する研究

<授業の概要>

Jリーグのホームタウンの事例にみられるように、スポーツによって地域が大きな盛り上がりを見せるなど、近年、「地域」と「スポーツ」が結び付けられて論じられることが多くなっています。こうした捉えられ方はいつ頃から、どのような経緯の中でなされてきたのでしょうか。本授業ではそうした経緯について理解を深めながら、スポーツによる地域活性化の可能性について検討していきます。それと同時に、「スポーツの素晴らしさ」だけを焦点化するのではなく、地域活性化にスポーツを結びつけて考えようとする際の様々な課題についても検証します。

地域で展開されるスポーツの実情を踏まえながら、「地域とスポーツ」の関係について多角的な観点から検討できるようになることが、本授業の大きな目標です。

<活動内容>

今年度、小林ゼミ FLP 演習 C では、協働で活動を行っているスポーツ・健康科学プログラムの学生とともに、以下の2つの活動を行った。

1.「ブラウブリッツ秋田福+プロジェクト」での事業推進・研究のサポート

本ゼミの演習 B の学生が取り組んだ、「ブラウブリッツ福+プロジェクト」において、プロジェクト推進及び、研究のサポートを行ってきました。前年の2016年に取り組んだ同プロジェクトでの活動経験を活かし、本年度プロジェクトの事業・調査研究としての前進に寄与した。

2.「長野県須坂市における地域活性化へのスポーツ・健康イベントの活用可能性」の検討と 同市への政策提言

本ゼミの演習 A の学生と共に、長野県須坂市を対象にフィールドワーク及び同市への政策提言を行った。近年地域活性化の文脈において注目されている観光と、健康都市として注目されている須坂市の健康という強みを結び付け、「スポーツ・健康イベント開催が地域活性化に寄与するのか？」という点について、現地で関係各所へのヒアリング調査・研究を通して検討した。最終的な調査結果を同市へ政策提言として提出した。

3.「ジュニア・スポーツの課題の検討」というテーマでの報告書作成

ジュニア・スポーツについて文献を基に、現状の課題整理・検討を目的とした報告書の作成を行った。国の政策に掲げられるほどに子供がスポーツを行うことによる効果が注目されてきている。しかし、一方で勝利至上主義や部活動における行き過ぎた指導などのスポーツのもたらす負の影響もある。本報告書では、現代スポーツにおける課題を明示しながら、今後のジュニア・スポーツの展望についての検討を行った。

以上3点の活動を通して、体系的に理論を学ぶだけでなく、「地域社会とスポーツの関係性」について、実際の現場の視点も踏まえた検討を行った。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B・C

実施日：2017年7月1日(土)

実施都市：東京都北区

実施場所：味の素フィールド西が丘

実施内容：「福+プロジェクト」内で実施された「サポーター体験」の協力団体である「BLUE+AKITA(ブルータスアキタ)」コールリーダーへの挨拶と共に、協力依頼、プロジェクトの概要説明を行った。

成果：今年度「福+プロジェクト」内で実施した「サポーター体験」への協力依頼を得ることができた。また、学生と協力団体とのネットワーク構築に寄与した。

対象演習：C

実施日：2017年9月2日(土)～2017年9月4日(月)

実施都市：秋田県秋田市

実施場所：あきぎんスタジアム

実施内容：「福+プロジェクト」でのイベント実施における事前準備・当日マネジメント及び事後処理のサポート。

成果：昨年度の経験を活かし、円滑にプロジェクトが推進していくようにサポートしたことにより、イベントの成功と調査研究における前進に貢献した。

(12) 堤 和通 (総合政策学部・教授)

FLP 演習 A・B・C

<テーマ>

地域における犯罪予防と再犯減少策の調査研究

<授業の概要>

ヒトの社会化と犯行者の社会統合、ひいては社会全体での暴力減少（私的支配領域の最大化）の法政策学をテーマとします。刑事司法の基本的理解を前提に、現行の制度によるものに加えて、犯罪（・暴力）要因について、地域の自治体や近隣地域、それに、児童福祉、家庭支援、精神衛生、教育など地域を拠点とする各機関が、どのように取り組んでいくことができるのかを考えます。

<活動内容>

2017 年度には、A 生は長野県須坂でのサマースクールの準備、実施と成果報告を中心に活動し、B 生は個人研究としてテロリズムと冤罪防止策の検討、報告を行い、C 生は、少年非行防止策の近時の展開例として米国の MST と日本の多機関連携を比較検討する卒論を作成した。2018 年 2 月 9 日（金）には、警察政策学会部会にて、A 生の調査報告と、C 生の卒論発表を行った。学部生 2 年次の報告としては部会で初の試みであり、また、C 生の発表は部会にて優秀賞を受賞した。

(13) 細野 助博 (総合政策学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

まちづくりの成功事例の定量的検証

<授業の概要>

近年の中心市街地の衰退は目を覆うばかりです。どうしてこのようになったのでしょうか。闇雲に注ぎ込まれる効果が不明確な「補助金」という税金からの投入分、それを取ってくることで自分の役目は終わったと勘違いし、それに異を唱えると「村八分」という地域のリーダーや商店街の雰囲気、一歩下がって市民協働を唱えるだけで、調整も規制もできないよという行政の消極的な姿勢、地域の衰退など自分達とは無関係と孤高を保つことだけに生きがいを見出す大学のプライド。こんなところ知るかとさっさと逃げ出す若者達の意識の低さ、皆で貴重な「生活の場」であるまちを壊しています。少子高齢社会が進みコンパクト化を進めるべき時代が到来しているのに、まちの「中心」として市街地が果たすべき役割を自覚していないところが問題なのです。細野ゼミはこの問題意識を共有し、理論と実践の両面から、まちづくりを調査研究します。

授業内容についてはおおまかに前期と後期に分けられ、前期は主に都市を調査・分析する上で必要となる基礎的な知識の習得を目標とし、Excel や統計、地図ソフトを活用した分析手法の習得や、都市を扱った代表的な論文の輪読などを通じて読解力・分析力を養います。そして後期では、前期で学習した内容を踏まえて実際のまちを“見る”（まちナビ）ことに主眼を置き、実地調査等を行いながら多くの事例を学びます。

2009 年度は、群馬県沼田市、宮城県仙台市や東京都福生市を調査対象として取り上げました。データ収集や現地ヒアリング等を通じて問題の実態を知り、グループワークによって分析検討し、具体的な政策提言を含んだ論文とプレゼンテーション資料等を作成しました。

2010 年度は、長野県富士見町との「都市農村交流」をはじめ、「学校跡地活用」に関して八王子のケースをもとに調査研究成果を現地にて発表しました。現地でケーキの材料になるルバーブの採取、ジャムに加工されるほおずきなどの摘み取りも経験し貴重な体験をしました。

2011 年度は、宮崎県小林市とのタイアップで六次産業化が地域振興にどのような効果があるかについて、現地でワークショップやシンポジウムを開催しました。

2012 年度は、横須賀市や立川市とのジョイントで、市政の課題について定量分析を行い、発表する機会を設けました。

2013 年度は、金沢市とのジョイントで「大学ゼミに金沢を研究対象にする」ためのパンフレット作りと、金沢の観光行政への提言書の取りまとめを行いました。

2014 年度は、福生市とのジョイントで外国人向けマップの作成、通行量調査、市報作成などを行いました。

2015 年度は、産学官連携組織のネットワーク多摩の調査事業に学部ゼミと共同で取り組み、立川市でアンケート調査をもとにワークショップ「立川のミライを考える」を実施しました。

2016 年度は立川に出来た郊外型ショッピングセンターが立川や多摩地域により魅力をもたらすための戦略作りのために、アンケート調査を行い、開発主体である立飛ホールディングスと運営主体である三井不動産とジョイントワークショップをおこないました。

2017 年度は新たに立川に出来た「アリーナ立川立飛」の活用方法について、全国の成功事例やアンケート調査に基づいて、具体的な提言と報告書の作成を行いました。

<活動内容>

細野ゼミは、「森を見て木を知る」いわば鳥の目と、「木を見て森を知る」いわば虫の目を養う事で、多様な観点と客観的な視点を持つことを目的に、社会に開かれた活動を続けています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 7 月 31 日(月)

実施都市：東京都立川市

実施場所：株式会社立飛ホールディングス

実施内容：アンケート調査の概要設定と打合せ

成果：アンケート調査の対象とそれに対応する質問項目の決定

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 8 月 31 日(木)～2017 年 9 月 2 日(土)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：LA VISTA 伊豆山

実施内容：統計学の基礎知識習得並びに統計ソフト等の使用法習得

成果：統計ソフト SPSS の使用方法とアウトプットの見方、解釈の仕方をお互いに習得すると同時に、上級生からの指導を受ける。

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 10 月 4 日(水)

実施都市：東京都立川市

実施場所：立川市役所

実施内容：アリーナ立川立飛と競合する施設群の確認作業と資料収集

成果：多摩地域にある規模の異なる体育館諸施設の立地や使用方法についての基礎史料を収集した。

対象演習：A・B・C

実施日：2017 年 10 月 30 日(月)～2017 年 10 月 31 日(火)

実施都市：東京都立川市・八王子市

実施場所：立川駅・八王子駅

実施内容：駅頭でのアンケート調査

成 果：有効サンプルを 1029 枚回収した。社会調査活動の楽しさ苦しさを味わい、貴重なご意見をもとにデータの細心な取り扱いへの確信が得られた。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2017 年 11 月 17 日(金)

実施都市：東京都立川市

実施場所：立川市柴崎体育館

実施内容：来館者のアンケート調査

成 果：有効サンプルを 56 枚回収した。社会調査活動の楽しさ苦しさを味わい、特に来館した中高年の方々の貴重なご意見をもとにデータの細心の取り扱いへの確信が得られた。

対象演習：A・B・C

実 施 日：2017 年 12 月 10 日(日)

実施都市：東京都立川市

実施場所：アリーナ立川立飛

実施内容：プロバスケットチーム観戦者へのアンケート調査

成 果：観戦者 313 名から有効な回答が得られ、アリーナに対し具体的な提言をするための貴重で具体的な意見が集まった。

中央大学全学連携教育機構

本報告書に関してお気づきの点等ございましたら、全学連携教育機構事務室（多摩キャンパス 5 号館
ペデ下ー学生部学生相談室上）までお問い合わせください。

<問い合わせ先>

全学連携教育機構事務室

TEL:042-674-3663

FAX:042-674-3666

E-mail:flp@tamajs.chuo-u.ac.jp